
Season 's Quest

新城寺ハヤト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Season's Quest

【Nコード】

N8676A

【作者名】

新城寺ハヤト

【あらすじ】

四季を司る神と住人たちの住む世界を舞台にした物語。主人公シグはゼル・リアという名の世界を旅する青年で話はシグがモルグナード地方を旅している所から始まる。日も暮れて野営をしていると、茂みの中でうずくまっている人間とはちょっと違う少女を見つけた。シグは少女を助けて、どうしてこんなところにいたのかと尋ねるが何を言っても少女は一言も口を開かなかった。そしてシグは勝手ながらこの少女の両親を探して旅の続きに出発する。そして：

かみさまとそのしそん

世界に季節というものが生まれたのはいつからだと思う？
季節がどうして春・夏・秋・冬と四つあるのか知っている？
ここ、ゼル・リアには古くから伝わるこんな話があった。

むかーしむかし、ゼル・リアにはせかいをまもるやくめをになつたかみさまたちがいました。そのなかでもひとときわうつくしく、そうめいであつたのがきせつをつかさどるかみさまでした。

きせつをつかさどるかみさまはじぶんにあたえられたちからをはる・なつ・あき・ふゆというよつつにわけ、それぞれのちからをもつたしそんをつくりだしました。

ほかのかみさまたちはみな、きせつのかみさまのこと「かみさまのくせにしそんをつくるなんておかしい」といっておこりました。

しかし、きせつのかみさまはいいました。

「きせつはこのさきなんびゃつかい、なんぜんかいとめぐるもの。このせかいゼル・リアとともにきせつもせいちようするものです。いつまでもふるいかみがそれをつかさどるちからをもつべきではありません」

それをきいたほかのかみさまはそれでもやっぱりきせつのかみさ

まのことをおこり
ました。すべてのかみさまにとって、かみさまがしそんをのこすな
どということはせかいをみはなすことといっしょだからです。

きせつのかみさまはいいました。

「せかいをみはなすのではありません。せかいをそだてるためにし
そんをのこすのです」

しかし、もうどのかみさまもきせつのかみさまのいうことなどき
いてはいませんでした。

やがて、きせつのかみさまはゼル・リアにたったひとりのこされ
てしました。かみさまはくものうえでなげきました。

「ゼル・リアのはんえいをねがうことはそんなにおかしなことなの
ですか？ かみさまがしそんをのこしてはいけないなんてだれがきめ
たのですか？」

みっかみばん、きせつのかみさまはくものうえでなげきました。
しかし、きせつのかみさまにだれもこたえをくれるものはいません
でした。やがて、きせつのかみさまはじぶんでそのこたえをみつけ
ることをきめ、ひとりしそんをのこすかみさまとしていきっていくの
でした。

第一章

く新たな地く

険しい山脈を越え、一人の青年は今、新たな地に足をつけようとしていた。

「ここがモルグナード地方か」

青年は子供のようににはしゃぎながら辺りを見回してみるのが、彼のいる周囲はどこもかしこも青々と茂る草ばかりである。

「キュく」

不意に彼の膝下辺りから可愛らしい鳴き声が聞こえた。青年の親友であり相棒であるオストリザードのテイルが鳴いていたのだ。

「テイルにもわかるのか？ここが今までとは違う土地だってこと」

青年の問いにテイルは「キュ」と短く鳴く。青年は頷くと、そのまま手綱を引っ張りテイルを走らせた。太陽もだいぶ西に傾いているので今から宿泊できるような村を見つけるのは難しいと思われる。（今まで一週間も険しい山越えだったからな。今日くらいは水の近くで野営をしたいところだ）

既に青年もテイルも山脈の土ぼこりや魔物との戦闘で体はだいぶ傷ついている。今日くらいはその傷を癒せるような場所に野営をしたかった。幸いにも今の青年達に最適な場所は比較的早くに見つかった。

青年はテイルから降りると手綱を引っ張り川辺に近づけた。そして、まずは自分がその水を飲んでみる。

「綺麗な水だ。テイル、お前も飲んでごらん」

「キュく」

テイルはまるで「やったあ」と言わんばかりに主人の許可が出る勢いよく水を飲みだした。一週間、青年を乗せて山を走り、水は皮袋の飲み水や山水ですごしてきたテイルにとってこの川の水はま

さに天の恵みとも言えた。青年はそんな親友の様子を満足そうに見届けていた。

一段落した後、青年は手早くテントを組み立て、水を汲み、かまどを作った。そして、干し肉でも焼こうかと皮袋の中に手を伸ばすが――

「キュ、キュ……」

ふいにテイルが青年に疑問を投げかけるように鳴く。

「どうした、テイル？」

青年はまだ気づいていないようだった。テイルは無言で火のついていないかまどに首を向ける。

「あ、薪を集めてなかったっけ。疲れてうっかりしていたな。ありがとう、テイル」

青年が微笑しながら礼を言うと、テイルはやれやれと言わんばかりに一声鳴いた。

青年はテイルにテントのある場所で待つように指示をすると、薪を集めるために辺りの散策に出かけた。あたり一面の草地のため、薪用の枝を見つけるのには少々骨が折れた。

（向こうのほうに森が見えるな。あそこになら木の枝くらいいっぱいあるだろう）

青年は草原の向こうに見える森のほうへと進路を変えて歩き出した。

鮮やかな黄緑色の草地を抜けた先にある森は夕日を浴びて黄金色に染まっていた。きつと朝に来たならば緑鮮やかな森へと変身することだろう。そして、青年の目的としてもものも森の中にはたつぷりと落ちていた。

（綺麗な水に綺麗な森か。モルグナード地方は緑豊かな土地が多いって聞いていたけどこれは感動ものだな）

青年はある程度の薪を集め、ふと空高く伸びている木々を見上げて考えてみた。ここにある木々はいったいいつからこの地方を守っているのだろうか。きつと、この森にはモルグナードを語るに足り

る歴史が刻まれているのだろうと。

サアッと青年の周りを柔らかい風が吹いた。

「おっと、そろそろ帰らなきゃ。テイルを待たせたままにしてあるし」

青年は名残惜しそうにもう一度辺りを見回した。

「また、明日来てみるか」

青年はよほどの森が気に入ったらしかった。旅をするということとはいつも危険と隣りあわせで生きることと同じである。そこに、安心できる空間などというものはもちろんない。そのせいか、青年はこの緑豊かな森に心を奪われていた。しかし、忘れてはならない。この森とて立派な危険だということを。

ウォーン。

狼の遠吠えが聞こえた。

ウォーン。

今度は今さっき聞こえた方向とは真逆の方向から遠吠えが聞こえた。いずれもかなり距離が近い。

青年は嫌な汗を掻いた。もしかすると、これはもしかするかもしれない。

できるだけ避けたかったが、青年はそう思いながら念のために持ってきていた槍に手をかける。

ガサ！

青年の正面の茂みが揺れ、ものすごいスピードで彼の横を駆け抜けていった。

「な、何だ！？」

青年は一瞬の出来事に目を奪われたが、すぐにそれを忘れた。青年に向かって一匹の狼が鋭い牙をむき出して噛み付いてきたのだ。青年は慌てず、槍で狼を口の中から引き裂いた。狼の血が周囲に飛び散る。その異臭は青年の鼻を大きく刺激したが、そんなことにかまっている暇はなかった。狼の群れが周囲の茂みから次々と青年に襲い掛かってきたのである。

「うわあ！」

青年は狼達の攻撃を避けるので精一杯だった。しかし、避け続けていくにつれ、わかったことが一つあった。どうも狼は青年のほかにもう一人か二人を攻撃対象にしているようだった。狼の目がたまに青年とは違う方向に向いているのがそのいい証拠だ。

青年だってこんなところで死にたくはない。その隙をつき、狼達を槍で次々と引き裂いていった。そして、最後の一匹を血祭りに上げた後、青年はへなへなと腰をぬかしてしまった。周囲の惨状は狼達の肉の欠片と血の匂いで充満していて青年は吐き気を抑えるのに必死だった。

カサカサ。

「！！」

まだいたか！？

青年はへっぴり腰のまま槍を構えるが、狼の次の手は来なかった。カサカサカサ。

今度も茂みが揺れる音だけで狼達が襲ってくることはなかった。しかし、警戒をしておくに越したことはない。青年はゆっくりと揺れる茂みとの距離を縮めて近づいていった。

茂みを左右に掻き分けてみると、そこに隠れていたのは狼でもまた、狼の子供でもなかった。

「子供？」

青年は目を疑った。どうしてこんなところに子供がいるのだろう。見た感じでは大きく見積もっても七歳程度で、その顔は恐怖に歪んでいた。

（僕のことを怖がっているのか？）

青年はすぐにそう判断すると、顔の筋肉を緩めてそっと少女に手を差し伸べた。

「驚かせてすまなかった。もう狼はいないから安心して」

青年がそう言っても少女の顔が恐怖から開放されることはなかった。そこで、次に感じたことが周囲のこの匂いだった。確かにこん

な悪臭の中でのうのうと話などできないだろう。青年は少女についておいでとだけ言うと、先を歩いた。置いていかれると思ったのか、少女は小さな二本の足で懸命に青年を追ってきた。戦闘のため、あたりに散らばった木の枝を拾いなおした青年はその足でテイルの待っているテントへと戻った。

「すまん、テイル。遅くなって」

青年はすぐに薪をくべてかまどに火をともした。

「すぐにできるからね」

青年はそう言ってにっこりと微笑むと、夕食の準備に取り掛かった。今日の夕飯は、干し肉をあぶったものと、野菜のスープである。

「はい」

青年はカップに注いだスープを少女に手渡した。

「熱いから気をつけて飲みなさい」

青年の言うとおり、よく冷ましてからスープに口をつけた少女だったが、やはりまだ熱かったらしくすぐに口を離してしまう。それから二人と一匹は簡単な食事を済ませた。

「お腹いっぱいになったかい？」

青年の問いに少女は小さく頷く。「それはよかった」と青年も嬉しそうに微笑む。

「君にはいろんなことを聞きたいんだけど、まず一つ目。君はどうして一人であんなところにいたの？」

「……………」

少女は青年の問いにビクッと肩を震わせると、怯えるように黙ってしまった。

「じゃあ、おうちはどこかな？今日はもう無理だけど明日になったら送って上げられるから」

「……………」

少女はやはり何も答えなかった。こんな調子であと一つ二つ質問を繰り返した青年だったが、何も答えてもらえないと判断すると、深いため息をついてつぶやくように言った。

「自己紹介をしておこう。僕の名前はシグだ。君は？」

「……………」

自己紹介をしても少女は結局口を開くことはなかった。そんな少女に対してシグは怒りをあらわにすることはなかった。きつと、狼に襲われた経験が彼女の口を閉ざしてしまっているに違いない。まずはこの子の恐怖を取り除くことから始めなければならない。

この子の家がある町についてはなにもわからないが、少なくともモルグナード地方の住人であることは確かなのだから、地方を回ればきつとこの子の家が見つかるだろうと確信していた。

夜が明け、シグたちは昨晚の野菜スープ一杯とパンの朝食をとると、早速旅の続きに出発した。

「……………」

「どうしたの？」

テントも片付けていざ出発しようというときになって、少女が急にその場から動かなくなった。テイルの手綱を持ったままシグが少女に近づくと、それに合わせて少女も一歩、また一歩と後ろに下がっていく。

「もしかして、テイルのことが怖いのかな？」

シグの問いに少女は黙ったままだったが、しかし目線は明らかにシグではなくテイルのほうに向けられていた。

（そのようだな）

シグはテイルの手綱を放して、少女の前にしゃがんだ。

「怖がらなくていいよ。彼は僕の一番のお友達なんだ。名前はテイルっていうんだよ」

シグのやり取りにテイルもようやくどうして少女がこんな反応を見せるのか気づいたようだった。シグの紹介に乗っかるような形で優しく鳴いてみせる。

「ほら、テイルも君のことを気に入ってくれているみたいだよ」

「……………」

「怖くないから、おいで」

シグはそう言って少女に向かって優しく右手を差し出した。少女はシグとその後ろに立っているオストリザードを交互に見やった。

「おいで」

シグはもう一度優しく、ささやきかけるように言った。少女はおずおずと手を差し出すと、シグに連れられてテイルの背中に乗せられた。

「よし、いくぞ、テイル」

「キュ！」

テイルはやる気満々と言わんばかりに鳴くと、そのしなやかな足を使って草の生い茂る草原を駆けていった。

旅は軽快に進んでいき、太陽が南に昇る頃にはすっかり草原を抜けて風の薫る丘を二人を乗せたテイルは走っていた。

「そろそろ休憩しようか。ずっと乗ってて疲れただろ？」

シグの問いに少女はやはり黙っていたが、もう慣れた反応だったのでシグは少女の答えなくして、テイルに休憩を申し入れた。

小さな丘にたつ一本の木の下で、二人と一匹は休憩と昼食を取っていた。

「うーん、風が気持ちいいなあ」

シグはテイルから降りて、大きく伸びをした。ゆったりとした風が伸びをしているシグの周りで舞を舞っていた。

「こっちはもう春なんだなあ」

「キュ」

シグに同意するかのようにテイルも気持ちよさそうにその身に風を受けていた。

「春……かあ」

シグの目に遠い国の影が映った。

「……………」

「……だいじょうぶ？」

「え？」

シグはつぶっていた目をハッと開いた。どうやら少し寝かけていたようだ。

「だいじょうぶ？」

少女の震えるような声がもう一度そう言った。

「あ、うん。大丈夫だよ」

シグは優しく微笑んだ。初めて少女から話しかけてきてくれたことが少し嬉しかった。よく見てみると目の中の恐怖も昨日に比べたらもうずいぶんマシになっている。

「風が気持ちよくてつい、寝そうになっていたよ」

シグが笑いかけると、少女もフツと口元を緩めた。今、この瞬間だけシグは自分が旅人であることを忘れていた。世界にはこんな景色もあるのだということを初めて体感した感動をもう少し味わっていたかったからだ。

「こうやって目を閉じると、とても気持ちいいよ」

シグはそう言って目を閉じると、隣に座る少女にも「やってごらん」と働きかけてみた。少女もシグがやっているように目を閉じて両手を組んで枕にして横になってみた。

「気持ちいい……」

シグは薄れつつある意識の中で少女が心から気持ちよさそうに言うのを聞いていた。

「キュ？キュ、キュ〜！」

そんな安らぎも束の間。突然、一緒に寝ていたテイルが大声で鳴いた。

「どうした、テイル!？」

相棒の突然の悲鳴にシグは慌てて飛び起きた。

「キュ！」

テイルは向こうを見てみると言わんばかりに首を動かしている。シグは向こうに何かあるのだということにすぐに気がつき、丘の上

から平原に続く道を見渡してみる。

「な、なんだあれは!？」

シグはしばらく、それがある一点を凝視していた。辺りがそうであるようにそこもどう見たって普通の平原だ。その普通の平原である場所に立つ一本の光の柱。

「さっきまで、あんなのなかったよな…?」

少なくとも彼らがここで休憩を取っていた最中にあんなものは存在していなかった。

「何かの入り口と考えるのが妥当だな。もしや、古の空中庭園につながる門か? いや、詮索するのは後回しだな。いくぞ、テイル!」
「キュ!」

シグは期待に胸を膨らませてテイルに飛び乗った。そして乗った後で突然の出来事に困惑している少女がいるのに気づく。シグは一度テイルから降りると、少女の前にしゃがんだ。

「少しあの光っているところまで行ってくるけど、すぐ戻るからここで大人しく待っていてくれないか?」

しかし、少女は大きく首を横に振り、シグのズボンをしっかりと掴んで離さなかった。

（しょうがないな……）

シグは小さなため息をつく、少女をテイルに乗せた。

「ゴー! テイル!」

シグは勢いよく手綱を引っ張った。テイルは一声鳴き、一路丘のふもとの光の柱に向かって走り出した。

ふもとにたどり着いたシグは改めて光の柱を見上げた。

「間近で見ると相当大きな門だな」

シグはとりあえず柱の周囲を調べてみたが、それらしい入り口はどこにも見当たらなかった。

「このまま、入るのかな?」

「……」

シグがあごに手を当てて考えている横を少女がすっと通り過ぎて

いった。

「キュッ！」

テイルが短く叫ぶ。

「あ、こら！」

シグが我に返ったときには少女は既に光の柱の中へと入っていた。光の柱の中に入った少女はやがて、その場に存在しなかったかのように虚空へと消えた。

「消えた！？くそ！」

気がつくど、シグも少女を追って光の柱の中に入っていた。どこへ通じるかもわからないのにこのまま放っておくことなどできるわけがなかった。

光の柱に入ると、吸い込まれるように上へと引き上げられる間隔が訪れた。

「テイル、お前はさっきの木の所で待っている！すぐに戻る！もしあの子が帰ってきたら……」

シグの言葉はそこで途切れ、やがて彼の姿は光の柱から消えていた。テイルは自分も後を追おうと考えたが、シグが虚空に消えてからすぐに光の柱も消滅してしまった。

「キュ……」

テイルは先ほどまで光っていた場所に向かって一声鳴くと、主人の言いつけ守り、丘の木の下へと移動を始めた。

第一章

く古の世界く

気がつくときシグは見知らぬ場所に寝かされていた。

（ここはどこ……だろう？）

シグはベッドから上半身を起こして、周囲を見回してみる。それから、自分がどうしてこんな場所に眠っていたのかを考える。

（確か、丘の上で昼食を取っていたら急にふもとに光の柱みたいなものが現れて、それを調査していたんだよね。調べていたらあの子が勝手に光の柱の中に入っていた……）

シグはそこで自分の周りにあの少女がいないことに気がついた。

「あの子はどこだ？」

もしや自分とはぐれたのか。いや、しかし自分がこのような場所で寝かされていたのだからおそらく少女もどこかで無事に保護をされているはず。

「探しにいかなくちゃ……」

シグがベッドから離れようとするのと同時に部屋の扉がゆっくりと開いた。扉の外から現れたのは背中まである長い髪に、白を基調とした法衣のようなものをまとった少女だった。

「あ、もう気がつかれたんですね」

少女は安堵の表情でシグのもとまで歩み寄った。そして、その暖かく小さな手でそっとシグの両手を握った。

「お久しぶりございます。シグ様」

シグはあまりにも突然な出来事に口を金魚のようにパクパクと動かしながら綺麗な目で上目遣いに自分を見る少女に驚いていた。

「あの、シグ様？」

少女は完全に固まってしまったシグ心配そうに見上げる。

「まだ、ご気分が優れないのですか？」

「え？ あ、いや、その、そんなことは……」

シグはようやく我に返るものの、顔は茹蛸のように赤く、下手をすると本当に倒れてしまいそうだった。

「よかった……」

少女は本当にシグのことを案じていたのだろう。泣きそうになるのをこらえて、微笑んで見せた。

その笑顔に一瞬見とれていたシグだが、すぐにまた我に返り、少女に手を離すように言った。少女もようやく気がついたのか、顔を赤くしてすぐに握っていたシグの手から自分の手を離した。

「ご、ごめんなさい。私ったらつい……」

「いえ、気にしないでください」

シグはとりあえず形式的な微笑を浮かべた。突然ではあったものの、今まで旅を続けてきたシグにとって女性に手を握られるというのは嬉しいハプニングだったからだ。

「本当にごめんなさい。シグ様に久しぶりに会えたものだからつい、嬉しくって」

「あの、そのことなんだけど……」

シグはずっと疑問に思っていた。今もさっきも、この少女は自分のことを名前で呼んでいた。自己紹介などした覚えもないのに。

「君はどうして僕の名前を知っているんだ？ それにお久しぶりって？」

シグがそう言うと、少女はまた深々と頭を下げて謝った。そして、少女はどうしてシグの名前を知っているのかを話してくれた。

「シグ様は覚えていらっしゃるかもしれませんが、私とシグ様は一度あっているのですよ」

「え？」

シグは自分の記憶の中を探ってみるが、そのどこにもこんな綺麗な少女とあった記憶はなかった。

「十年前、私は誤ってこちら・ジェラーデからゼル・リアに落ちて

しまいました。その時、途方にくれていた私を助けてくれたのがシグ様でした。シグ様は泣いていた私にクッキーをくれました。『うちでつくったクッキーだよ。美味しくて悲しいことも忘れるから』
と言って」

「……………」

「それから夜は危険だからと言って、家に連れて行ってくれました。『お母さんに見つかるとうるさいから』と言って裏口から入っていたのも覚えています」

少女は本当に懐かしそうに語っていた。

「その晩はシグ様の部屋で一晩を明かしたのですが、夜明け前、貴方も先ほど通ってこられた光の柱を伝って私はラ・ジェラーデに帰りました。柱が現れたのはあまりにも突然だったため、何の御礼もできずに本当に申し訳なく思っていました」

少女は「ですが」と続けた。

「こうしてまた会えたのはきつと私のご先祖様がシグ様に恩返しをしなさいとお達しになったからだと思っています」

「……………」

「思いたしませんか？」

少女がおずおずと尋ねてくる。

「残念だけど……………」

シグは申し訳なさそうに目線を下げた。

「そうですか…」

少女は本当に寂しそうな顔をしていた。しばらく気まずい雰囲気の流れていたが、シグはずっと気になっていることを少女に尋ねた。
「一つ、いいかな？」

「なんででしょう」

少女の声から既に寂しさは感じられなかった。シグは話の割に少女があまり寂しさに打ちひしがれていないと楽観視して、自分の疑問をぶつけることにした。

「君はさっきの話の中でラ・ジェラーデから落ちてきたと言ったね

？」

「はい」

少女は小さく頷く。

「ということは信じがたい話なのだが、ここは季節の精霊が住むと言われている世界ラ・ジェラーデなのか？」

「その通りです」

少女は即答した。

「昨日シグ様が保護をしてくれたあの子も、ラ・ジェラーデの住人。春を司る巫女の子供です」

「春を、司る？」

季節をコントロールできるなんて大層なことはシグにはとても想像できなかった。

「コントロールをするわけではありません。私たちの仕事は人間達の住む世界ゼル・リアに季節を運び、見守ることだけです。意図的に季節を変えたりすることはできません」

「そうなのか？」

「はい」と少女は頷いた。

「ここではなんですので、少し神殿の中をご案内しましょう。私たちが生まれるきっかけになった歴史もわかってもらえenと思いますよ」

少女は「行きましょう」と言って再びシグの手を取るが、シグの顔が朱に染まっていくのを見て、すぐに手を離れた。

「ごめんなさい。私ったら嬉しくて…」

少女はまた深々と頭を下げ、その度にシグは困ったように気にしないでと笑う。

「ところで、君の名前を覚えてくれないか」

「私の名前ですか？」

少女は可愛らしく首を傾げる。

「本当は覚えていなければならぬのだろうが……」
シグは申し訳なさそうに顔を下げる。

「そ、そんなことはないです！私が浮かれすぎたのが悪いのですから！」

少女は力いっぱい首を横に振った。その度に背中まである長い黒髪が大きく左右に揺れる。

「私の名前はファナリアーテ・ミルチェリーヌです。ラ・ジェラーデの皆さんからはファナと呼ばれています」

「じゃあ、僕もファナって呼ばせてもらっていいかい？」

「はい！」

ファナは嬉しそうに何度も何度も頷いた。それからシグはファナの案内でラ・ジェラーデの神殿の中を見てまわった。

「ここで働いている巫女は季節を司る巫女達の中でも上位の者だけなんです」

「なるほど」

「ラ・ジェラーデでは春・夏・秋・冬を司る巫女達がいて、その上に彼女達をまとめる中位の巫女が各季節ごとに百人選ばれます。そして、その中でさらに優秀な巫女がこの神殿に勤める資格を得るのです」

「なるほど」

（つまり、ゼル・リアの軍隊と同じってことか。一般兵がいて、その上に指揮官がいてみたいな感じだな）

シグは頷きながらゼル・リアもラ・ジェラーデも階級制度というものと同じ形式をとっているらしいことを知った。

「そして、ここが部屋を出るときに話したラ・ジェラーデの歴史を記した本がある資料室です」

「大きいんだね」

シグはこのまま天まで続いているのではないかと錯覚させるくらい高い天井にみとれていた。ファナは様々な本が納められている棚の中から一冊を手にとって、シグの前で読み始めた。

むかーしむかし、ゼル・リアにはせかいをまもるやくめをになっ

たかみさまたちがいました。そのなかでもひとときわうつくしく、そうめいであつたのがきせつをつかさどるかみさまでした。

きせつをつかさどるかみさまはじぶんにあたえられたちからをはる・なつ・あき・ふゆというよつつにわけ、それぞれのちからをもったしそんをつくりだしました。

ほかのかみさまたちはみな、きせつのかみさまのこと「かみさまのくせにしそんをつくるなんておかしい」といっておこりました。

しかし、きせつのかみさまはいいました。

「きせつはこのさきなんびゃつかい、なんぜんかいとめぐるもの。このせかいゼル・リアとともにきせつもせいちようするものです。いつまでもふるいかみがそれをつかさどるちからをもつべきではありません」

それをきいたほかのかみさまはそれでもやっぱりきせつのかみさまのとおこり
ました。すべてのかみさまにとって、かみさまがしそんをのこすなどということはせかいをみはなすことといっしょだからです。

きせつのかみさまはいいました。

「せかいをみはなすのではありません。せかいをそだてるためにしそんをのこすのです」

しかし、もうどのかみさまもきせつのかみさまのいうことなどきいてはいませんでした。

やがて、きせつのかみさまはゼル・リアにたったひとりのこされてしました。かみさまはくものうえでなげきました。

「ゼル・リアのはんえいをねがうことはそんなにおかしなことなのですか？ かみさまがしそんをのこしてはいけないなんてだれがきめたのですか？」

みっかみばん、きせつのかみさまはくものうえでなげきました。しかし、きせつのかみさまにだれもこたえをくれるものはいませんでした。やがて、きせつのかみさまはじぶんでそのこたえをみつけることをきめ、ひとりしそんをのこすかみさまとしていきていくのでした。

「これがラ・ジェラーデに古くから伝わる私たちの歴史の始まりを書いたものです」

「驚いた。神様なんて本当にいたのか……」

「わかりません。少なくとも私たちの世界ではこのように伝えられていますし、私たちの祖となった神様もいると信じています」

あまりにスケールの大きな話にシグはいささか目眩をおこしそうだった。

神殿の案内は小一時間ほどで終わり、シグはファナに進められて街を散歩することにした。

ファナが言うところによると、季節の精霊世界ラ・ジェラーデは大きく三つの区画に分かれていて、さっきまでシグがいた神殿は神殿区と呼ばれている区域で一般の巫女達は内部までは入れないらしい。てっきり他の区域もファナが案内してくれるものだと思ってい

たのだが、彼女にも仕事があるらしく残念そうにシグを送り出していた。

（本当に綺麗な街だなあ。空の上だっていうのに噴水まである）

シグは昨日訪れたあの森のことを思い出した。

（あの森も狼さえいなければ極上の憩いの森なんだろうけどね）

そうはいかないのが、ゼル・リアだった。

シグはふと考えた。いつからゼル・リアには魔物が存在するようになったのだろう。そもそも魔物というのは人間と動物、それらの姿をとった別種類の生き物だといわれている。では、彼らはどこから来たのだろう。魔物が人間や動物のような主の存続方法を取るなんて報告は今までに一度もされていない。となれば、自然と数は減っていくはずなのだが、そんな報告もなぜなかった。

（もしかしたら、このこともラ・ジェラーデや他の精霊たちの歴史と関係しているのかな？だとしたらおもしろいよな）

どこから来てどこへ行くのか。

これはいつの時代でもどの動植物に関しても当てはまるテーマである。

（それにしても…）

シグはさっきから自分に向けられている視線の数々に疑問を感じていた。どちらかというと人間という精霊とは相容れられないものの進入に対しての不快ではなく、シグ自体に興味を示しているように思われた。

（本当に何なんだろう。気になるなあ）

シグはこの周囲にいる誰かに声をかけてみようかと試みようとするが、不意に服の裾を誰かに引っ張られ、その試行を中断させられてしまう。

「君はもしかして……」

服装こそ変わっていたが、顔立ちや背の高さから見てもシグの助けたあの子で間違いなさそうだった。

「よかった。無事でいたんだね。心配したんだぞ？」

「……ごめんなさい。でも、早く帰りたいかったから」

少女はぼそぼそとか細い声でつぶやいた。シグは少女の前にしゃがみ、その頭を優しくなでた。少女は嫌がることはなく、むしろシグとの再会を喜んでいるようにも見えた。

「お兄ちゃん、ごめんなさい」

少女は急に悲しそうな顔になって謝った。

「私ね、ゼル・リアに落ちたの初めてだったから怖くて……お兄ちゃんのことも。ごめんなさい」

「そうだったんだ。大丈夫だよ、君の気持ちはよくわかってるから。いきなり狼に襲われて怖かっただろう」

シグの問いに少女は小さく頷いた。

「私の名前、ココルって言うの」

「ココルちゃんか。いい名前だね」

シグがそう言うてにつこりと笑うと、ココルも嬉しそうに微笑んだ。

「お兄ちゃんにこれ上げる」

ココルはスカートのポケットから何かの塊のようなもののシグに手渡した。

「これはなんだい？」

「はるのけっしょう」

「春の……結晶？」

シグがココルの言った言葉を繰り返すと、ココルは小さく頷いた。「私、はるのみこだから。はるのけっしょうを持ってるの。とても暖かいでしょ？」

「うん。でも、ココルには大事なものなんじゃない？ もらうわけにはいかないよ」

「いいの。お兄ちゃんに持っていてほしいから。お兄ちゃんがゼル・リアに帰ってもココルのことを覚えてくれますようにって」

「……わかった。ありがたくもらっておくね」

シグのその一言にココルの顔が明るく輝いた。

「ここにシグ殿はおられるか！」

噴水が湧き出る一角に響いたその声に、シグはココルに家に帰るように告げると、自分を探しているらしい巫女の下に歩み寄った。

「僕がそうだが？」

「ファナリアーテ様が至急貴方にお話したいことがあるそうなので、私と共に神殿にお越しく下さい」

「わかりました」

シグは頷くと、兵士のような格好をした巫女の後について、再び神殿区へと戻ってきた。

「こちらです」

（こっちは確か…）

ファナが神殿を案内していたときに最初に訪れた場所だ。玉座があったがその主は不在だったようだが。

（そんなところに連れて行ってどうするつもりだろう。ファナが呼んでいたのではなかったのか？）

シグは不審に思いながらも玉座のある間へと入る。

「シグ様をお連れしました」

巫女兵士が告げる。

「ご苦労様でした。引き続き見張りのほうをよろしくお願いしますね」

「はっ！」

巫女兵士は丁寧に頭を下げると、玉座の間から去っていった。今、この場にはシグと玉座の主しかいない。

「驚いたな」

シグはつぶやいた。

「まさか、君がラ・ジェラーデの女王様だったなんて」

「女王様だなんて大層な身分じゃないですよ。私はただ、ここにいらっしゃる皆さんの意見をまとめるだけですもの」

ファナはそう言ってペロリと舌を出した。玉座に座る者が照れ隠しのために舌を出す姿なんてシグは初めて見た。そして、つくづく

彼女がラ・ジェラーデの女王だとは信じがたかった。

「シグ様をお願いしたいことがあるのです」

シグの心のうちなど知る由もなくファナが本題を切り出した。

「実はココルちゃんの他にもゼル・リアに誤って落ちてしまった人や興味心からゼル・リアに旅立って戻ってこない人がいるのです。後者の人の場合も心配なんです。が、前者の場合、最悪人間や他の種族につかまっている可能性が高いのです」

シグはそこまで聞き、ファナの頼みごとを理解した。

「つまり、彼女達を助けてくればいいのか？」

「はい、お願いできますか？」

ファナの頼みをシグは二つ返事で承諾した。どうせ旅人に行きあてなどどこにもない根無し草の身。断る理由などどこにもなかった。（それに、ここにいれば人間と精霊の関係もわかるかもしれない）

「わかった。まずは、どこに行けばいい？」

「シグ様がいた丘から南東にある森から力の波動が一つ伺えます。まずはそこをお願いします」

「了解」

力の波動というのがシグの興味を引いたが、まずは彼女の仲間を助けることをシグは優先した。

「それで、僕はここからどうやっても解いた場所に戻ればいいんだ？」

「はい。ゼル・リアへの移動は私が行います」

「ファナが？」

「そうですよ？」

ファナは怪訝そうにシグを玉座から見下ろした。なぜだか、この少女からだと自分が見下されている感じがしなかった。

「わかった。じゃあ、お願いします」

シグは深く追求をせずにおいた。ファナはやはり怪訝そうにしていたが、すぐに引き締めた顔つきになると、口を小さく小刻みに動かして呪文のようなものを唱え始めた。

シグの周りにあの時の光がまた生み出される。それは柱になるくらいまで成長を続けると、シグを包み込んだ。

「頑張ってください、シグ様……」

先ほどまで目の前に男がいた場所に向かってファナは祈るようにつぶやいた。

第二章（前書き）

主人公シグは精霊の少女ココルを助けたことで精霊界ラ・ジェラーデに招かれる。そこでシグは過去、シグに助けられたという精霊神ファナリアーテと出会う。そして、ゼル・リアに落ちてしまったというファナの親友を探し出すために、再びゼル・リアへと戻った。

第二章

く再び森へく

光の柱に包まれ、目の前にいたファナがシグの目の前から消えた。そして、次の瞬間、シグは光の柱を見つけた丘のふもとにいた。

「ここは、さっきの場所か」

シグはふと空を見上げてみた。太陽は光の柱に吸い込まれたときと大きく位置は変わっていない。むしろまったく同じ位置にあった。(どうやら向こうとこっちでは時間の流れ方が違うみたいだな) そういうえば古の古城にいった同業者が酒場でそんなことを言っていた。

「そういうえばテイルはどこだ？」

確か、テイルも光の柱のそばにいたはずなのだが……

「キュゥ！」

丘の上からオストリザードの鳴き声が聞こえた。

テイルだった。

「テイル！」

シグは丘の上から一気に駆け込んでくるオストリザードを両腕を広げて迎えた。

「そういうえば丘の上で待っていると言ったんだっけ」

「キュ！」

「……お前、どのくらいの時間僕を待っていたんだ？」

当然聞いたところでテイルから答えが帰ってくるはずはなかった。彼は不思議そうに首をかしげてシグを見つめるばかりだった。

「まあいいか。よし、テイル。旅の続きに出発するぞ。目的地は昨日キャンプした場所だ」

「キュ、キュゥ？」

テイルはどうしてそんなところに戻る必要があるんだと言わんばかりに首を傾げて鳴いた。

「ちよっとした野暮用ってところかな。さあ、いくぞ」

「キュ！」

テイルは短く一声鳴くと、しなやかな足をフル回転させてもと来た道を再び走り始めた。

道中は特に問題なく、一人と一匹は簡単に昨日キャンプを行った草原に戻ってきた。

「確か、昨日僕がきたほうから見て西の方角だったから今度は東かな」

シグは東の方角を凝視してみる。あたり一面明るい緑の草たちの奥に見える木々の集まり。

「あそこだ。テイル、あの森に行くぞ」

「キュ！」

テイルは頷く代わりに一声鳴いた。昨日は長い草に足をとられたりもしたが、今日はテイルがいるため草原を歩くのにまったく苦労がいらなかった。あっという間に森の前にたどり着いた。シグはテイルから降りると、森を見上げた。

「綺麗な森だろう？」

シグが森を見上げているのを真似て、テイルも同じように森を見上げる。

「ほんと、狼さえいなかったら僕はここで木こりでもして暮らせると思うのにな…」

シグはぼそっとそんなことをつぶやきながら再びテイルに乗って森の中に入っていった。

「ファナが言うにはこの森のどこかに彼女と同じ精霊の仲間がいるはずなんだ」

シグは森の中を慎重に探りながら誰に向かっていうわけでもなくつぶやいた。

「テイル、お前も聞いたら驚くだろうけど、昨日助けたあの女の子、

コルっていうんだけど、あの子は春を司る精霊なんだってさ」

テイルはシグの言葉に耳は傾けているようだが、彼が何を言っているのかはよく理解していないようだった。

「いきなり言われても困るよな。僕も困ったもの。でも、僕とココルが吸い込まれたあの光の柱は精霊たちの住む世界ラ・ジェラーデに繋がっていて、僕はそこで昔、僕が助けたという精霊たちのリーダーに会ったんだ」

「キュー？」

「別に怖いところだったわけじゃないさ。街並みは僕たちが旅をしてきた中で見てきた街並みと同じだよ。精霊たちも、精霊と言っても姿は人間とまったく変わらなかったよ。すごくいいところだった。なんていうか混ざった感じがしないって言えばいいのかな」

テイルは黙ってシグの話の続きを待つ。

「空気も綺麗で、まるでこの森のようだった。ただ、一つ気になることがあるんだ」

気になること、と言わんばかりにテイルが短く鳴いた。

「確かにゼル・リアでも精霊や妖精と言ったら女の子の姿をしているものが一般的だったけど、まさか本当に女の子しかないなんてことはないよな？」

シグはそれもありかと考えたが、ファナの話しぶりだと、ラ・ジェラーデもゼル・リアと同じくらいかもしれない。それはそれ以上に歴史のある世界らしい。種が存続するための手段だって、当然あれのはずだ。（あれは男と女がいないと始まらないからな。まさか女性同士でつてわけではないだろうし）

流石にそっちの気はない。

（まあ、どっちみち僕は男だから被害に遭うことはないと思うけど……）

しかし、どうにもあれだけ純粋な世界で女同士というのはやはり世界の純粋さを汚すようで想像し難かった。

「テイル、何か感じないか？」

シグはあてずっぽうで相棒に聞いてみるが、テイルは怪訝そうに鳴くだけだった。

苦笑しながらシグはテイルを犬のような扱いにしたことを心の中で詫びた。ちなみにオストリザードの嗅覚はゼル・リアの生物学上では人間よりも嗅覚が悪いとされているため、テイルに匂いで精霊を探させようなんていうことはお門違いなわけだが。そもそも精霊に匂いなんてあるのかどうか、そこが怪しいところだった。

シグたちの入った森は意外と深く、道を一直線に進んでいっているだけなのにいまだ森の出口に差し掛かる気配がなかった。森の深部になればなるほど増していくのは魔物との遭遇確率だけだった。

「一直線に進んできたけど、そろそろ別の別れ道に入ったほうがいいのかな」

シグは目の前に立ちはだかる十字の別れ道を前にそんなことをぼやいた。もちろんマッピングはしてあるから迷うことはないのだが、これだけ歩いて精霊を探し当てることができないとなると、別の方向に進むしかなくなってくる。

「右か左か、はたまた直進あるのみか……」

シグは手に持った自作の地図と、現在の別れ道とを見比べながらどっちに進むべきかを考えた。悩んだ挙句、シグは直進することを選んだ。

（こういうことになるんだったらファナに精霊を見分けるための方法を聞いておけばよかったな）

内心後悔しながら、シグはまっすぐテイルを歩かせた。しかし、もしかしたらずっと続くかと思われた直線の道のりも呆気なく終わりを告げた。

「行き止まりか……」

そこは小さいが、泉が湧き出ている小さな広場上になっていた。一人と一匹はそこで少し休憩を挟み、再び先ほどの別れ道に戻ってきた。シグは別れ道を順番に探索しながら、もと来た道に戻っていた。そして、森に入って最初の別れ道があった場所で深く掘られ

た井戸を見つけた。

「昔使われていた地下水道か。こんなところにいるとは到底思えないけど……」

シグは手書きの地図を見た。森の分かれ道は全て行き止まりかつ、精霊らしい姿は見えなかった。

（昨日のココルの例も考えて姿を隠すことができる力はないみたいだから、あと考えられるのはここだけってことになるな）

シグはテイルにその場で待つように指示をすると、井戸の梯子を伝って地下へと降りていった。

森の中の地下水道は涼しいというよりはむしろ寒いくらいで、シグの服装ではいささか寒さを防ぐには事足りなかった。シグは全身の震えに耐えながら、地下を歩いていく。そこでもやはり魔物と遭遇するわけだが、この魔物たちは一体どうやってこの井戸に入ったのかシグの気になるところであつたりもした。

（まあ、体を温める意味もあつてここでの戦闘は嬉しいものがあるけれど）

幸い魔物たちはそれほど強くなく、シグの動きを見切れるような強者はいなかった。

さらに幸運なことは、地下水道はどうやらずっと一本道のように、迷う心配もなかったのだが、水道の幅は決して広くなく、どう考えても隠れられそうなどころはないはずなのに精霊の姿はまったくみづからなかった。

（やっぱりここじゃなかったのかな……？）

何度引き返そうかと思つたかわからないが、こうして道が続いている以上、奥にいる可能性を賭けて進むしかなかった。

「きゃあー！！」

突然響き渡る女の叫び声。密閉された空間だけにその叫び声にシグは耳を抑えずに入られなかった。もちろん、耳を押さえずにはいられなかったのは魔物も同じようで、水道のあちこちから魔物がわらわらと逃げ惑ったり、右往左往を繰り返したり、中には当然シグ

を犯人だと思い込み襲い掛かってくるものもいた。

「くそ、いい迷惑だな」

シグは槍を前方に構え、振り回しながら魔物を蹴散らし、道を作った。しかし、魔物たちは蹴散らされてもすぐに体勢を整えて追ってくる。こうなれば、三十六計逃げるにしかず。シグは全力で魔物の手から逃げ切らなければならなかった。

「ハアハア……だいぶ奥まで来たな」

シグは息を整えながら前を見据えた。少し奥には岩のようなものがあった。道を塞いでいた。

「ここで行き止まりか」

シグは周囲を見回してみるが、彼の周りでは水が流れているだけで魔物も、先ほどの叫び声の主すらもいなかった。

「まさか、この岩の奥なのか？」

シグは思わずため息を漏らしそうになった。いくらシグが男でそれなりに力はあるとしてもこの岩をどかすことや、まして破壊することなどできるわけがなかった。

「ここまでか……」

シグの体に一気に疲労感が訪れる。それらしい叫び声まで聞いておいてこの仕打ちは何なんだろうとも思った。しかし、いくらシグが目目の前の岩を恨めしそうに睨みつけたところで、岩が勝手にその場をどいたり、壊れたりすることはなかった。

「ハア、骨折り損のくたびれ儲けだ。とりあえずファナに報告をしに帰ろう……」

シグはもう一度悔しそうに岩を睨みつけ、きびすを返した。

「プニョー！」

シグが行き止まりからきびすを返してすぐだった。そのわけのわからない奇声が聞こえたのは。

「うわ!？」

不意を着いた頭上からの攻撃にシグは一瞬判断が遅れた。その隙を突いて、敵がもう一撃をシグに加える。

「な、何だこいつは……」

見た目はスライム系の魔物であるプルルだが、何より大きさがその何倍も違っていた。そして、特徴は大きさだけではなく、頭の上に乗っている氷。

「プルルにこんな親戚がいたんだなあ……」

「プニユ〜！」

プルルはシグに向かって氷のブレスを吐き出した。

シグはそれを軽く避ける。

「好戦的なやつだな。でも……」

シグは槍を構えた。敵が臨戦態勢になったことを確認したのか、プルルは再び氷のブレスをシグに向けて吐きつけた。

「一直線にしかブレスを吐いてこないところはやっぱりプルルの頭の弱さだよな」

シグは姿勢を低くしながらプルルに向かって突進する。

「ついでにブレスを撃った後の隙も大きい！」

シグはプルルとの間合いを詰め、槍をその柔らかい体に突き刺した。プルルは軟体生物であり、通常物理攻撃は効きにくいとされているのだが、プルルの体を構成している核は別格で、その部分だけはゼリーの膜が薄いのだ。もちろん、いかに戦いに熟練した兵士であってものなかなかプルルに一撃で止めを刺すのは難しい。核に届く前に貫通したゼリーの部分が回復して核への道を塞ぐのだ。だから一般的に知られているプルルの倒し方は――

「コアのある部分を細かく何度も叩くこと！」

シグは素早く槍を動かしてゼリー状の膜を分断しながら、ついにコアを突き刺し、そのままゼリー状の体ごと、真上に斬りあげた。

「ピギャッ！」

プルルは甲高い悲鳴を上げて、水の中へと溶けていった。

シグは戦闘が終わったことを確認すると、槍を下ろした。

「この地方のプルルは変わっているなあ。氷の息を吐く奴がいるなんて」

ふうっと息を一つつき、もう一度周囲を見回した。彼の勘だと、フアナが探してほしいと言っていた精霊はさっきのプルルに捕まっていると思っていたのだが――

「違ったか……？」

シグは深いため息をついた。やはり、ここにはいないみたいだ。もしかして、さっきの悲鳴の後、そのまま出口へと走っていたのではなからうか。そうだとしたら、完全な行き違いだ。

（いや、でも井戸の上にはテイルが待機しているはず）

テイルが精霊を足止めしてくれている可能性はかなり低いが、今はもうそれに期待するしかないだろう。

「よし、戻ろう」

「ま、待ってください！」

「え？」

今度こそ行き止まりからきびすを返したシグを呼び止める声。シグは後ろを振り返ってみるがやはりそこには道を塞ぐように大きな岩があるだけである。

「気のせいかな？」

シグは天井を見上げてみるが、落ちてくる様子も、はたまた忍者のように逆さづりになっている様子もなかった。

「あ、あの……ここです」

か弱そうな女の子の声はなんと地面から聞こえた。刹那、周囲の水の中から十代後半くらいの女の子が姿を現したではないか。

「!!!!」

シグはあまりの出来事に言葉を失っていた。確かに今、この少女は水の中から出てきた。

シグは鳩が豆鉄砲を食らったような目をしていたに違いない。目の前の少女に呼ばれるまで、シグの意識はいずこへと飛んでいたのだから。

「あ、あの……！」

少女は勇気を振り絞ったような緊迫した声をシグに向ける。

シグはようやく正気に返ると、目の前の少女——具体的な年齢をあげるとすれば十五歳くらいだろうか——に目をやった。この水のように澄んだ青色をリボンで可愛いらしくまとめている。具体的な年齢を十五歳とあげたが、それにしても同じ世代の女の子に比べたら小柄である。

「……………」

少女はシグに一声かけたっきり口を開こうとしなかった。それはどちらかというと、ココルのように無口だからというよりは、どこかシグを警戒しているように思えた。

「もしかして、君がファナの言っていた精霊？」

「ファナちゃんを……ファナリアーテ様を知っているんですか!？」

少女は仰天したように声を大にして言った。

「知っているも何も、僕は彼女に頼まれて君を探しに来たんだ。ラ・ジェラーデからゼル・リアに落ちたって心配していたよ」

「私、冬の巫女の修行中にラ・ジェラーデからここに落ちてきたんです。戻る方法もわからず、途方にくれていると水の香りがして、その香りの方向に進んでいたらここに来たんです」

「水の香りをたどってきた？」

シグが聞き返すと、少女は小さく頷いた。

（精霊っていうのはそんなこともできるのか？だとしても、水と同化するっていうのは少々行き過ぎのような気もするような……）

「あの……」

少女がおずおずとシグに声をかける。

「助けてくれてありがとうございます。ここに迷い込んでいたら、いきなり襲われて、自分の身を守ろうとしたつもりが、あの魔物に憑依する形になってしまっ……」

「憑依？」

またしても聞きなれぬ単語にシグは頭を抑えたい気持ちでいっぱいだった。対する少女は目を丸くしてシグを見つめていた。

「何？」

シグに声をかけられ、我に返った少女は急に声をかけられたこともあつてかあたふたとする。シグはそれを落ち着けながら、ゆつくりと話の続きを待った。

「えっと、ファナリアー様からは何も聞いていないのですか？」

ようやく落ち着きを取り戻した少女はそう言った。

「何も聞いていない。実は――」

シグは精霊の少女に昨日の出来事から今に至るまでの全てを話した。

「じゃあ、ココルちゃんもこの森に迷い込んでいたのですか!？」

その様子からすると、この少女はココルが森に迷い込んでいたことをまったく知らないようだった。

「君には他の精霊の力を感じ取る力はないのかい？」

「はい。そんな高等な力は私には。それに、私はあの魔物の精神^{なか}から動けませんでしたし」

「そうか。とにかくここを脱出しよう。ファナも君の帰りを待っているはずだ」

「は、はい」

少女は小さく頷いた。

第二章

く冬の精霊セラく

井戸の外ではテイルが主人の帰りを温かく迎えてくれた。

「待たせた、テイル」

シグはそう言ってテイルの頭を軽く撫でてやった。

「さあ、手を貸すから乗って」

シグは少女に手を差し出すが、少女は引きつった顔をしながら動こうとしなかった。

「大丈夫？」

シグが彼女の目の前で手を振って見せると、少女はびくびくとしながら頷いた。

「もしかして、テイルに怯えているのかい？」

少女は何も答えなかった。どうやらそのようなのである。

（ココルと同じような反応だな。まあ、しょうがないか。オストリザードももとは魔物の一種だからな）

「キュく…」

テイルは自分が嫌われていることに気づいたのか悲しそうに鳴いた。

（またこのパターンか…）

シグは苦笑しながら少女のもとに歩み寄った。

「君がプルルに憑依させられていたから魔物が怖いのはわかる。でも、こいつは俺の幼馴染なんだ。こいつのことは俺が一番よく知っている。テイルは絶対に人を襲ったりしないから。もちろん精霊もね」

少女は恐る恐るテイルの顔を、目を見た。その目からは魔物特有の殺意というものはまったく感じられず、ただひたすら自分と仲良

くなりたいという思いすら感じ取れた。

少女はゆっくりとテイルの前に立った。

「……噛みつかないですか？」

少女の問いにシグは頷いた。少女はテイルの頭にそっと手を置き、おっかなびっくりといった感じではあったが、彼の頭を撫でてやった。

「ごめんね、変に怯えたりして」

自分の頭を撫でる少女の気持ちが伝わったのだろうか。テイルは優しく鳴いた。

（やれやれ…）

シグは一人と一匹の和解を和やかに見守っていた。

二人と一匹は森を抜けると、再び昼食をとった丘のふもとへと戻っていくのであった。

「そういえば……」

シグは道中、思い出したようにつぶやいた。

「僕がラ・ジェラーデからこっちに戻っていくときにファナがあの時と同じ光の柱を出してくれたんだけど、もしかしてあれがないと丘のふもとに言ってもラ・ジェラーデには帰れないんじゃない？」

「そうですね」

少女はやけにあっさり頷いた。

「じゃ、じゃあどうするの。君をラ・ジェラーデに連れて帰る約束だったのに……」

「大丈夫ですよ」

少女は優しく微笑んだ。

「ファナリアーテ様は私が地下に閉じ込められていることを感じ取られたのですよね？」

「ああ」

「じゃあ、今もこちらへ向かってくる私たちの、私の力を感じているはずですよ。だから、大丈夫ですよ」

「そ、そう」

半信半疑だったが、今は少女のその笑顔を信じるしかなかった。確かにファナリアーテの人柄は仲間を見捨てるような少女には到底見えなかったし、この少女もここまでファナリアーテを信頼しているのだからシグが余計な心配をするのはそれこそ下世話の極みである。

少女の言うとおりに、丘のふもとが肉眼で見えてくる位置まで来ると、光の柱は突然その場所に現れた。

「テイル、またここで待っていてくれないか。多分、すぐに戻ってくると思うから」

「キュウ」

テイルは力強く頷いた。

「ありがとう、テイルさん」

少女はそう言って丁寧な頭を下げると、テイルは嬉しそうに一声鳴いた。

そして再びラ・ジェラーデに戻ってきた二人は真っ先に神殿区の精霊王の間へと向かった。玉座に座っていたファナは少女を見るなり、一直線に彼女の胸へと飛び込んでいった。そんなファナに少女は何度も「ごめんなさい」と謝っていた。

「シグ様、本当にありがとうございました。なんとお礼を言ったらよいかわかりません」

「そんなに改まって言われると照れるな……」

シグは微笑しながら後頭部を掻いた。

「あの、ファナちゃん……じゃなくてファナリアーテ様、この方のお名前はもしかしていつか仰っていた……」

驚いた表情の少女にファナは小さく頷いた。

「そうだよ、セラちゃん。この人が、そうなの」

ファナの頬はいつの間にか少し赤く染まっているように見えた。

「そうだったんだあ……」

セラと呼ばれた少女は今度はシグのほうに向いて優しく微笑んだ。「貴方がシグ様だったのですね。ファナリアーテ様からよくお話は

伺っています」

「その話しぶりだとそうみたいだね。ファナは僕のことをどんな風に話していたのかな？」

「フフ、それは…」

「セ、セラちゃん」

ファナが顔を真っ赤にして必死にセラの肩をゆすった。シグは直感でよほど自分が過大評価をされているのだと感じ、苦笑をした。

「私、ファナリアーテ様からいつもシグ様の話を聞いていたんです。それでいつも想像していたんです。どんな人なんだろうって。シグ様は……」

セラは少し間をおいてからにっこりと微笑んだ。

「ファナリアーテ様が話してくれていた通りの人でした」

「そ、そうなんだ」

人からこんな風に自分を褒められたことのなかったシグは顔を赤く染めながら、せわしなく鼻の頭や後頭を掻いたりしていた。ファナとセラのシグ談義はその後、ファナの側近が咳払いをするまで続けられていた。

「あ、もうそろそろ次の仕事にいかなくちゃ。シグ様、今日は本当にありがとうございました。今日は神殿区の客間にお泊りください」

「いいのかい？」

「はい。セラちゃんの命の恩人ですもの。私もできる限りのおもてなしを致しますね」

「や、そんなお気遣いなく……」

「セラちゃん、また今度もお話しようね」

「うん。シグ様と三人で」

「もちろん」

ファナは嬉しそうに頷くと、側近に言われるまま玉座を離れていった。

「それじゃあ、私たちもいきましようか」

「そうだね」

セラとシグは主のいなくなった王座に背中を向け、神殿区を後にした。

神殿区を後にした二人は憩いの広場で他愛もない話をして時間を過ごしていた。

「セラはファナとは親しい仲なの？何だかとても女王様とその配下の会話には見えなかったけど？」

「ファナリアーテ様、ファナちゃんは私の幼馴染なんです」

セラの口から発せられたのは意外な一言だった。

「王様と幼馴染か。どんな気分だった？」

シグの質問にセラは少し考えるような仕草をとってから、それに答えた。

「シグ様、ファナちゃんはちょっと前までは私たちと同じ季節を司る巫女の一人だったんですよ」

「え？」

これまた意外な一言がセラの口から飛び出てきたのにシグは驚きを隠せなかった。

「季節を司る神様の世界ラ・ジェラーデは五十年に一度、季節神の交代をするんです。そしてファナちゃんは去年、その役目を前季節神に代わって受け継いだんです」

「つまり、選挙のようなものか」

「ゼル・リアでいうとそんな感じですね。街の人達に人気があり、かつ季節神としてふさわしい行い、判断ができる者が選ばれます。ファナちゃんは全てにおいて完璧な女の子でした。彼女はもともと春を司る巫女で、いつもほがらかで暖かくて、どんなに悲しいときでもファナちゃんの笑顔を見るとすぐに悲しみがどこかへいっちゃうんです」

「話し方とかもほんわかしているものな」

「はい。ファナちゃんが季節神になってから会える機会は少なくなっただけ、それでも時間が空いていれば私たちはよくお喋りをするんです」

（この辺りは人間も精霊の女の子も変わらないんだな）

シグはファナのことを嬉しそうに話すセラに何度も微笑ましげに相槌を打ったり言葉を返した。

「あの、私ずっと感じていたんですけど、シグ様からもファナちゃんと同じような暖かい香りがします」

「え？」

「そんなに強くはないですが、しっかりとした春の香りです。ファナちゃんから何かもらったりしましたか？」

シグはもちろん首を横に振った。思い当たる節があるといえば……
「そういえば、ココルからこんなものをもらったけど」

シグはそう言ってポケットの中に入れっぱなしにしてあったピンク色をした小石のようなものを取り出した。

「これは春の結晶ですよ。季節の力を固体状に固めたものです。ココルちゃん、上手く力を使えるようになってきたんだあ」

セラはうっとりとした表情でシグの手の中にある春の結晶を眺めていた。

「そうだ、シグ様。これをアクセサリにしてみてはいかがですか？」
「アクセサリ？」

セラの言葉をシグはもう一度繰り返した。

「季節の結晶はそのまま持つよりも、形を変えてお守りのようにすることで本来の力を発揮するんです」

「そうなんだ。でも、そういうお店ここにはあったかな？というかここにはお店自体が見つからなかったような気がしたけど」

「ラ・ジェラーデに商業目的のお店はないですけど、一箇所だけそういうお店を知っています。よかったら、その、行ってみませんか？」

シグを誘うセラの顔は夕日のせいかな少し赤みを帯びていた。そこに、シグが昼間見た巫女兵がやってきてやはりシグの名を大声で呼んでいた。

「お迎えが来ちゃいましたね……」

「みたいだね。セラ、今日はいろんな話を聞かせてくれてありがとう」

「いえ、私もシグ様といられてすごく楽しかったです」

「僕もセラといられて楽しかったよ」

シグは優しくセラに微笑みかけると、「じゃあまた明日」と言っ
て背中を向けた。

「あ、あの！」

その背中に向かってセラは叫び声にも似た大声を出して、シグを
呼び止めた。シグがゆっくりとセラのほうに向き直る。

「さっき言ってたお店、明日行ってみませんか？シグ様さえよけれ
ば、そのお…」

セラは緊張のあまり、最後には俯いてしまい、その声はよく聞き
取れないものになっていったが、シグはにっと白い歯を見せて笑いな
がら、右手親指をグッと立てた。

彼の後ろでは巫女兵が呼んでいたためシグはすぐにきびすを返し
て去っていったが、セラの頭の中には先ほどのシグの顔が
今もまだ焼き付けられていた。

第三章（前書き）

ファナに頼まれてゼル・リアに落ちた彼女の友達を探す旅に出たシグ。ファナが言うにはココルを助けた森で反応があるらしく、結局は森の地下井戸で冬の精霊セラを助け出し、再びラ・ジェラーデに戻ってきた。別れ際にセラはシグとある約束をするが……

第三章

〽秋の精霊マリル〽

シグは小鳥の鳴く声で目を覚ました。

大きな伸びをしてからベッドを抜け出し、窓を開けて朝の空気を吸い込んだ。

「ほんとに綺麗な場所だな、ここは。爽やかな風だ」
これも四季を司る精霊たちの力なのだろうか。

シグは着替えを済ませて部屋の外に出た。神殿区では既に何人かの巫女達が慌しく廊下を行ったり来たりしていた。

「シグ様、おはようございます」

正面から歩いてきたファナはシグの姿を見つけると嬉しそうに微笑んだ。

「おはよう。早いんだね」

「はい。流石に私が朝寝坊をしてしまったら皆が困っちゃいますからね」

ファナは可愛らしく舌を出した。

「よくお眠りになられましたか？」

「ああ。でも、僕にはちょっと豪華すぎた感じがしたかな。ところで――」

シグはファナが両手で抱えているパンかごに目をやった。

「さっきからとても良い匂いがしているね」

「今朝一番で私が焼いてきたんですよ」

「君が？」

「はい！」

驚嘆するシグにファナはたいそう嬉しそうに顔で頷いた。

「君は本当にラ・ジェラーデをまとめる存在には見えないな。どうみても家庭的な普通の女の子だ」

「お料理は昔から好きだったんです。一生懸命作った後のみんなの喜ぶ顔を見るのが大好きだったから。でも、季節神になってからはあまりできなくなってしまいましたけど…」

それはそうだろう、とシグは内心思った。ゼル・リアにも変わった神を描いた話は数多くあるが、料理好きな神の話はシグの知る限りでは存在しなかった。

「本当に変わった神様だ」

シグはそう言って口元をふっと緩めた。

「よく言われます」

ファナも口元を緩める。本当にこの少女といると笑顔が絶えず、元氣が出てくる。

「私、もう行かないと。パンが冷めてしまったらいけないので」

「食堂に行くのかい？」

「はい。今日の料理番の人達が待っていますから」

「僕もついていっていいかな？正直、食堂の位置をまだ覚えきれてないんだ」

「神殿は広いですものね。私も覚えるのに一ヶ月くらいかかりました」

「じゃあ、行こうか」

「はい」

ファナはにっこりと微笑むと、シグ横に並んで神殿の廊下を歩いた。巫女達は不思議そうな顔をして二人を見ってくる者と、なにか言いたげな剣幕をかもしだしている者の二者に分かれた。前者はまだいいものの、後者はいかにもファナと距離の近い者達によるものがほとんどだった。やはり、神という威厳のこともあるからだろうか。シグは少しだが、ファナを誘ったことを後悔した。

朝食を食べ終えたシグはこれから仕事があるファナと精霊王の間の前で別れた。

ファナは「仕事があればもつとシグ様といろんなお話ができるのに：」と何度もぼやいていた。シグは後ろめたい気持ちでいっぱいだったが、ここでファナに「じゃあサボってしまえ」とは言えなかった。もちろん言ったらシグは重罪人で死刑確定者だろう。

シグは憩いの広場のベンチに腰を下ろした。皆、朝の仕事についているためか広場にはほとんど精霊たちの姿は見えなかった。

（そういえばセラたちが勤める寺院区というものがあるんだったな。仕事の邪魔にならない程度に行ってみるか）

シグはベンチを離れると、広場を温かく見守る日差しと風に別れを告げ、寺院区に向けて再び足を動かした。

ファナの話のよると、寺院区は憩いの広場の東らしい。独特の建物だからすぐに目に付くと言っていた。

シグは緑鮮やかな林に目を奪われながら、木々の合間から小さく見える建物の集団を目指した。

「ここが寺院：」

ゼル・リアでは見たことのない厳かな雰囲気のある建物にシグは完全に見入っていた。

「何か御用でしょうか？」

「え？」

建物に見入っていたせいで正面に人が立っていることにすら気がつかなかった。

「みたところ、貴方は男。ラ・ジェラーデの精霊ではないようですけど」

巫女の声からは若干シグを警戒しているような感情が見えた。シグはしどろもどろになりながらも巫女に名前を明かした。名前を明かすと、巫女は顔の緊張を一気に解き放ち、穏やかな顔つきになった。

「貴方がココルとセラを助けてくれた方でしたのね。すみません、男の人を見るのは初めてだったもので」

「初めて？」

「はい。ラ・ジェラーデには女性しかいませんから」

「!？」

シグは巫女の一言に言葉を失った。それならば昨日の憩いの広場での違和感も頷けるが、まさかそんな世界があるとは。

「いかがなされましたか？」

巫女が心配そうにシグの顔を覗き込もうとするので、シグは慌てて身を放した。

「大丈夫……」

苦笑いをするシグの顔は明らかに引きつっていた。女性だけという言葉に甘い理想を抱きつつ、シグはそういう世界は少し遠慮をしておきたいと願うのだった。

「あ……」

ふと、正面から歩いてきた少女二人と目が合った。一人はまだ少女と呼ぶには幼い顔立ちで、一人は背丈だけでみれば十代中頃くらいの青髪の少女だ。どちらもシグが助けたことのある少女である。

「シグお兄ちゃん……」

「あ、あの、おはようございます。シグ様」

幼い少女はシグを見るなり、青髪の少女の後ろからそっと顔を出してつぶやき、青髪の少女は少し言葉に詰まりながらも丁寧に頭を下げる。

「二人ともおはよう。寺院というものが少し気になって来てみたんだ」

「そうなんですか。あっ……」

セラの頭に昨日の約束が思い起こされる。

「すみませんシグ様。約束があったのに……」

「あ……」

どうやらこの二人はお互いに約束を度忘れしていたようである。

「すみません。これから冬の巫女修行が……」

「いや、気にしないでくれよ。僕も君が思い出すまで忘れていたんだし」

「本当にすみません。せつかくあの春の結晶を使ってアクセサリを作る約束をしたのに…」

「はるの、けっしょう？」

ココルがきよとした顔で首を斜めに傾ける。

「アクセサリを作るって、もしかしてマリスのところへ行くのかしら？」

「あ、はいそうです」

「お姉ちゃん、はるのけっしょうとお兄ちゃんとの約束って…」

「あ、えーとねココルちゃん」

双方から質問され、応答に困るセラにシグが見ていられないと言わんばかりに助け舟を出した。

「なるほど、そういうことでしたか」

「私のはるのけっしょうが役に立つの？」

「ああ、そうだよ。ココルがくれた大切なものだからね」

「たいせつ……」

ココルの顔がほころぶ。

「マリスのところに行くんだったら、今日は修行を午後からにしていいからあの子のところに行ってきてくれないかしら。反省文を書かせてもこれじゃ本当にきりがないわ」

「マリスちゃん、やっぱりきてないんですか？」

セラの問いに巫女はため息混じりに頷いた。

「セラは幼馴染でしょ？何とか説得してくれないかしら？上の人達もカンカンなのよ」

「わ、わかりました」

「それじゃ、頼むね」

巫女はシグに丁寧に一礼すると、そのままココルを連れて廊下を去っていった。

「えっと…」

「まあ、午後からに代えてもらったんだから午前中は僕に付き合ってもらおうかな。いい、セラ？」

「は、はい。喜んでお付き合いいたします!」

そう言うセラはなぜか顔を真っ赤に染めていた。

寺院を出た二人は林を抜け、憩いの広場を北に抜けた。

「あそこに家みたいなのがみえるでしょう? あそこがマリスちゃん
の隠れ工房です」

「隠れ工房?」

シグは思わず聞き返した。

「マリスちゃんはちょっと変わった子で、ゼル・リアの文化、特に
機械文化に興味があるみたいでよくゼル・リアに降りているんです
よ」

「そうなんだ。でも、そんな娘には出会ったことはないな」

「マリスちゃんは機械文明の発達している首都大陸によく言ってい
たみたいですよ」

首都大陸、その言葉にシグは顔を曇らせた。首都大陸はゼル・リ
アのほぼ全土を支配している帝国がある大陸で、かつてはシグも帝
国の軍隊に所属していたことがあったのだが。

「シグ様、大丈夫ですか?」

「え?」

「お顔の色が悪いようですけど……」

「いや、なんでもない。確かに首都大陸の機械文明はゼル・リア一
と言っても過言ではないな」

シグは何とか平静を取り戻しながらその後のセラの質問にも応対
した。そして、マリルという少女の隠れ工房にたどり着いた。見た
目は小さなぼろ小屋のようではあるが。セラがその扉を小さく叩く
と、せわしない物音の後に一人の少女が姿を現した。

「あれ、セラじゃない。久しぶりだねえ」

ほぼ毎日この小屋にこもりつきりと聞いていたためにどんな根暗
少女なのかシグは密かに気体をしていた。

「マリスちゃん、ユークさんがマリルちゃんのことを心配してたよ」

「アハハ、ユークさんにはいつも迷惑かけちゃってるなあ」

マリスは苦笑しながら後頭部を掻いたが、おそらく心の底では申し訳なさな微塵もないだろう。

「およ？ セラ、そっちの男の人は誰？ まさかセラの恋人！？ ゼル・リアに落ちたって聞いたけど恋人を連れて帰ってきたの！？」

「ち、違うよマリスちゃん。この方はそんな関係ではなくて、ほら、以前ファナちゃんがよく話してくれた小さい頃のファナちゃんを助けてくれた……」

「ああ、言っていたよね……って本当にその人なの！？」

マリスは目を大きく見開いて叫んだ。セラは大声を張り上げたマリスにびっくりしつつも小さく頷いた。

「そっかぁ。じゃあシグさん、改めてはじめまして。私は秋を司る精霊のマリスです」

マリスは明るく自己紹介を行った後、「あまり修行には出てないんですけどね」と舌を出して笑った。

「こちらこそよろしく。早速なんだけど、これを使って何かアクセサリを作ってくれないか？」

シグはポケットから春の結晶を取り出すと、マリルに手渡した。

「これは春の結晶だね。うくん、力的には弱いけど確かな暖かさを感じるよ」

「ココルちゃんが作ったんだよ」

セラが補足説明をする。

「へえ、あの子が作ったんだこれ」

マリスは春の結晶をマジマジと観察すると、急に申し訳なさそうな顔になった。

「これをアクセサリにするって話だけどちょっと無理かなあ……」

「ど、どうして！？」

セラがマリスに詰め寄る。マリルは詰め寄られて、言葉に迷いながらもアクセサリにする材料がないのだと告げる。

「謹慎を食らっちゃってるから、ゼル・リアにはいけないし、ここにある材料だけじゃ結晶を加工できないのよ」

「じゃあ、その材料を持ってくれば作ってもらえるのかい？」

「まあ、そういうことになるかな」

「わかった。何を取ってくればいい？」

「シ、シグさんまさか採りに行ってくれるの？」

「こう見えても世界を旅している者だからね。それで、必要な材料は？」

「ムル貝だよ。モルグナードだったらスプレ岬辺りで取れるんじゃないかな」

「わかった。取りに行ってくる」

「シグさん、私も一緒に行っていていいですか？」

「君も？」

セラの突然の申し出にシグは驚きを隠せなかった。普段の彼女からしてとてもそんなことを言う娘には見えないからだ。

「ゼル・リアの魔物には魔法がよく効きます。私が憑依すればシグ様の旅のお役立てると思うんです」

「ふーん、なるほどね」

マリルは意味深に何度も小さく頷き、セラは何かを悟られないように黙り込むが、顔の赤みでだいたいわかってしまう。マリルは視線をシグのほうに向けて、セラを連れて行ってくれるように頼んだ。結局シグは二人に懇願され、セラを連れて行くことに同意をしたのだった。

再び、丘のふもとに戻ってきたシグたちはテイルと合流した。

「流石に向こうで一晩過ごしている間にこっちも夜が明けているみたいだな」

「キュ〜？」

テイルは何のことを言っているのと言わんばかりに語尾を高く上げて鳴いた。

「なんでもないよ。じゃあ、行こうかせラ」

「はい」

テイルの背中に乗った二人は一路、スプレ岬を目指して旅立った。

第三章

「アリルとクエスト」

オールゼットの街で携帯食料や装備の点検と情報を集めたところ、どうやらスプレ岬に行くには二通りの方法があつて、一つは、オールゼットから北に進路をとり、ドーガ山脈を越えて、ウォリア平原を抜ける行き方と、もう一つはシグがコルとセラを助けたフォルナの森を東に抜けてグレム砂漠とウォリア平原を抜ける生き方があるのだが、後者はよほど腕利きの冒険家でも抜けるのは難しいらしい。距離で考えればこちらのほうが近いらしいが。シグが話しかけた冒険家曰く、グレム砂漠はオストリザードの天敵であるサンドウォームもいるらしくオストリザードで早々と砂漠を抜けようとする冒険家たちがこれまで何人も砂に飲み込まれたらしい。

シグとセラは町の外で待たせていたテイルに再び乗ると、オールゼットの北に聳えるドーガ山脈へと進路をとった。

「これがドーガ山脈か…」

目の前にそびえる大きな山々にシグは言葉を失っていた。

「正直、しばらく山越えは勘弁してほしかったけど、場合が場合だし仕方ないか」

「キュウ……」

テイルもどこか自信なさげな声を出していたが、表情は心底嫌そうなようには見えなかった。

「ところでセラ？」

「あ、はい」

急に自分に会話を振られ、セラはハッと顔を上げた。

「ここから先はここまでの道のりみたい以上に魔物の数も多くなる。今のうちに君の力を借りておきたいんだけど」

「わかりました」

セラは頷くと、「失礼します」と一言断ってからシグの額に手を当てた。

「いきます」

セラははつきりとした口調でそう言うと、シグの額を押さえる手に神経を集中させた。刹那、今しがたまでシグの目の前に立っていたセラの姿が透明になり、まるで消しゴムで文字を消したときのように一瞬にして消えてしまった。

「セ、セラ!？」

シグはあまりにも一瞬の出来事に思わずさっきまで目の前にいた少女の名前を叫んだ。

『私はちゃんといいますよ、シグ様』

「な、何だ？ 頭の中から声がする？」

シグは両手で頭を押さえた。割れそうに痛い。これが憑依なのかと感ずることもできなかった。

『これが憑依です。しばらくはしんどいかもしれませんが、すぐに慣れます』

「頭の中からセラの声が聞こえる。これが憑依？」

『これからはシグ様の意思で私の力を使用することができます。私の司る冬の力、主に水や氷を使った術を使用できます』

「水や、氷？」

「おい、危ないぞ！」

どこからともなくそんな声が聞こえた。シグが目を上に向けると、鋭いくちばしを持った小鳥がシグの腹目がけて急降下してきていた。

『シグ様、右手をあの魔物にかざしてください。氷を出します！』

「わ、わかった」

シグはセラに言われるがままに右手を小鳥に向かってかざした。

“フロストスフィア！”

刺が着いた氷の球体が小鳥の体を一撃で貫いた。甲高い悲鳴を上げて小鳥が地面に落ちた。

「すごい。今のは槍を構えていたら絶対に間に合わなかった…」

シグは氷で体を貫かれた小鳥を見下ろしながらぞっとした。

「あ……」

シグは彼と目が合ってしまった。先ほどシグに危険を知らせてくれた青年である。青年は呆気にとられているようでポカンと口を開けたままの状態になっていた。

「あの…」

「す、すすす、すすす……」

「はぁ？」

「：すっげえー！ー！」

青年は歓喜の雄叫びをあげてその場大はしゃぎで駆け回った。

「な、なァ。今の『魔法』ってやつだよな。もういっぺんやってみせてくれないか!？」

「はぁ？」

何かなにやらわけがわからなかった。この青年は一体何を言っているのだろうか？

「あんた、魔導師だろ？すげえなァ」

とりあえず口裏だけでも合わせておいたほうがよさそうだ。直感的にそう感じたシグは適当に頷いた。

そういえば聞いたことがある。生物の中に眠る魔力というものを媒体に自然の原理を捻じ曲げて炎や水を行使する術があることを。それらを巧みに扱う者、魔導師。

「もう一度見せてくれよ。俺、魔導師をみたの初めてなんだよ」

シグは思った。これ以上この青年に付き合っているといつかぼろが出る。

「悪いけど急ぎの用があるんだ。ここを通してもらえないか？」

「一度だけでいいから」

「だから急いでいる……」

「一度だけ！」

「だからいそ……」

「一度…！」

どうあってもこの青年は魔法を見せるまでここを通すつもりはな
いらしい。

（セラ、見せても大丈夫かな？）

シグは頭の中にいるセラに話しかけた。

『多分問題はないですよ。ゼル・リアにも魔法使いという者が存在
しているみたいですから』

「わかった。見せたらここを通してくれよ」

「ああ、わかってるって」

青年は白い歯を見せてニツと笑った。どこか信用できない軽い笑
顔だったが、魔法を見せないと通さないと言い張るのだから、迷わ
ずさっさと見せたほうがいいだろう。

「すっげえ！」

見事に凍った岩を青年は物珍しげに叩いたりしていた。

「もういいだろう。じゃあ、僕は行くから」

「待った待った。いい物を見せてくれた札くらいさせてくれよ」

「別にいらないよ。魔導師ならばできて当たり前のことなんだから」

「そう言わずに。あんた、これからどこへ行くんだ？」

ここで青年を無視して先に進むという手もあったのだが、きっと
彼はしつこく追ってくるだろう。シグはそのことを一発で見抜いた
ため、行き先を青年に告げた。

「スプレ岬か。あんなところに何をしに行くんだ？ 今、あそこでの
シナリオ何かでてたっけか？」

「シナリオ？」

シグは首をかしげた。

「あれ？ あんた、冒険家じゃないの？ 魔導師なのに？」

「魔導師は関係ないだろう？ それに、僕は冒険家じゃなくてただの
旅人だ」

「へえ。今時珍しい人もいたものだ。利益目的じゃない旅をしてい
るだなんて」

青年の言い方からすると、シグのような旅人はモルグナードでは相当珍しいようだ。

「まあ、観光目的で行くのも悪くないところだし」青年は一応シグをフォローするようにつぶやいた。

「じゃあ、俺が案内してやろうか。俺もシナリオの都合でよくあそこには行くしな。ドーガ山脈の抜け方もお手のものだぜ」

「…とか何とか言って本当は魔法を見たいだけじゃないのか？」

「ばれたか？」

青年はあっさりとそう言うのとケラケラと笑い出した。

「まあいいじゃねえか。俺は冒険家のア ril だ。あんたは？」

「僕はシグだ。こっちのオストリザードはテイル」

「シグにテイルか。よろしくな」

ア ril はやはりニカッと白い歯を見せて笑った。

ア ril の案内で手早くドーガ山脈を抜けた一行は、ウォリア平原も順調に飛ばしてあっという間にスプレ岬へとたどり着いた。見渡すばかりの白い砂浜にはまだ時期も早いせいか人の子一人見当たらなかった。

「ここがスプレ岬だぜ。俺たちモルグナードの冒険家のシナリオにもよく使われるシナリオの代表格の場所だ」

ア ril は得意気に胸を張った。

「それで、ここに来てあんた何をするつもりなんだい？」

「ムル貝というのを探しに来たんだ」

「ムル貝だってえ！？」

ア ril が素っ頓狂な叫び声をあげる。

「シグさんよ、そいつはちょっと無理ってものだ。ムル貝は冬によく取れるものだからな。春も半ばを過ぎた今じゃ、きつと見つからねえよ」

「そ、そんな！何とかならないかな？」

「それはムル貝に聞いてくれ。もしかしたら変わり者の一匹や二匹いるかもしれないけどさ」

地元の冒険家であるア ril がそういうのだ。情報に間違いはないだろうが、しかしこのまま帰るわけにもいかない。

「ムル貝を探すにはどうしたらいいんだ？」

「うへ、本気で探すつもりなのかい？まあいいや。それじゃあ、砂浜をよく調べてみな。小さな枝がちょうど一本入るような穴があるはずだ。それがムル貝の住処だ。そして、その穴の中にこいつをパラパラとまくんだ」

「これは……塩？」

「ムル貝が取れる時期だといつをいれて数秒待てばムル貝が飛び出してくるんだ。今は望み薄だけど、まああんたがやるのなら止めはしないさ」

「ありがとう、ア ril 」

「礼はとれてからでいいぜ。俺はこの辺りにいるから終わったら声をかけてくれ」

ア ril はそういうと、岬の端に向かって、砂浜を歩いていった。シグはア ril が完全に背中を向けていることを確認すると、自分の中にいるセラに話しかけた。

「どうしようか。冬にしか取れないなら今、探してもいない可能性のほうが高い」

『困りましたね……』

セラは残念そうにつぶやきながら、『あ、でも……』と続けた。

『ちょっと反則ですし、あまりこういうことをすることは禁じられているんですけど、私の力でこの空間をほんの少しの間だけ冬の状態に戻すことはできます』

「へえ、季節の精霊はそんなことまでできるのか？」

『見習いの私の力では長い時間は無理ですけど……』

「いや、ムル貝がとれるならかまわないよ。セラ、やってくれるか

い？」

『わかりました。では、一旦憑依を解かせてもらえますか？』

セラの言葉にシグはもう一度後ろを確認した。ア ril はすでに遠くのほうで海を眺めているようだ。

「ああ、わかった」

シグは小さな声で言った。刹那、シグの体からまるで魂が抜け出るかのように青髪の少女が現れた。

「……なんか、ちょっとした怪奇現象だな」

「フフ、すぐに慣れますよ」

セラは微笑み、両手を空に向かって広げた。しばらくしてからシグは自分が立つ砂浜の周りに冷たい木枯らしが吹いているのを感じた。シグは見つけた穴の中にア ril からもらった塩をまくと、数秒にも満たない時間でそれは穴の中から一瞬だけ顔を出した。

「わ、早すぎるよ！」

シグは完全にタイミ ングを逃していた。もう一度、砂の中に塩をまき、ムル貝が出てくるのを待つ。

「今だ！」

今度は成功。シグの親指と人差し指の間には細長い形の貝が挟まっていた。

「これがムル貝ですか？」

セラがしゃがんでいるシグの上からムル貝を覗き込む。

「……だと思っよ。ア ril も言っていたし。一匹だけじゃ足りないって言われるかもしれないし、もう二、三匹採っておこう」

シグは再び穴探しを始め、見つければ塩をまいてムル貝を採った。三十分くらい経過し、シグはア ril のいる場所へと歩いた。

「よう、えらく早いお帰リだな。もう諦めたのかい？」

あたかも結果を予想していたかのような表情のア ril が笑いながら言う、シグは返事の変わりに採ったムル貝を五匹、ア ril に見せた。

「マジかよ！？」この時期にムル貝がまだいたなんて驚きだ。あんだ、

運がいいぜ」

「どうも。もう十分だし、僕らは帰るよ」

「そうか。じゃあ、俺も帰るとするかな。オールゼットまではまたよろしくな」

こうして一行は再びもと来た道のりをたどってそれぞれの帰る場所へと帰ることにした。

「今日はありがとう、アリル」

オールゼットの一角でシグはアリルに礼を言った。

「いいってことよ。それに、俺のほうは魔法とムル貝と二つもいいものをみせてもらったしな」

少しアリルと話をし、シグは今度こそ別れを告げて町の外に向かってきびすを返したときだった。

「！！」

シグは思わず物陰に身を潜めた。

『ど、どうしたんですか？』

「静かに！」

シグは小さな声で叫ぶと、自身の気配を消すように壁に張り付いた。大通りをなにやら陰険な表情の男達が通り過ぎていった。話の内容は上手く聞き取れなかったがどうやら誰かを探しているようである。

「追っ手が、もうこんなところまで……」

『シグ様、大丈夫ですか？』

頭の中からセラの心配そうな声が響く。

「ああ、もう大丈夫だろう。急ぎ足で帰ろう」

シグは狭い路地からもう一度先ほどの者達がいなかどうかを確認すると、早足で町の外で待たせているテイルのもとへ向かった。

第四章（前書き）

セラと二人でココルからもらった春の結晶を素敵なアクセサリにするためにマリルの工房を訪れるが、春の結晶をアクセサリにするにはムル貝が必要だと言われる。二人はゼル・リアにムル貝を求めてスプレ岬に向かう。その途中で冒険家のア ril と出会い、彼も同行のもと二人はスプレ岬にやってくる。何とかムル貝をゲットしたシグたちは町でア ril と別れた後、謎の兵士達を見かけるが……

第四章

「ローナとネル」

彼はその街にやってくるなり手に持った槍で強盗を対峙して騎士団に突き出したことがあった。そのときの隊長に見込まれ、騎士となった彼は次々と事件を解決し、ついには小隊長に昇格のところまで登りつめた。だが――

「なんてことをしてくれたんだ！」

「このままではこの国はどうなる！？」

「もう終わりだ！」

口々に浴びせされる罵声。それらから逃げるように、彼は街を去っていった。

「！！」

シグは声にならない叫び声をあげてベッドから跳ね起きた。服がベタベタする。どうやら大量の寝汗をかいたようだ。

「久しぶりに、あの頃の夢を見たな」

シグは大きく深呼吸をすると、窓を開けた。まだ日の出には早いが、もう一度寝なおすには遅い時間だ。

（散歩でもしてこよう）

シグは着替えを済ませると、一人神殿の外に出るのだった。

シグがラ・ジェラーデの住人たちと交流を持ち始めてから十日が経とうとたった。あれからもシグは毎日、ゼル・リアに落ちた精霊を助けたり、またはラ・ジェラーデの寺院で修業の見学をしたり、手伝いをしたりして毎日を過ごしていた。オストリザードのテイル

もシグの信頼あつてか、すんなりとラ・ジェラーデにやってくることを許されたのだった。今ではココルを中心としたラ・ジェラーデの子供のお守り番として有名である。

シグにとって、この旅はある意味傷心旅行——と言っては彼に悪いが——のようなものでもあったのでこの辺りでのんびりとひとところに着けるといふのは大変有意義なものだった。最近はずりも寺院に来るようになりだしたということもあって、シグの周りはいっそう賑やかだった。

今日もいつものようにファナと朝の挨拶を交わし、寺院に行こうと広場を抜ける道を通る。

(あれ?)

シグは広場の異変に気づき、足を止めた。この時間は、憩いの広場にほとんど誰もいないはずなのだが、今日は人影が一つ。何かを探しているような素振りを見せていた。お人好しなシグはその人物が困っていると判断すると、すぐにその少女のもとへ行き、声をかけた。

「どうかしたの?」

「あ、あんたは確かファナの許婚の…?」

「許婚!?!」

いつの間にそんな噂が広まったのだろうか。シグは仰天して思わずバナナの皮でも踏んで転ぶかのような派手な転び方をしてしまった。

「何やってるんだい?」

少女は怪訝そうにシグを見下ろす。

「い、いつの間にそんな噂が…?」

「つい最近」

少女はあっさりと答えた。

「誰がそんな噂を…?」

「あたし」

「!?!?」

「冗談だよ」

一瞬恐怖に歪んだシグの顔を面白そうに笑いながら少女は言った。
「他の奴らから聞いていたけどあんたってほんとにピュアな奴だなあ」

自分がそうさせておいてよく言うよ、と言いたいのをシグは我慢に我慢をしてのどの奥に引っ込めた。

「君が困っているように見えたのは僕の気のせいかな？」

「いや、困っているのは本当だね」

少女はしてやったりと言わんばかりに笑うと、シグに事情を説明してくれた。どうやら、この少女の幼馴染がゼル・リアの草原に遊びに行ったきり帰ってこないらしい。

「ゼル・リアにはさ、あたしもよく行くんだ。あそこの魔物は手ごたえがあって修行に最適だからね」

少女はそう言ってぐっと力こぶを作って見せる。女の子としては大きすぎる力こぶだ。

「あいつもよくあたしの修行についてくるんだけどいかんせん落ち着きがなくなってるね。すぐふらふらとどこかに行ってしまうんだ」

「それで探しに行くところだったのか」

「いや」

少女はあっけらかんとした表情でそう答えた。

「あいつは放つといてもいつも自然に帰ってくるから問題はないよ」

「そ、そんな。ゼル・リアには凶悪とされている魔物だっているんだぞ。女の子一人では危険だ！」

「あたしたちは精霊だよ？ それにあんたらにはない力も持っているし」

「そんなの関係ないよ。不意をつかれたら一巻の終わりだ！ 君はいつもそうしてきたのか！」

シグはものすごい剣幕で少女に詰め寄った。シグの剣幕に押されて少女は気まずそうに俯いた。

「すまない。でも、このままにしておくのは得策じゃない。すぐに

助けに行こう」

「あ、あたしも行くの？」

「君の幼馴染でしょ？」

「……」

「行こう」

シグは少女を連れ、テイルが寝泊りしている小屋でテイルを連れ、クラス草原へと降りる。

「いつもの辺で修行を？」

「えーっと、どこってというのは決まっていらないかな。魔物が出たらはっ倒すだけだから」

「しらみつぶしに探すしかないってことか」

「あ、ねえシグ」

少女は何かを思いついたのかすぐ前にいるシグに声をかけた。

「あたしの力を使いなよ。そうすりゃ、少しはあいつの力を感じ取れるようになるからさ」

「じゃあ、そうしよう」

「オッケー。じゃ、行くよ」

少女はシグの背中中央に自分の右手を当てた。

「そうそう、あたしは夏の精霊ローナ。幼馴染はネルっていうんだ。ピンクの髪をしているから目立つはずだよ」

ローナは付け加えるようにそう言うと、シグの背中から溶け込むようにして彼の意識の中に潜り込んだ。

「よし、それじゃあ今日もよろしく頼むなテイル」

「キュ！」

任せろと言わんばかりにテイルは頼もしげに鳴いた。かくして、一人の少女、もとい精霊を探してテイルに乗ったシグは広大な草原の内部に入っていくのだった。

『ねえ、一つ聞いてもいいかい？』

意識の中にいるローナがシグに問いかけた。

『あんたとファナってさ、どういう関係なんだ？』

「どういう関係というത്？」

『だ、だからさ。その、恋人関係とか友人関係とか幼馴染とかいろいろあるだろ！』

ローナは自分言ってる恥ずかしくなったのか、言葉の最後のほうは怒声まじりだった。

「ああ、そういうことか。それなら僕とファナは多分ローナが期待しているような間柄じゃない」

『本当に？』

ローナはシグに疑意のまなざしを向けるような言い方をした。

『あたしはファナの幼馴染でもあるからあいつのことはよく知っているんだよ。あんたが来てから、あの子はすごく明るくなった。仕事ができるときでも笑っていた。以前では考えられない変わりようだった』

「ローナ…？」

『あたしも、一応女だからわかるんだけどさ。ファナは、あんたにきつと恋していると思うよ』

「ファナが、僕に？」

『十年前、ファナがゼル・リアに落ちたとき、あいつは本当に寂しかったはずだ。身よりもなしだし、魔物が出るわでね』

「……」

『そんなあいつに救いの手を差し伸べてくれたあんたにファナは深い情を抱いていると思う』

「で、でも僕はあの時のことをまったく覚えていないんだ」

『そうなの？』

「ファナから話を聞いたところによると、僕はファナを自分の家に連れて行ってパンを半分こして食べさせたらしいけど、僕にはそんな記憶がないんだ」

『ちよいと待ちなよ。十年前の話といえ、あんた十二歳だろ？物心はしっかりついている頃じゃないか』

「そのはずなんだけど、僕にはそんな記憶がない。それに、ファナ

を助けたその後すぐに僕は行商人だった両親に連れられて旅に出たんだ」

『ふうん、なんか合点のいかない話だね』

ローナの声は明らかに少し怒っているように聞こえた。

「僕もあれから何度も思い出そうとしているが、記憶のどこを探っても出てこない」

『あんた、その間に記憶喪失になったとか？』

「いや、ちゃんと十三歳の頃に何をしたかっていう記憶はあるんだ。だから、それはない」

『ますますわからないね』

「ごめん」

『あたしに謝ってどうするのさ』

「そうだけど、ごめん……」

「キュッ！」

テイルの声にシグははっと我に返り、テイルの手綱を思いきり引っ張った。テイルは何とか危険の一手手前でブレーキをかけることに成功した。

「だ、大丈夫!？」

シグはテイルから飛び降りると、テイルの前に呆然と立ち尽くしている少女に外傷がないかどうかをさっと見分ける。

「怪我はない……みたいだな。大丈夫？」

落ち着きを取り戻して、もう一度声をかけてみる。少女も気がついていたようで子供のように無邪気に笑った。

「全然大丈夫だよ。ぼーっと歩いたこっちも悪いしね」

少女は引かれそうになったことを全くもって気にしていない様子だった。それにしてもよく見るとこの少女は何とも派手な髪の色をしている。

「ピンクの髪。もしかして君がネル？」

「そーだけど？ あれれ、お兄さんの体からローナちゃんの匂いがする」

「ああ、それは――」

シグが言い終わる前に聞き取れない叫びと共に大降りのげんこつがネルの頭の上に直撃した。

「いったあゝい……」

「こおんのボケボケ娘！」

「あ、ローナちゃんだあ」

「ローナちゃんだあ、じゃない！お前は どうしていつも一人で勝手にうろうろするんだ！あたしがどれだけ心配したと思っているんだい！？」

「反省しているからそんなに怒らないでよ」

「反省しているんだっただうして、あたしの修行のときに毎回毎回、勝手にうろちよろするかな？」

「ううゝ、だって、ローナちゃんが戦うとこ見ても暇なんだもん。それよりかはこの広大な草原を一人で気ままに旅していたほうが面白いじゃない？」

（な、なんて理由だ）

シグは呆れながら、その後も続く二人のやり取りをやはり呆れながら見ていた。

「ところでネル、その服のテカリ具合はもしかして……？」

十数分くらい続いたやり取りに飽きたシグが話をはぐらかすためにネルの服についている金色に光るものについて質問した。

「ああ、これ。これは蜂蜜だよ」

「蜂蜜？」

「何だってそんなものを服につけるんだい？」

「いやあ、それを聞くとちょっと苦勞が多くなると思うけど……」

「はあ？」

「も、もしかして君は……」

シグは何か嫌な予感を察して、周囲を見渡した。よく耳を澄ますと、無視の羽音のような音が聞こえてきた。

「な、なんだいこの音は？」

「ネ、ネルの馬鹿！何だってキラビーの巣なんかに入るんだ！」

「あたし、蜂蜜って一度でいいから食べたくて」

ネルはてへっと笑いながら舌を出した。

「まあ、好奇心のなせる業ということだ」

ネルはまるで語尾にハートマークでもつけたように可愛らしく微笑んだ。

「お前は熊かー！」

シグは声を大にしてネルに突っ込みを入れた。

第四章

く紅の兆しく

キラビーの群れを何とか全滅させたシグたちはそのままラ・ジエラーデに戻ると精霊の間でファナに説教をしてもらおうと精霊の間に向かっていて最中だった。

「あ、ローナちゃんにネルちゃん久しぶり」

「ファナちゃん、遊びに来たよん」

ネルとファナはイエーイなどと楽しげに手を合わせていたが――
「あの、お二人ともどうしたんですか？ さっきからずっと怖い顔をしてますけど…」

心配するファナに「怒りたくもなるさ」とローナ。そのままこれまでのいきさつを全てファナに語った。

「やっぱり。あの草原から春の力を感じるなどは思ったんだけど…」
「感じているならすぐ僕に言ってくれよファナ。事が大きくなる前に」

シグは多少キラビーに刺された顔を撫でながらため息をついた。
「まったく。ローナの炎がなかったらけっこうきつい量だったぞあれは」

「ごめんなさい」

てへへ、と笑う春の精霊にはまるで反省の色がなかった。

「こいつ絶対わかっていないな」

「同感だ」

ローナとシグは二人してげんなりとした顔をしていた。

「まあまあ二人とも。ネルちゃんにも悪気はなかったんですから許してあげてください」

ネルのあの笑顔を見て本気で悪気がなかったとファナは思ってい

るのだろうか。そういうところは春の精霊らしく暖かな心持なのか、それとも単にファナの性格がぬるいだけなのか。

「それじゃ、あたしはもう行くわ…」

「僕も今日はこれで…」

げんなりとした表情のシグたちはやってられんと言わんばかりに精霊の間を去っていった。後にはきよとした顔のネルとファナだけが残されていた。

ローナと別れたシグはテイルを連れ、オールゼットに向かっていった。何しろラ・ジェラーデには旅人のための武具屋はもちろん、雑貨屋すらないため、日々の生活用品を買い足しに、シグは定期的にゼル・リアの街に行かなければならなかった。そのついでといってはなんだが、酒場で必要な情報も収集し、モルグナード地方の地図も得た。そして――

「よう」

オールゼットに行く最大のメリットは今、シグに軽く挨拶をしてくれた彼の情報である。酒場より正確であり、かつマリルに調合や細工の材料を頼まれたときの情報源は常によりものであった。

「やあ」

シグも片手を上げて挨拶を返す。

「今日も雑貨の買い足しか？」

「ああ。今日は武器屋も見てきたよ」

シグはそう言って新品の槍をア rilに見せる。

「ところでシグ、前から聞きたかったんだけど」

「何？」

「お前ってよくここに来るけど、実際はどこを拠点にしているんだ？この街の宿屋に出入りしているところは見たことないからなあ」

「そ、それは……」

シグは返答に困った。まさか、精霊の住む町で一緒に住んでいまずとは言えないし、それにア ril は冒険家だ。ラ・ジェラーデのことを知ったらきっと行きたがるに違いない。

「テイルがいるからなかなか街の中ってわけにはいかないんだ。オストリ屋があれば別なんだけど」

オストリ屋とはオストリザードを預かってくれるオストリザードの専門店のようなものだ。断じてオストリザードを焼いてどうこうという店ではない。

「確かにそれは難しい問題だな」

ア ril の言うとおりでたつた。いかにオストリザードが人間に懐きやすいといっても所詮は魔物の一種。いつ人間を襲うかわからないのだ。

「テイルはあんなに人懐っこいのにな」

ア ril はテイルとはこの短期間であつた者達の中ではかなり親しかった。

「それじゃ、僕は帰るよ」

「ああ、気をつけてな」

ア ril に別れを告げ、シグはオールゼットの外で待たせているテイルのもとへ向かった……のだが、草の生い茂る台地に大きなオストリザードの姿はなかった。

「テイル？」

シグは周囲を探してみるが、やはりいない。

「どこにいったんだよ」

今までテイルがシグに黙って単独行動などしたことはなかったのに。シグはクラス草原を西に進みながらテイルらしき動物の姿を探した。

「テイル！」

シグはついに不安になり、その名を草原のど真ん中で叫んだ。返事はてっきり返ってこないだろうと確信していたが、予想外に返事はあるに遠くない位置から聞こえた。

「テイル！」

ようやく見つけたテイルはフォルナの森の近くにいた。

「どうしてこんなところまで一人で行くんだよ？」

「キュ、キュ〜！」

テイルはシグに何かを知らせているようだった。

「この先に何が…？」

テイルはシグの思案をよそに勝手に森の奥へと歩を進めていく。

シグは慌ててそれを追う。

テイルに連れられてきた場所は泉の湧き出る森の最深部だった。そこでシグは倒れている人を発見した。髪の毛の長さからしてどうやら女性のような性のような。

「大丈夫ですか！」

シグは女性の上半身を軽く起こし、何度か声をかけるが反応はない。静かに眠るその顔つきはまだ成人には少し遠い年齢の少女だった。一応防具や武器である杖ももっていることからアリのルのような冒険家にも思えた。

「とにかく連れて帰ろう」

シグは少女をそっとテイルに乗せると、相棒に全速力でラ・ジェラーデに帰るように命じた。

シグは気がつかなかった。彼らが去った後、森の木々の間から人影が現れたことを。人影は、テイルの足音がまだ遠くなる前から泉の前に立っていた。

「あいつを探しにこの地に赴いてみたら、とんでもない奴が現れたものだな」

人影、鎧を着けた女性は誰に言うわけでもなくつぶやいた。

「やっと見つけた。やっとあいつを……」

第五章（前書き）

夏の精霊ローナの頼みを引き受けて、彼女の幼なじみのネルを探しにクラス草原に降りたシグたち。一悶着あったもののネルは見つかり（ついでに反省文も書かされ）一件落着と思いきや、テイルがフォルナの森で倒れている少女を発見する。そして、それを見つめる一つの影が…

第五章

「ファナと愉快的仲間達」

ノイアールは見知らぬ場所に寝かされていた。

ベッドに寝たままぼんやりとした目で辺りを見回すが、自分がこんなところに寝ていた記憶はない。オールゼットの宿屋かと考えた
が、ベッドの材質はこれの半分にも満たない。

「ここは…」

目をしっかりと開けてみる。その部屋は天井から床までとても高
価な材質でできていた。

「あ、目が覚めたんですね」

暖かい声がそう言ってノイアールの顔を覗き込んだ。

「貴方は誰…？」

「私はファナリアーテといいます。この神殿の長を務めている者で
す」

「神殿の長？ 貴方のような若い方が？」

言ってからしまったと思った。助けてくれた人に対してまるで暴
言じみたことをぬけぬけと言ってしまった。しかし、ファナと名乗
った少女は特に気を悪くする様子もなく「よく言われます」と優し
く微笑むだけだった。

なんて暖かい人だろう。たったそれだけの会話だったのだが、ノ
イアールは自分の横でいそいそと紅茶をカップに注いでいるファナ
を見て思った。女の自分ですら惹きつけるファナリアーテという少
女にノイアールは高鳴る鼓動を懸命に抑えていた。そう、季節で例
えるのならばまるで春のような……

「ハーブティーをどうぞ。私が神殿の庭で自家栽培したハーブなん
ですよ」

ハッと我に振り返りファナリアーテからカップを受け取り中身を一口すすする。今までもやもやしていた頭の中の霧が一気に晴れてくるような気がした。そして、ノイアールはファナリアーテに自分がどうしてここに寝かされていたのかを尋ねた。すると、ファナリアーテは「フォルナの森で倒れていたところを助けてくれたのだ」と言った。彼女が『助けた』のではなく誰かが『助けてくれた』のだ。

コンコン。控えめなノックが聞こえ、外から「入ってもいいかい？」という声が聞こえた。ファナリアーテはその問いに「どうぞ」と柔らかく答えた。扉が開き、一人の男性と四人の女性がまるで滝のごとく入ってきた。

「やっほー、ファナちゃん！」

「こらネル、静かにしろ！患者がびっくりするだろ！」

「目が覚めたんだね」

「あ、あの、大丈夫ですか？」

少女達は思い思いに喋りながらあつという間にノイアールの寝ているベッドを囲んだ。その後ろで一人の男性、シグがぼつんと取り残されたように立っていた。

「あの、貴方が助けてくれた方ですか？」

ノイアールは直感でそう尋ねた。シグは頷き、「体のほうはもういいの？」と聞いた。

「はい。おかげさまで。ハーブティーも美味しくいただいています」
ノイアールはシグにハーブティーの入ったカップを見せた。

「君がフォルナの森の奥で倒れているときはびっくりしたよ。でも、どうして一人であんな森の奥にいたんだ？」

「私、森の中で倒れていたんですか？」

ノイアールはシグの質問に逆に聞き返した。

「ああ、奥の泉だね。あんなところで一体何をしていたんだ？」

「……………」

「あ、別に言いたくなかったらそれでもいいよ」

人には言えない事情ってものがあるからさ、と気まずそうに付け

加えた。

「私、人を探していたんです。その途中で道に迷ってあの森に入っ
て…」

「疲労がたまっていたんだね？」

ローナの問いにノイアールは首を振った。

「私、生まれつき病をわずらっているんです」

「え？」

セラの表情が曇る。

「そんな体でどうして人探しの旅を？」

「……どうしても見つけなければいけない人なんです」

ノイアールは両手で支えられたカップの中身を飲み干した。

「あの、私たちでよければ力になるよ」

マリルが明るく言った。

「そうだよ。あたしも協力する」

ネルが続いてマリスに賛同する。ローナ、セラもそれに続く。

「シグ様……」

ファナは不安そうにシグの顔を見上げる。そんなファナにシグは
につこりと微笑みかけた。

「もちろん、僕だって協力するよ」

シグの一言にその場がわあっと沸いた。

「シグ様……」

さっきまで不安そうにしていたファナは安堵の表情を見せた。

シグはノイアールを探している人物の名を尋ねた。しかし、ノイ
アールは申し訳なさそうに「名前は知らないんです」と答えた。

「お姿も一度だけ写真を見せてもらっただけなのではっきりとは。
だから、皆さんを巻き込むわけにはいきません」

「だからといって病気の君をこのまま外に放り出すほどここにいる
皆は冷たくなんかないよ」

「でも……」

「僕も旅人だ。君の役に立てる情報があるかもしれないし、それに

僕には相棒のテイルがいる。人の足よりか何倍も早く探せるよ」

「……………」

「私なんか得意気に言うのもなんですけど、ここにいる人達はみんないい人たちだし、頼りになります。きっと貴方の旅を大きく手助けしてくれると思います」

ファナにとって、彼らは最大の親友であり、誇りであった。

「本当にいいのですか？私情の旅に皆さんを巻き込んで」

「旅は私情から始まるものだよ」

シグはにっこりと微笑んだ。

その場の全員もにっこりと頷く。

「ありがとうございます…」

ノイアールはベッドに上半身を起こしたまま丁寧に頭を下げた。

コンコン。

少し大きめのノックと共に神殿の巫女が入ってきた。

「ファナリアーテ様、ラーヌ湖畔で事件が起きたらしく応援を頼みたいとの伝書が届きましたか？」

「見せてください」

ファナは巫女から伝書を受け取ると、さっと目を通した。

「ラーヌ湖畔ってどこにあるんですか？」

セラがひそひそとシグに耳打ちする。

「ドーガ山脈を越えた先にある大きな湖だ。何かあったのか？」

伝書を読み終えたファナは「皆さん」と言って全員のほうを向いた。

「どうやらラーヌ湖畔のヌシが原因のようです」

ファナの一言に精霊の少女たちがどよめいた。

「ファナ、ヌシっていうのはそんなに厄介なのか？」

「私も数えるほどしか会ったことがないんですけど普段は温厚な方なんです。ですが、ちょっと問題がある方で……」

「問題？」

「一度怒り出すと暴走しだすんだよ。あの魚」

ローナがげんなりとした顔で言った。

「しかも一筋縄では止められないんです。自然にお怒りが収まるのを待つか…」

「あるいはヌシを気絶させて正気を取り戻させるか」

セラとマリスの話し方からしてもヌシとは相当恐れをなす人物（魚？）らしい。

「まあ、行くだけ行ってみようよ」

訪れた沈黙を突き破ってシグが言った。

「困っている人を放ってはおけないし、水の精霊がいるのだったらここ同様街があるんでしょ？ だったら彼女の探し人の情報も入手できるかもしれないし」

四人の少女は不安そうに俯いたまま黙っている。

「私も行きます！ 私にも皆さんのお手伝いをさせてください」

「もちろん、そのつもりだよ。ただ、魔物やそのヌシって人をなだめるのは僕が引き受ける」

「いえ、私も戦列に参加をさせてください。これでもハイランクマジシャン高位魔導師の資格を持っていますし、護身術も少々ならできます」

「で、でもまだ体のほうが…」

ファナが心配そうに口を挟む。

「大丈夫です。いつものことですから」

ノイアールはそう言うのと、壁際の杖を握った。

「わかりました。では、水の精霊たちにはその旨を記した伝書をお渡ししておきますね」

ファナは巫女と共に部屋を去っていった。去り際に「お二人とも無理はなさらないでくださいね」と心配そうにつぶやいて。

ファナが部屋を出ていってすぐ、シグたちも同じように部屋を後にしようとする、後ろからセラの叫びのような声が聞こえた。二人が後ろを振り返ると、四人の少女たちは互いに確認しあうように頷いた。

「やっぱり、あたしたちも行くよ」

「私たちだけのけ者は嫌だしね」

「そーそー」

「決して足手まといにはなりませんのでお願いします」

「しかし、いくらなんでもここまで大所帯で行くわけにもいかないよ。テイルには乗れて三人が限界だ」

「そのことなら大丈夫だよ」

マリスがにっこりと微笑んだ。

「あたしたちは精霊だ。皆であんたに憑依すればいいんだ」

「そうすれば、大所帯にならないですから…」

「せ、精霊!？」

ノイアールが悲鳴に近い叫び声をあげた。それを見たローナはしまったと言わんばかりに口を押さえるが、完全にノイアールの耳には入ってしまった。他の三人の少女達も完全に固まってしまっていた。

「その辺りのことは道中で話すよ。とにかく今は困っている人達を助けに行こう」

「そうですね」

シグのフォローにノイアールはとりあえず小さく頷いていた。

第五章

シグと彼の中に宿った精霊たちはノイアールに全ての事情を説明した。ノイアールはしばらく信じられないといった顔をしていたが、本当なのだから仕方がない。

「精霊のことは御伽噺でしか聞いたことはありませんでした」

それが人間の率直な感想だろう。シグも同感とばかりに頷いていた。

「僕もだよ。ゼル・リアの伝説として彼らの国があるということは知っていたが、実際に見たわけではなかったから」

『聞けば聞くほどシグんとこの世界ってあたしたちに関する情報がないんだね』

シグの意識の中からネルが話しかけた。

『だけど、その一方で妖精と間違えられた精霊たちが商人たちに売られていくのを私は見たんだ』

「え？ どういうことだいマリル？ 妖精は君達の仲間じゃないのか？」

『私たち精霊と妖精はまったく別種族です。精霊はそれぞれのエレメントを司る神の分身、妖精はそれらの中から生まれた種族です』

「つまり、君達の子孫に当たるってこと？」

『平たく言えばそうだね。でも、あたしたちと妖精たちとはまったく接点がないし、妖精も自分たちがあたしらの力の欠片から生まれたことは知らないんだ』

「何だかややこしい話だな…」

『この辺りの歴史のことはファナちゃんが一番詳しいと思います』

『だね。何しろ季節の精霊たちを統べるリーダーだもの』

シグは四人の精霊たちの話を聞いて、正直頭が痛かったが少なくとも妖精と精霊がまったく別の種族だということはわかった。

ラーヌ湖畔はドーガ山脈を越えたふもとの大きな湖である。ここから、モルグナードの水が生まれているのだ。正確に言えば、これから助けに行く水の精霊が作り出しているのだが。

いつもなら立ち寄るオールゼットの街も今回は通過していく。シグは正直ア ril には戦力的に来てほしいと思ったが、前に「旅人と冒険家は違う」と言われた時のことを思い出して、街に立ち寄ることを思いとどめた。

「少し休憩しよう」

ドーガ山脈の頂上まで来るとシグは言った。四人の精霊も宿主から離れ、思い思いにくつろいでいる。

「ふう…」

シグは適当な大きさの岩に座るとため息をついた。

「キュ〜？」

「ああ、大丈夫だよ。ちょっと頭が痛いだけだから」

心配そうな顔をするテイルをシグは頭を撫でながら弱々しく笑う。その表情には明らかに苦悶が浮かんでいた。

「大丈夫ですか？」

話を聞いていたノイアールの影がシグの上に重なって、一瞬涼しくなったように思えた。

「横、いいですか？」

「ああ、どうぞ…」

ノイアールは了解を得て、シグの横にちょこんと座る。

「顔色が優れないみたいですけど、本当に大丈夫ですか？」

「本当に大丈夫。ノアのほうこそ、病のほうは？」

ノイアールことノアは首を小さく横に振った。

「今は全然平気です」

ノアは細い腕を直角に曲げて本当に小さな力瘤を作ってみせる。

「私、まだ信じられないです。精霊の街が本当に存在していたこと」
「だろうね。僕もけっこうすぐに順応したけど、半信半疑だったし。」

でも、彼女達の力を見て改めてわかったんだ。あそこはラ・ジェラード。彼女たち、季節の精霊の住む世界だって」

「季節の精霊。水の精霊や火の精霊は聞いたことがあります、彼女達の力はどんなものなのでしょう？」

「さあ？少なくとも僕が聞いているのは彼女たちは四季の巡りを見守る存在であって、意図的に変える存在ではないという——」

「やっと見つけたぞ」

シグの声を遮るように新たな声が山の反対側から聞こえた。

「あ……」

「！！」

ノアは驚嘆の声をこぼし、シグは信じられないと言わんばかりにその人物を凝視していた。兵隊を三人ほど連れている。

「やはりお前だったか。ノアにつきまとっている男を見かけたものだから軽く払ってやろうと思ったが、まさかお前とはな」

身長は百七十センチ弱、どこか男のような髪型の女性は吐き捨てるように言いながら小さく笑った。

「シグレット・アルグース！」

「……」

シグは黙ったまま、両手の握りこぶしをさらに固く握った。

「シ、シグ様、こちらの方は……？」

セラが話に入りづらそうにしながらも初対面であるこの女性の事を聞く。

「ふん、女を両手にハーレム気分か？堕ちたものだな、瞬撃のアルグース」

「……」

「ルミネ、その名で呼ぶのはもう止めてもらえないか？僕は帝国軍人ではない。ただの旅人だ」

「確かに二年前にお前は軍人の地位を捨てた」

ルミネの言葉にはどこかしら怒気と殺意のようなものを感じた。

そしてシグもまたそれを感じ取れないほど鈍感ではなかった。平静

とした顔つきのまま頭の中では彼女への言い訳を考えている。

「：まあいい」

予想に反してルミネはこれ以上追撃してこなかった。

「今はお前にかまっている暇はない。さっさと妹をこちらに渡してもらおうか」

「妹！？この娘が？」

シグは思わずノアの顔とルミネの顔とを見比べた。言われてみれば髪の高さが違うが顔の形そのものはどこかしら共通点があった。

「姉さん、もしかしてこの人が：」

「お前が私のことを心配してこいつを探す旅に出たことは知っている。が、それは余計なお世話というものだ。病弱なお前に頼るものなど何もない」

「！！」

「ルミネ！」

「あんた、妹に対してその言い方は何だ！」

ローナも怒りをあらわにするが、ルミネは鼻で笑うだけだった。

「さっさと帝国に戻るぞ。病院の医師たちもお前のことを心配している」

「嫌です！この人が、私の、姉さんの捜していた方ならばなおのこと！この人から理由を聞きだすまでは！」

「：今の私の任務はお前を祖国に連れ戻すこと。お前は年幼いが帝国軍魔術小隊に所属する軍人の身。身勝手な行動は許されない」

「ですが：！」

「お前も知っていると思うが、私は気が長いほうではない。これ以上反抗するのならば……」

なおも食い下がるノアにルミネは腰に下げた騎士剣に手をかけた。ノアはそれ以上何も言えずに押し黙る。

「そうだ。お前も一緒に行くか？そのほうが手間が省けていい。お前には問い詰めたことが山ほどあるからな」

不適な笑みを浮かべて言うルミネにシグは黙ったまま微動だにし

なかった。そんなシグをルミネは一瞥し、ノアに向かって右手を差し出した。

「やっぱり私は行きません。この耳で彼の真相を聞くまでは」

「そうか…」

ルミネは残念そうに俯いた。

「それでは私を手に戻すと宣言したということではいいのだな？」

「ち、違います！そんなつもりじゃ…！」

「そんなつもりじゃなくても、今のお前の返答はそういうことだ。

是か非かの二つのみで、そこからお前は非をとった」

ルミネは手にかけていた剣の柄から勢いよく収まっていた得物を抜きさった。

「軍隊に所属したからにはその辺りの甘さも改善していくことだ！」

ルミネは軽やかに地面を蹴ると、そのままノアに向かって突進した。精霊の少女達はおろか、シグすらもその場から動けなかった。

ガキーン！

ルミネの振り下ろされた剣は、突然割り込んできた鉤爪武器によって空中で受け止められた。

「アリル！」

シグがその人物に向かって叫んだ。ルミネは歯を噛み締めながら、後ろに飛び退いた。上官のピンチについて兵士達も各々の武器を取り、ルミネの前に出た。

「やめろお前たち！」

ルミネは兵士たちに命じてから悔しそうにノアと、それからアリエルを睨む。

「今日はここで退いてやる」

彼女は宣言すると、彼らに背を向けた。

「ノア、私に逆らうことは帝国の意思に逆らうことと同じだ。それを肝に銘じた上でもう一度返答のチャンスやる。よく考えておけ！」

冷淡な口調でそう告げると、ルミネは今度こそ部下を引き連れて山

を下っていった。

足音が完全に消えるのを確認し、一行の表情がようやく緊迫から安堵に変わった。

「ア ril、どうしてここに？」

「ちょうどクエストの帰りだったんだよ。山頂で一休みしていかうかと思っていたら、そっちの女の子が襲われそうになっていたってわけ」

「それにしても」と、ア rilはさらに続ける。

「一体何があったんだ？ 女の子を攻撃してきたあの女、やたらすごい剣幕で叫んでいたけど」

「それは……」

シグは言葉に詰まった。果たして話すべきだろうか。確かに二人はもう赤の他人ではないが、このことを話すということは帝国との闘いに巻き込んでしまうことになる。冒険家である彼に重い荷を背負わせるわけにはいかなかった。

「……俺には言えないことか？」

ア rilは口を開こうとしないシグの表情を読み取ってつぶやいた。
「ごめん」

としかシグは言えなかった。しかし、ア rilは別段気にした様子もなく「別にいいよ」と笑った。

「だが、もう一つの質問には絶対答えてもらうからな！」

ア rilは『絶対』という単語をやけに強調していた。声もさっきよりか格段に、むしろ去っていたルミネに引けをとらないくらい殺気立っていた。そして、むんずとシグの肩を取ると、誰にも見られないように岩の後ろに連れていった。そして――

「これはいったいどういうことだ？」

ア rilはノアや精霊の少女達に聞こえないように声を押し殺す。

「どうということって？」

シグはわけがわからないといった表情で聞き返す。

「あの娘達だよ」

そういうことか……。シグはそう言いたげな、いや半分以上そう言っているまなざしを向けるが、ア ril には効果がないようだ。しかし、こちらのほうは特に隠し立てする理由がなかったので話すことにした。もちろん、精霊達の話は避けて。

「彼女たちは僕と同じ旅人なんだよ。五人で旅をしていたところを助けたのがきっかけで――」

「そんなきっかけで一緒に行動するわけがないだろう？」

ア ril の鋭い指摘にシグは言葉を詰まらせた。確かに、一度助けたからと言って一緒に行動するなんてことは滅多にない。そこで――
「実は彼女達、さっきの女の人から逃げていてね。そのボディガード役をかってでたんだよ」

「ふん……」

ア ril は半信半疑、いやほとんど疑いのほうが強い。探るような目でシグの目をじろじろと見つめている。

「やばい。シグは直感的に感じていた。シグは嘘をつくのが下手で、隠し通せていると思って顔に出てしまっ て結局ばれてしまうのである。」

握っている両手に汗がじつとりと滲んでいるのを感じる。このままではもたない、シグの中で観念してしまおうかという気持ちが浮かび始めた時――

「シグさん、そろそろ行きませんか」

いいタイミングでノアがひょっこりと岩の陰から姿を現した。

「あ、ああ、そうだね」

シグは安堵の息をつく と、そそくさと岩場から離れた。

「これからどこに向かうんだ？」

同じく岩場を後にしたア ril が尋ねる。

「ラーヌ湖畔に向かうんだよ。水の精霊が……ふぐう」

シグは咄嗟に言いかけるネルの口を塞いだ。

「精霊？」

「いや、そこで少し休憩を入れつつ北に向かうんだよ」

シグは咄嗟に思いついた嘘を早口で言った。

「ラーヌ湖畔か。北に冒険に行くときはいつも、あそこで休憩を入れてるぜ」

「そんなにいいところなんだ」

「ああ、後は山を下りるだけだしささと行こうぜ」

アシルが目配せをすると、それまで思い思いに岩に座っていた精霊たちも腰をあげた。

第五章

く湖の暴れ者く

ラーヌ湖畔は小さな海ともいえるほどの大きな湖と、その湖の周囲を覆う林とで出来ていた。ア ril によると、この林にも一応魔物が生息しているらしく、冒険家の休憩地とはいえ注意が必要らしい。「まあ、出てくるのは滅多にないけどな」とはア ril 談。

「シユルル」

「ヒユルル」

三人を乗せたテイルの周りを小さな水色の生物が飛び交う。そのうちの一匹がノアの肩の上にゆっくりと腰を下ろした。

「キャッ!？」

「うわ!？」

「何だこいつは？」

ラーヌ湖畔にはよく来ているというア ril さえ、その生物には驚いていた。

『心配しないでシグさん』

『彼らはこの湖に住んでいるミズコダマです』

シグの意識の中から聞こえてくる精霊の少女達の声。何でもミズコダマというのは森に住む木霊の親戚のようなものらしい。人懐っこく、すばしっこくて、時には悪戯をしたりすることもあるが基本的に無害である。

『お出迎えをしてきているんですね』

セラが和やかに微笑む。

(でも、ア ril がくるときはいつも彼らを見ないって…)

『それはあたしたちがいるからだよー』

ネルが嬉しそうに答えた。

『コダマはあたしたちよりも精霊の力を感じ取る能力に優れている

からね』

その証拠に、ミスコダマは最初にノアの肩に止まったコダマ以外のほとんどはシグに集まってきていた。

「いいなあ、シグさん…」

ノアは物欲しそうな目をしていたが、こればかりはシグも苦笑を浮かべるしかなかった。

「にしてもおかしいな…」

ア ril がぼそっとつぶやいた。「何がですか？」とノアが聞き返す。

「いや、いつもなら同業者の奴らがもつというはずなんだが……中にはシグみたいにオストリザードに乗っている奴もいるからわかりやすいんだけど」

「そういえば…」とシグも首を捻る。ア ril から聞いていた割には冒険家の姿はまだ一人として目にしていなかった。

奇怪な様子に三人が首を捻っていると、突然湖の真ん中だけがこぶのように膨れ上がった。その直後、魚のようなものが綺麗な弧を描いて宙を舞った。そして、陸側にまで水しぶきを撒き散らしながら、湖中に潜っていった。

「な、なんなんだ今のは？」

「もしかして今のがこの湖のヌシでしょうか？」

「そうみたいだな」

「なんのことだよ？」

一人会話についていけないア ril に事情を話そうとシグが振り返ろうとしたとき、キラキラと輝く妖精がテイルの鼻先辺りまで降りてきた。

「オストリザードに乗った人間たち……貴方たちがファナ様の仰っていた方々ですね？」

「よ、妖精!？」

「私は妖精ではありませんよ。このラーヌ湖を守る水の精霊です。早速ですが、今見ていただいたのが我らの主、ラーヌ湖のヌシです」

「相当な暴れっぷりだな」

シグが言うと、水の精霊は困ったように頷いた。

「でも、あんなに遠いところにいては私たちも彼を止めようがないですけど……」

「その辺りは皆さんにお願いしていただくと言うことで」

水の精霊は「よろしいですね」とシグに向かってつぶやいた。彼の中から出てきた四人の少女はため息をついたり、あるいはひどく恐怖にかられた顔をしたりしていた。普段はお気楽娘のネルでさえ、嫌そうな顔をして湖中を眺めている。水の精霊もそれをわかっているせいか「頑張ってください」と薄情な台詞を残して、湖の真ん中に向かって飛んでいった。

「割と薄情なやつだな」

ア ril は湖の中央に飛んでいく精霊を見送りながらつぶやいた。

「いっつもこんな感じなのよ。もうちょつと管理能力が欲しいわよね」

マリスが膨れっ面をしながらア ril に賛同する。

「今更愚痴ってもしようがないでしょ。やれるだけのことはやろうよ」

愚痴る精霊たちをまとめるようにシグは槍を右手に持った。

全員がそれに頷く。

「しゃーない！一丁やってやるかぁ！」

「それで、私たちはどうすればいいの？」

「まず、私たちが四人がかりでヌシの注意を引きます。こちらに連れてくるので、何か一撃を加えてください。そうすれば、ヌシの注意は簡単に皆さんに向くはずですよ」

「それを俺たちでぶっ倒す……と」

「そーゆーことー」

ネルがいつものように無邪気に両手を挙げる。

「それじゃ、頼んだぜ」

ローナはふわりと宙に浮かび上がると、そのまま水の精霊を追う

ように湖の中央に向かった。マリスとセラもローナに続く。

「シグ君、ちょっといい？」

てっきりローナたちが続いて飛んでいったのかと思いきや、ネルはシグの耳にこっそり自分の口を当てた。

（あのね、あたしたちはヌシをこっちに誘い込むのに精一杯だから今回は力を貸してあげられないと思うから）

（ああ、わかった）

（それから、ヌシの口の中に吸い込まれたらピノ○オ状態になっちゃうから注意してね。もちろん、ピ○キオみたいに出られるとは限らないから）

ネルはくすくすと笑いながら「じゃーね」と飛び去ってしまった。（今の一言は、できれば戦闘前に言わないでほしかったなあ）

シグはネルの後姿に苦笑を浮かべながら、ヌシがこちらに誘い出されてくるのを待った。

数分後、湖の中央で再び水しぶきが上がった。小さな四つの影がヌシの四方を塞ぎ、上手く陸地へと誘導してくる。

「来た！」

シグが短く叫んだ。ア ril はもちろん、ノアも杖を構えて臨戦態勢になっている。

ヌシの泳ぐスピードはとてつもなく速く、下手をすれば精霊たちの少女は飲み込まれそうになっていた。

「まず私が魔法で威嚇をします！」

ノアが叫んだ。刹那、杖を前方に構えたノアは共に戦っているシグたちにも聞き取れぬ早口で呪文を唱えると、今度は前に構えている杖を真上に振り上げた。

「ラピッド・ライトニング！」

ノアの口から呪文が発せられると、杖の先から目にもとまらぬスピードで雷の矢がヌシの喉もと辺りを直撃した。ヌシの大きな目がぎよろりとこちらに向く。その威圧感はずが、この湖を守るだけの器に値するものだった。

（感心している場合じゃないな）

シグは世迷言を振り捨て、槍を構えた。先ほどノアが放ったように、いくら巨大とはいえヌシは水の生き物だ。雷の魔法が結う巧打と言うことは目に見えている。春嵐を操る力を持つネルの力を借りれば、時間をかけずに戦闘を終わらせることができるだろうが、あいにく彼女はヌシをおびき寄せるために力を使っている。シグはア Ril と協力してヌシの暴走を止めるしかなかった。

プシュ〜！

ヌシの頭上から水しぶきが吹き出した。

「いて！」

水しぶきを浴びたア Ril が悲鳴を上げた。どうやらこの水しぶきは雹のように堅い固体のようである。それが、前面にまかれ、シグたちは避けるので精一杯だった。

「馬鹿！避けてばかりじゃ逃げるだろ！」

ローナが怒声を浴びせながら、シグたちとは反対方向に向かおうとしているヌシの体を蹴飛ばした。いつの間にか四人の精霊の少女達も上空からヌシを囲うように四方を飛んでいる。

「私たちは皆みたいに武器は持てないんだから気をつけてよ！」

「ごめん！」

シグは謝りながら、助走をつけて大きく跳ぶ。その高さはセラたちが飛んでいる位置と同じくらいの高さほどである。

「横からだどうしても限度があるからな」

シグは槍の先端をヌシの頭上に向けて、そのまま降下した。普通の魔物ならここで鈍い音がして、骨の数本に穴を開けるのだが、ヌシの体を覆う皮は以上に厚く、槍の先端はヌシの体に少し食い込んだ程度に終わった。そして、ヌシの反撃。体を大きく揺さぶられ、シグは湖の中へと落とされる。

「キュ〜！」

すかさずテイルが湖の中に入り、湖中に沈みそうになる親友を背中ではしゃいだ。

「ありがとう、テイル」

テイルは短く鳴くと、ヌシの攻撃を避けながら陸地に戻った。

「それにしても意外と強敵だな、こりゃ」

ア ril が今にもヒビ割れそうな鍵爪を見ながらつぶやいた。

「堅すぎて魔法がなかなか通りません」

「あの堅い皮をなんとかしないと……」

流石の三人も手が出なかった。しかし、ヌシの暴走は酷くなるばかりだった。

「皆さん、ヌシ様の噴出口を狙ってください！ヌシ様の唯一の弱点です！」

今までどこに行っていたのか、水の精霊が仲間を連れて空から叫んだ。

「了解！」

シグは得意の跳躍で再びヌシの頭上はるか上まで飛び上がった。

「シグさん、私の魔法もお手伝いをします！」

ノアが叫んだ刹那、彼女の杖から発せられた雷の魔法が軌跡を描きながらシグの持つ槍の先端に吸着する。「これなら——」シグは勝利を確信した。

ズドッ！

先ほどまでとは違って、重く鈍い音がヌシの体から発せられた。刹那、ヌシの体から何かが抜け去ったようにへろへろと力なく湖の上で浮かんでしまった。

「弱点を突いたとは一撃で……」

「彼らは何者だ……？」

空を舞う水の精霊たちがどよとざわめく。

「何とか終わったな」

「は、はい。ありがとうございました」

呆けていた水の精霊たちはハッと我に返ると、口々にお礼を言った。四人の少女達もホッと一息のようだった。

戦闘が終わってからすぐ、ヌシが目を覚ましたので事の次第を全

て話してやると、ヌシは申し訳なさそうに何度も何度もシグたちに、四人の少女に、仲間達に謝っていた。ローナからは「性格を何とかしろ」とまでばやかれていた。

事件を解決し、シグとノアはア ril と別れた。別れる直前まで彼はシグたちと一緒にについていくといって聞かなかったが、それだけはノアの力添えで勘弁してもらった。

「シグさん、これでよかったですか？」

ノアがシグの後ろから尋ねてきた。

「うん」とだけシグは頷いた。

「冒険家、あんまりいい噂は聞かないからね。ア ril はそんな奴じゃないってわかってるけど、やっぱり彼のせいで彼女たちが聞きにさらされるのは嫌だからさ」

「ア ril さん、理由を話せば決してそんなことしないと思うけど…」
「わかってるよ。念のためさ」

シグの返答にノアは黙ったままだった。

再び重い沈黙が訪れる。

「シグさん…」

ノアは重々しく口を開いた。正直、まだ言おうか言うまいか迷っている状態だった。

(でも、これ以上姉さんと仲をこじれさせたくない)

一度は喉の奥までしまいこんだ言葉を再び口の中に呼び戻した。

「どうして、軍を辞めたんですか？」

その一言に、彼の中にいる精霊たちも反応した。出会ってから二週間近く経って発覚した彼の事情を知らないわけにはいかなかった。

「…君も、僕を軍に戻そうとしているの？」

シグは声を低くしてつぶやいた。前を向いているせいか、表情は読み取れないが怒っているわけではなさそうだ。

「姉さんが望むのならそうしてもらえように説得をします」

「……君はよっぽどルミネのことが好きなんだね」

シグの口から返ってきた言葉は予想外だった。ノアは案の定、そこでひるんでしまった。

「彼女と話しているときも懸命に姉を説得して何とかいざこざを避けようとしていた。大事な人と喧嘩なんかしたくないよな？」

「……………」

「だけど、僕は軍には戻らない」

『……………』

「……………」

「……………」

二人の会話はそれ以上進まなかった。不意をついた質問をされ、なおかつはつきりと断言されてしまったノアは完全に言葉を失ってしまったのだ。

第六章（前書き）

水の精霊の相談を無事に解決したシグ一行。しかし、もとシグの同僚でノアの姉であるルミネが現れたことで二人の間に亀裂が入ってしまった。

第六章

（陰り）

ルミネとの思いがけぬ再会から一週間が経過した。彼女と出会ってからというもの、シグはノアを避けていた。しかし、ファナから救助依頼が出されればゼル・リアには行っていた。ただし、シグ一人で（オールゼットでア ril に同行を頼むことはあった）。そして、今日もシグはファナに呼び出されて精霊の間にいた。

「シグ様、本当にいつもすみません」

玉座に座りながら、ファナは申し訳なさそうに眉をハの字に曲げていた。

「気にしないでいいよ」

シグはにっこりと微笑み、「それにしても」と続ける。

「ラ・ジェラーデの住人はよく下の世界ゼル・リアに落ちているけど、どこかにそういうスポットでもあるのかい？」

シグの問いにファナはますます眉をハの字に曲げる。

「すみません、私の管理がずさんなせいで……」

ファナは泣きそうな顔で自分を責めるようにつぶやいた。

「そ、そういう意味で言っただんじじゃないよ。ただ、そういう場所があるなら底に近づけないようにしたほうがいいと思って……」

「私、神様なのにそれらしいことが一つもできていないんです。いつも高位の巫女さんたちに任せきりで、どうして自分が選ばれたのか……」

ファナはこの後も自分を責め続けた。

こんなにも自虐的なファナは初めて見た。いつも暖かい表情で、ほんわかとした喋り方で、どんなにその場の雰囲気が悪くてもそこにまばゆい光を差し伸べてくれる彼女の知られざる性格だった。

（いや、この場合は性格というよりも自らに任された任の重みに負

けてしまったんだろう)

どこか見覚えのある光景に、シグはいつの間にかファナが座っている玉座の後ろに回り、椅子ごと彼女を抱きしめた。

「シグ様……」

ファナの声がいつもより近く感じた。

「ファナはよくやっているよ」

シグは彼女の耳元でささやいた。そしてもう一度、よくやっているとささやいた。

「十七歳で季節を司る神になって、今までずっと笑ってこれたのはすごいことだよ」

シグはファナを諭すように優しく言った。

「そうやって自分を責めないで。君は神様としてよくやっている。だからこそ、ラ・ジェラーデの皆は安心して毎日を送っているし、僕たち下の世界の住人にも住みよい毎日を送っている。この人たちがゼル・リアに落ちてしまうのも何か理由があるんだよ。君の管理がずさんだなんてことは絶対にならないから」

シグは優しく微笑むと、ファナの細くてさらさらの黒髪をそっと撫でた。背中まである黒髪はあまりに滑らかで、なぜかシグのほうが落ち着かなくなってきていた。

名残惜しそうに黒髪から手を離し、もう一度ファナに向けて微笑みかける。

「ありがとう、ファナ」

シグはまた、彼女の耳元にささやいた。

「君がいつも焼いてくれるパンはすごく美味しいよ。一緒に話をしながら君が笑うと僕もとても嬉しくなるんだ」

「シグ様？」

玉座の後ろ側からではわからないが、ファナはきつと照れているだろう。シグだって、それは同じだ。しかし、シグはかまわず続けた。

「苦しいときはいつでも相談してくれ。旅人の僕なんかでは君の責

任の重さを軽くしてあげることではできないだろうけど、誰にも相談しないまま苦しい思いをすることだけはしないでほしいんだ。そういう人をもう見たくないから……」

ファナはその時、一瞬だけ首を後ろに向けた。しかし、シグの体は既に玉座から離れて、再び赤い高級そうな絨毯の上を歩いていた。
(シグ様?)

どこか陰りのある後姿に、ファナは一瞬だが目の前を歩く人物を見失った。

第六章

くココルのお願いく

神殿区を後にしたシグは憩いの広場にいた。もちろん、巫女たちは修行の時間であるため、広場にはシグしかいない。

今日は風があまり吹いていない。ほてった顔を冷ますにはちょうどいいかと主ってここに来たのだが、完全に当てが外れた。

（いじわるなものだな）

シグはおもむろに空を見上げた。

今日も快晴。変わることはない青空が広がっている。

この数週間でいろんなことがあった。

昔、自分が助けた精霊との出会い。そして、その幼なじみとの出会い。ア ril との出会い、ノアとの出会い、そして、ルミネとの出会い……

ルミネは自分の代わりにシグを軍に連れ戻そうと彼を探して旅をしていた。しかし、意見の相違からルミネとの対立。

ア ril のささやかな疑惑。

いろんなことが折り重なっていた。そして、その中央にいるのはいずれもシグ本人だった。

（ア ril のことはまだしも、ルミネたちのほうは若干厄介かもしれない。だけど、僕は絶対に軍には戻りたくない。あんな生活を強いられるのはもうごめんだ）

シグの脳裏に先ほどのファナの姿が浮かぶ。

（彼女にだけはあぁなあってほしくない。あんな惨めな日々を送ることになるくらいならいつそのこと……）

しかし、シグにはそんなことをする勇気はなかった。それでも彼女は笑っていたから。それも自分のように作り笑顔じゃない。皆の期待に答えるために、皆と一緒に過ごすために彼女は笑っていた。

（あの頃、僕はどうしていた？）

駄目だ、シグは首を横に振った。今度は自分が自虐的になってしまふ。これではファナに申し訳が立たない。

（気にするのはよそう。まだ始まったばかりなんだ。これから考えていけばいい）

「あれ、シグさん？」

うっすら閉じられていた瞳に光をさえぎる黒い影。

「……マリス？」

シグはぼんやりとした意識で影の名を呼んだ。

「どうしたの、こんなところで」

「マリルこそ修行は？」

「アハ、さぼっちゃった」

マリルは照れくさそうに笑った。

「だって、どうしても作りたいものがみつかったんだもの。そうなるといてもたってもいられなくて」

「今度は何を作ろうとしているんだ？」

「アミュレットって、シグさんは知ってる？」

「ああ、聖なる力に守られたお守りのことだろ」

「そうそう。その作り方が載っている本を見つけてね。材料を探していたんだけど、フランジェっていう木の実だけが見つからなくて……」

「木の実？」

「そ。これから採りに行くところなんだけど、シグさんも来る？わたしの工房の地下を伝っていくんだけど、そんなに遠くないし」

「おもしろそうだね」

「じゃあ、決まり！」

マリスは両手を合わせて喜んだ。

二人は早速、憩いの広場の北側の林を抜けて工房に向かった。その間にマリスはいつもの自分のことや、寺院での失敗談を明るく話しか続けた。

「それでね……って、なんか私一人で喋っているね」

「全然かまわないよ。君とはゼル・リアに行くときくらいしか話したことはないからマリスのことが知れて嬉しいよ」

「そう？　なんか改まってそう言われると恥ずかしいな」

マリスはほんの少しだけ顔を背けた。その横顔はほんのり赤みを帯びている。

「なんなら、工房に遊びに来てよ。ファナもよく仕事を抜け出しては工房に遊びに来てるんだよ」

「邪魔じゃないなら行かせてもらおうかな」

「うん。じゃんじゃん来てね」

今日のマリルはいつもどこか違う気がした。どことなく女の子っぽい仕草に少し意識が浮き足立ちそうになる。

「あれ？」

そんなシグの意識を醒ますかのように横を歩くマリスが声をあげた。林を抜けた先の工房の前には小さな女の子が一人佇んでいた。

「あ…」

女の子も二人に気づいたのか、可愛らしい声を漏らした。

「ココルちゃんじゃない。どうしたの？」

「マリルお姉ちゃん、シグお兄ちゃん、助けて」

ココルの声はいつも以上にか細かった。両目からあふれ出る涙がココルの身に起こった事態の重さを感じさせていた。何とか落ち着かせて話を聞くとところによると、どうやら友達の子が重い風邪をひいてしまつて、もう五日も寝込んでいるのだそうだ。

「それで、どうしてマリスの工房に？」

「前に、マリルお姉ちゃんの本を読んだの。フランジェの実は効果の高い解熱剤だって…」

「そっか。それで私のところに来たんだね」

ココルは小さく頷く。

「ちょうどよかった。私たちもこれからフランジェの実を採りにいくところだったんだ。一緒においで」

「え？でも、どこにあるかわからないよ…」

「だーいじょうぶ。お姉ちゃんに任せて」

マリルは満面の笑顔で胸を叩いた。

ココルを加えた三人で工房に隠された地下通路を歩き、三人が出てきた場所は広い草原だった。そして、その中央にポツンと生えている一本の木。

「これがフランジェの木だよ」

フランジェの木は幹は細いが、近づいてみるとそれなりに大きい木だ。

「でも、実がなってないようだね」

シグの一言にココルの顔が不安に歪む。

「大丈夫。ちょっと待ってて。木に登って確かめてくるから。葉っぱに絡まっているときもあるから」

マリルはそう言って木の幹に足をかける。

「ちょっと待った！」

登ろうとするマリルをシグが止める。

「木に登るのは僕がやるよ」

「へ？大丈夫だよ、木登りは昔から得意だから」

そう言って微笑むマリスにシグは「そうじゃなくて…」と言いつらそうにマリスの下半身を指差した。マリルもすぐにそれを察したのかスカートの前を押さえた。

「てへへ、ごめんね。ありがと」

マリルは頬を染めながらフランジェの木から離れた。シグが代わりに木に登り、必死に実を探すが、見つかったのは一個だけでそれ以上は見つからなかった。

「これ以上はないみたいだね」

シグは木から飛び降りると、マリスに一個だけ採れたフランジェの実を渡した。

採取したフランジェの実を持ち帰り、マリスは意図も簡単に解熱剤を作ってしまった。

「はい、ココルちゃん。これをお友達に水と一緒に飲ませてあげて」
「ありがとうお姉ちゃん」

ココルは大事そうに薬の入った小瓶を両手でしっかりと持って工房を去っていった。

「よかったの？」

林の中に入るまで、ずっと振り返ってはシグたちに手を振っていたココルを見送りながらシグはマリスに向かってつぶやいた。

「いいんだよ」

マリスは小さくつぶやいた。

「フレンジェの木の成長は早いからね。一週間もすればまた実をつけるよ」

「一週間!？」

信じられない周期だ、シグはそんな顔をしていた。ゼル・リアでは果物はその季節にしか実らないし、貴重なもので値段もそれなりなのだ。

「ラ・ジェラーデの季節はね、季節神になった巫女の属性で決まってるってシグさん知ってた？」

「いや、初耳だよ」

なんという世界だろう。つまり、今は春の巫女だったファナが精霊神を務めているから季節は――

「年中春なの？」

「そういうこと。季節神の属性によって、この世界は少しずつ変化しているんだよ」

つまり、ここに来てからずっとシグが感じていた暖かいほのぼのとした風はファナの力の一部だったのだ。

「ここに来て第一に思ったんだ。ラ・ジェラーデってとても住みやすいところだなんて」

だとしたらファナちゃんのおかげだね、とマリスは自分のことのように無邪気に喜んだ。ふと、シグの頭に今朝のファナのことが頭

に浮かんだ。

「マリスは季節神がする仕事について何か知っているかい？」

マリスは、うーんと首を捻らせた。

「あんまりよく知らない。でも、私が修行をサボっているからじゃないよ。皆にだって知らされていないんだよ、季節神の仕事って」

「そうなの？」

マリスは小さく頷き、続きを話す。

「基本的に下の世界ゼル・リアの四季のコントロールは私たち寺院にいる巫女が行っているからね。神殿にはいる巫女たちは私たちのお目付け役といった感じかな。でも、視察はそんなにあるわけじゃないし、寺院にも各季節の精霊ごとにリーダーが決められているし」

「へえ。じゃあ、この間のユークさんって巫女が？」

「秋の精霊巫女たちのリーダーよ。でもすっかり、サボリ常習犯の私のお目付け役みたいになっちゃってるね」

マリスは恥ずかしそうに笑う。

「ねえ、この間の断片的な話によればシグさんはもともと騎士だったんでしょ？ 訓練とか私みたいにサボったりしてた？」

「え？ いや、サボってはいなかったよ。武器を扱う仕事に就くのは僕の夢だったし、憧れている人もいたし…」

「へえ、どんな人だったの？」

「それは…」

先ほどまで興味一身にマリルの話を聞いていたシグの表情に陰りが見えた。マリスはすぐにその人物がシグが騎士を辞めるにあたった理由に違いないと察した。

「ごめんなさい。嫌なことを聞いちゃって…」

敢えてそう言ってみる。本当は彼のいきさつについて聞きたい事だらけだったが、多分彼ははぐらかしてしまうだろう。シグは「気にしないでくれ」と愛想笑いのような笑みを見せた。しばらく二人の間に重い沈黙が流れる。それは、はるか上空を流れる雲よりも遅いスピードだった。

「ファナ……」

シグがぼそっとつぶやいた。

「え？」

よく聞き取れず、マリスは思わず聞き返してしまう。

「あの娘にだけは、僕と同じ目には遭わせたくない……」

「同じ目？」

「そうだ。あの娘は絶対に耐えられない」

「どういうこと？」

「後から来る無言の圧力に……功績を収めれば収めるほど、あの若僧はと罵られる。周りからのプレッシャーが大きくなる。板ばさみになる！」

「シグさん、落ち着いて！」

「マリス！」

大声を出したシグに、マリスは思わず肩を震わせた。そんな彼女にシグは一言「帰る」と落ち着いて、というよりはどこか蔑んだような表情で告げるとそれ以上何も言わずに工房を去っていった。

（一体なんなの？）

マリスはわけがわからず、一人工房内の椅子に座っていた。

なぜか、彼の後を追うことを躊躇した。心の中の自分が追いかけないほうがいいと言っていた。

（どうしてだろう……）

マリスはシグが出て行った工房の扉をじっと見つめていた。

第七章（前書き）

ファナの思いがけぬ弱い部分にシグは共感を覚えつつも自分と同じ過ちを繰り返してしまうのではないかと危惧してしまう。そして同時に自分の身に起こった過去を思い出してしまう。

第七章

（罪悪感）

「ちょいと助けてほしいことがあるんだよ」

ある日、いつものように雑貨を買いにオールゼットを訪れるとそう言われた。

「どうしたんだい？君が助けてほしいっていうなんて珍しいな」

ア ril は「そうか？」と言うがシグたちがピンチになると必ず駆けつけてくれたのはいつも彼だった。

「お前って普段はどこを拠点にしているかもわからないのに、やっていることだけはド派手だからな。五人の女の子と旅をしたり、変な女に追われていたりさ」

同情するア ril にシグはただただ苦笑するだけだった。

「それで助けてほしいことってというのは？」

シグが話を元に戻す。「そうそう」とア ril もすぐに本題を切り出した。

「実はな、今俺が受けているクエスト、冒険で少し行き詰っていて、力を貸してもらえないかなと思ってさ。あれはおそらく魔法が必要だ。お前だけじゃなくてこの前の女の子達にも来てもらったほうが心強い」

「そういうことか」

「協力してくれるか？」

「ああ、もちろん。ア ril にはいつも世話になっているからな」

「よっしゃあ！さすがシグだぜ」

ア ril はパチンと指を鳴らした。

「一度、彼女たちを呼びに行ってくるから君はここで待っていてくれないか？」

「：俺も一緒に行っちゃ駄目なのか？」

「え？」

きびすをかえそうとしていたシグの動きがピタリと止まる。

「俺が頼んだ依頼だから俺が彼女たちにもお願いしに行くのが普通
だろ？」

確かに常識的に考えればそうだろうが――

「大丈夫だよ、彼女たちのことは。きっと、いや絶対来てくれるよ」

「しかし、常識を考えればだな――」

まずい、とシグは思った。このまま話し合いを続けていれば自分が打ち負けてしまうことは目に見えてわかっている。彼はお人好しな人間なのだ。反射的に自分よりも

他人を優先してしまう癖がついていた。格なる上は――

「あ、ア ril ! すぐに戻ってくるから準備をして待っていてくれ！
それじゃ！」

シグはア ril が次の言葉を言う前に全速力でその場を走り去っていった。時間帯が悪く買い物客が多いため、シグの姿はすぐに雑踏に紛れて消えてしまった。

「何だって言うんだ、いったい：」

ア ril は後頭部を掻きながら小さなため息をついた。

いつものようにテイルをケサパの丘まで走らせていたシグは不意にその手綱を軽く引いた。

「キュ？」

ゆっくりと足を止めたテイルが怪訝そうな顔つきで主人を見つめた。

「なあ、テイル。このまま隠し通すのもどうかと思うよな？」

テイルはシグの言いたいことを察したのか深刻そうな顔をしたままシグの次の言葉を待った。

「ア rilルには今までこの地方の案内を初めとしていろんな場面で世話になってきたのに、このまま彼女たちのことを隠し通すのは果たして良いことなんだろうか…」

「キュ、キュキュ」

テイルはシグに何かを訴えるように鳴いた。

「確かに、僕もついこの間まで冒険家は自分の善悪で考える輩が多いと聞いてきたからア rilルにも黙っていた。けど、ルミネが現れたことで彼女が僕やノアを狙ってくる可能性が高くなってきた。もし彼女に僕らがラ・ジェラーデにいることがばれたら大変なことになると思う。そして、もしものときに一番の助けとなるのは……彼なんだ」

テイルは黙ったまま俯いた。

シグも再び手綱を引っ張りラ・ジェラーデへの道が開かれるケサパの丘へと急いだ。

ラ・ジェラーデに戻ったシグは早速主要メンバーたちを神殿区に集めてア rilルの依頼のことを話した。幸い、精霊四人もノアも快く了承してくれた。

「はあ…」

いつも穏やかで笑顔を絶やさないファナが珍しくため息をついた。

「どうしたの、ファナちゃん？」

「え？ ううん、なんでもないよ。皆、行ってらっしゃい」

「？」

気遣うセラに無理して笑ったファナは、シグたちが部屋から出て行った後もやはり同じようにやりきれないため息をつくのだった。

第七章

（冒険）

待ち合わせの場所では既に準備を整えたア ril が今か今かとシグたちの到着を待っていた。

「よう、来たな」

「ああ、皆もつれてきた」

「皆も……って、ノアちゃんだけじゃないか。後の四人はどうした？」

言ってからしまったと思った。ノアもどうフォローしようかとシグの顔をチラチラと横目で見ている。

「あ、えーっと、彼女たちはその、これないみたいでさ…」

「そ、そうか。彼女たちにもいてもらいたかったんだがな。それに可愛い娘ぞろいだし」

ア ril はにっと白い歯を見せて「もちろんノアちゃんも可愛いぜ」と笑った。彼は、よもやその四人がシグの体の中にいるとは微塵にも思わないだろう。

「まあ、来れないのならしょうがないな。三人で行くか」

ア ril は特に気にした様子もないようだった。ホッと胸をなでおろしたシグは改めて彼に目的地の場所を尋ねた。

「今回の目的地は水晶の洞窟だ」

「「水晶の洞窟？」」

モルグナードに来て日が浅い二人は揃って首をかしげた。

「ケサパの丘を越えて北に行ったところにある洞窟さ。その名の通り、洞窟の中には水晶がごろごろ生えている」

水晶がごろごろ生えている、というのはなかなか想像しにくい光景であるがシグたちはとりあえず頷いた。

「結構綺麗な場所で特に女性冒険家に人気の場所だ」

「へえ、どんな場所なんだろう…」

「そこで問題が起こったのか？」

シグの問いに「ああ」とア ril が頷く。

「クエストの目的自体は洞窟内にはびこっている魔物を討てていうそれだけなんだが、洞窟内部の仕掛けに手間取っているんだ。まあ、詳しいことは目的地についてから話すぜ」

いつものようにオールゼットの外で待たせているテイルに乗り、一行は一路水晶の洞窟を目指した。

水晶の洞窟はオールゼットからケサパの丘を越えて北の孤立した島の上にできた洞窟で、周囲は霧に囲まれた、ただでさえ寒い孤島に拍車をかけていた。

「キュ〜……」

テイルは弱々しくシグに助けを求める。

「オストリザードは寒さに弱いって言うからな。そこはさすがリザードだよな」

「キュ！」

「わあ、いてて！別にお前を馬鹿にしたわけじゃないって！」

噛み付かれたア ril は必死にテイルの口の中から自分の右手を引っ張った。

「しかし、この寒さは人間でも結構耐え難いものがあるな…」

「ええ…」

シグの一言にノアも手に息をかけながら同意した。外套を着ているというのに、この寒さは尋常ではない。

スポンジーという擬音が一番適切だろう——とテイルの口からようやく解放されたア ril は唾液と歯形まみれの右手をハンカチで拭きながら微笑して言った。

「その寒さもすぐに忘れるって。上を見上げてみな」

ア ril の言うとおりにシグとノアは霧の中を見上げてみると、そこには無数の水晶が霧の中だというのに綺麗な輝きを放っていた。

「うわあ…」

「きれい」

あまりの美しさに二人は感嘆の声しか出せなかった。少し進むとやがて洞窟の入り口がぼっかりと口を開けて待っていた。

「テイル、この先は危険だ。お前は島の入り口の暖かいところで待っていてくれ」

「キュウ」

わかったと言わんばかりにテイルは頷くと、そのまま来た道を引き返して行った。

「よし、行くか！」

霧で完全にテイルの姿が見えなくなった後、三人は水晶の洞窟攻略を開始した。

水晶は洞窟の入り口から三人を歓迎するかのごとくまばゆい光を発していた。

「うわあ、綺麗ですね。水晶でできた花ですよ」

ノアは滅多に見られない形の花や石にすっかり夢中のようなでいった。洞窟はところどころ別れ道が存在したが、すべて最後には一本に繋がる道になっていたため迷うということはまずなかった。「それで、問題の箇所はどこなんだ？」

「この先だ。三つの別れ道があって、正解ルートは真ん中なんだが……」

「右と左の道に謎解きがあるってわけか」

「そういうこと」

会話をしてもなく、噂の別れ道に遭遇した三人。

「さっきも話したとおり真ん中が正解ルートなんだが、少し進むと水の壁で阻まれているんだ」

「ということは右と左の別れ道に仕掛けがあるってことですね」

「ああ。変な機械がおいてあって俺一人ではどうにもならなかったんだ」

「とにかく行ってみよう」

三人はまず、左の別れ道を進むことにした。ずっと一本道の直線で途中に谷もあったが、なんなく奥地までたどり着く。別れ道の終点には隅っこのほうに人が一人は入れるくらいのカプセルのようなものが一台設置してあるだけで他には何もなかった。

「これがアリの言うっていた機械か」

シグは軽くカプセルの周囲を見回してみるが、スイッチのようなものは何一つ見つからない。

「入ってみたんですか？」

ノアの問いにアリルは小さく頷いた。

「だが、何の反応もしなくてな。もしかしたら魔力に反応するんじゃないかなと思ったんだ」

「なるほど。よし…」

シグはカプセルの台に足をかけた。

（魔力に反応するのなら、彼女たちの力にも反応するはず…）

シグはカプセルの中に入り、目を閉じた。刹那、シグの頭に激痛が走った。

『きゃっ!?!』

『わわ!!!』

それはどうやら彼の意識の中にいる彼女たちも同じようだった。

『何これ？魔力が反応して…』

（皆、大丈夫か？）

『シグ様!』

『大丈夫じゃないけど、痛いってわけじゃないな』

『あたしたちの魔力がこの機械に反応している』

（じゃあ、アリの仮説は当たっていたみたいだね）

『そういうことになるね』

頭の激痛も最初ほどではなく、徐々に収まってきている。同調しているということだろうか。

「おい、大丈夫か！」

「シグさん！」

仲間に名前を呼ばれ、シグはうつすらと目を開けた。

「二人とも…？」

「シグさん、よかった…」

ノアはへなへなとその場に座り込んでしまった。

「何の反応も示さねえからびっくりしただろうが」

「ごめん。それで、機械は？」

「あ？ ああ、低い音をたてながら動いているみたいだぜ」

「仕掛けの解除は成功だね。よし、右のほうの仕掛けも解きに行こう」

そう言って、シグがカプセルから離れるや否や、機械は再びゆっくりと機能を停止した。

「止まっちゃったぞ？」

「本当だ…」

「もしかして、右の機械と同時に魔力を送らないといけないのかしら？」

「え？」

「ア ril さん、右の別れ道にも同じ仕掛けがあるんですよね？」

「ああ。これと同じ機械があった」

「ということはもう一台は私が動かさないといけない」

「ノア、やってくれるか？」

「もちろんです。さあ、行きましょうア ril さん」

さっきのシグの例もあって流石に断られるかと思っていたが、それはシグとア ril の思い過ぎのようだった。数分後、二台のカプセルに乗った二人の魔導師の魔力が送られ、中央の扉が地響きを起こしながら開いた。

「この奥に目標の奴がいなかったら拍子抜けだな」

ア ril は軽口を叩きながら扉の奥へと進む。扉の奥も今まで同様やはり迷路のように分岐はしていたが、全て一本の道へと繋がる道ばかりだった。道を進む途中、三人は水晶とは違う輝きを放つ球体を見つけた。

「あれは？」

「さあ、魔物とは違うみたいだけど？」

「俺が調べてきてやる！」

アリルはゆっくりと球体に近づいた。

（すごい光だぜ。売ったらどのくらいの値がつくかな？）

頭の中でそろばんを弾きながら、そっと手を伸ばした。刹那、球体が急にアリルを鋭く睨みつけた。

「！！」

球体はまばゆい光を発しながら粉雪のようなものをアリルに吹き付ける。

「ぐわああ！」

「アリルさん！」

ノアが悲鳴を上げるように叫び、シグは槍を構えて敵に突きを加えた。球体は特にダメージを受けた様子もなくシグたちから距離をおくように宙を泳ぐ。

「大丈夫か？」

「ああ、平気だぜ。まさか魔物だとは思わなかった。しかも、今の粉雪からしてどうやらビンゴのようだぜ」

「じゃあ、あれが討伐する魔物？」

シグは改めて宙に浮く球体を凝視した。みたところウィスプ系の魔物のようなだが、好戦的でしかも能力は桁違いに高い。本来のウィスプ系とはまったく逆の性質を持つ球体だった。

球体はシグたちが体勢を立て直す前に粉雪の第二波をかける。

『相手が雪で来るならこっちの炎で溶かしてやろう！』

「そうだね」

シグはメンバーの誰にも気づかれないように頷くと、槍を使ったジャンプで球体の後ろに回りこんだ。

「うまい！」

アリルが歓喜の声をあげる。後ろに回りこんだシグはそのまま球体に右手を添えて、ローナから教えられた言葉を紡ぐ。

「フレインプラスター！」

まるでドラゴンが放つブレスのような炎が球体全部をまんべんなく炎で焼き尽くした。球体を覆っていた雪が溶け、辺りは一瞬にして蒸気に包み込まれる。

「やったか!？」

蒸気に包まれながら敵の存在を確認する。

「いえ、まだです！」

一瞬の判断だった。ノアは杖をその方向に向けると呪文を早口で唱えてシグと同じように炎の魔法を放った。ローナの炎と違ってこちらは火球弾のようにスピードが速いが、方向変換はできない直球だ。しかし、ノアが感じたとおりならば……

「あつっ！い！！」

しかし返ってきたのは魔物の悲鳴ではなく女の子の悲鳴だった。

「!？」

「女の子の声？」

悲鳴から判断してさっきまで戦っていた相手ではないことは確かだが、蒸気が一向に晴れないため油断はできない。シグたちは武器を構えたまま蒸気が晴れてその正体が見えるのを待った。

あれだけの雪を溶かしてできた蒸気がようやく晴れ、声の正体がゆっくりと姿を現した。

「え？」

「うそ……」

「ありえねえって……」

円を描いたような三人の隊列の中心には女の子が一人ちょこんとしゃがみこんでいるだけだった。

「ふうー、助かったあ。でも、もう少し優しく助けてほしかったな

あ……」

少女は三人の存在を確認するなりそんなことをつぶやいた。

「おいおいどういふこったい!？魔物が突然、お、女の子になったぞ!？」

ア ril は何度も目をこすったり、頬を叩いたりしている。ノアもア ril ほど驚いてはいないようだが、初めて見たためかやはり言葉が出ない。

『スウちゃん!』

シグの意識の中にいるセラが叫んだ。

(セラ、やっぱりこの娘は…)

『冬の精霊です。コルちゃんのお友達なんですよ』

(やっぱり)

「シグさん、この子はもしかして…」

ノアがひそひそと耳打ちをする。

「ああ、この子はどうかやら冬の精霊の子供らしい」

「こんなところにも迷い込んだ子がいたんですね」

少し呆れるものの偶然にもラ・ジェラーデの住人を助けたのはフアナには吉報だろう。

「よし、この子は連れて帰ろう」

「そうですね」

「おいおい、ちょっと待てい!」

ア ril が素っ頓狂な声をあげた。

「見ず知らずの子を連れて帰ってどうするつもりだよ? お前ら、旅の途中だろ? 根無し草にこんな小さな子をつきあわせるつもりか?」

「失礼ねえ! あたしは旅するくらいなんてことないわ! だって飛んでるだけだもん」

「はあ?」

事情を知らないア ril は顔をしかめる。

(しまった。また墓穴掘っちゃった。でも、ここで連れて帰らないなんて言うことはできなかったし…)

流石に堂々と空を飛ぶなんて言われてしまっただけではフォローの仕様がなかった。少女の言うことは否定することはできたが、そうすればこの少女は絶対に反論するに決まっている。余計に混乱を招くだけである。

（ああもう、何が何だかわからなくなってきちゃったな…）

すっかりとお手上げとばかりにシグは後頭部を掻きながら意識の中にいる四人の少女たちに必死に言い訳を考えてもらっていた。

「取り込み中のところを悪いが――」

言い争いをしている四人の後ろから低い声が冷たく当たる。振り返ってみればルミネと彼女の部下達が険悪な雰囲気をかもし出しながら立っていた。

第七章

「力と正義」

「ノア、まだ考え直す気にはならないか？」

ルミネは口調こそ冷静だったものの、その表情からは怒気にも似た感情がふつふつと湧き出ていた。

「姉さん！私は姉さんに協力をしたかっただけなんです！だからもう止めてください！」

「止めるわけにはいかぬ。軍の命令は絶対だ」

「おいおいもう少しお手柔らかに話し合ったらどうだよ？ノアには戦意はないんだからさあ」

「冒険家風情の意見などに貸す耳は持たぬ」

「冒険家風情……」

それまで穏やかな顔つきでなだめようとしていたアリルの表情が一瞬にして凍りついた。

「あ、アリル？」

「おい、あんた。冒険家をなめていると痛い目みるぜ。大勢で群れているお前らなんぞに偉そうに言われる筋合いはねえ」

「群れているだろ？」

ルミネの表情に殺気が走る。

「どうやら私がこの手で罰を下してやらねば気がすまないようだな。お前にはこの間の邪魔の借りもあることだしな」

ルミネが腰に下げた長剣をスラリと抜き放つ。と同時に彼女の部下である兵士たちも戦闘態勢をとる。

「姉さん、やめてください！」

「ルミネ！ここには子供がいるんだ！やめてくれ！」

「問答無用！シグレット・アルグース！貴様もノアと同様帝国に送り返してくれる！」

ルミネはもはや剣を収める冷静さは失っていた。このまま戦闘になれば後ろにいる精霊の子供にも被害が及んでしまうかもしれない。
(仕方ない。このまま説得を続けるだけじゃこの子を守ることではできない)

『シグ様!?!』

(やりたくなんかないんだ。でも…)

『わかってるよ。みなまで言うなって』

『シグの気持ちはあたたきたちによく届いているんだから』

「いくぞ!」

ルミネと彼女の護衛兵ら三人が彼女の号令で一斉に飛び掛ってくる。数字上は四対三で――さらにルミネたちは全員軍人であることを考慮に入れると――決して有利な闘いにはならないはずであるが、シグたち三人は誰一人傷つくことなく呆気なく戦闘を終わらせることに成功する。

(すごい。四人の力が合わさるとここまで強い力が出せるのか…)

そう。闘いは四対三というよりはむしろ四対一といったほうが正確だった。ルミネたちが飛び出した瞬間、彼女らに牽制の炎を浴びせ、そのまま精霊の加護で速度と力を増したシグが兵隊三人を槍で一閃。なおも立ち上がるとうとする者には手刀を浴びせて気絶させた。この時点で敵はルミネ一人。ルミネは仲間の戦闘不能に一瞬は動揺を見せた。しかし、もうやめろというシグの説得はそんな彼女を逆上させるだけだった。再びシグに向かって振り下ろされる剣をすかさず槍で防御をし、そのまま木枯らしをまとった槍でルミネの握っている剣を弾きあげた。剣はそのまま虚空を舞い、シグの後ろに甲高い金属音を響かせて地面に落ちた。

(す、すげえ…)

その様子を後ろで見ていたア ril はあまりに一瞬の出来事に言葉を失っていた。

(いや、すごいなんてものじゃない。こいつの動きはまるで化け物だ…)

両膝が笑っている。額から滲み出る汗が頬を伝って凍りついた床に滴り落ちる。もちろん、勝負をけしかけたルミネもそれを感じていた。一体こいつの身に何が起こったというのだ。心の中で何度も問いかけた。軍を辞めて、旅人に成り下がった男風情に負ける要因などないはずだった。なのに、目の前の男は若干息を乱している程度でほとんど体力を減らしていなかった。

「なぜだ？なぜ、この私がなぜこんな旅人なんかになり下がった男の槍なぞに敗れるのだ！」

「「……………」」

ルミネの怒りのこもった叫びに誰も答えることはできなかった。

「ハア、ハア、ハア……」

シグは息を整えながらルミネに向かって手を差し出した。

「ルミネ、もうやめてくれ。こんなことをしたって僕の気持ちは……！？」

ドクン！擬音にするならばこれが一番適当なものだろう。シグの中で何かが起こった。

「うわあああああああ！！！！」

シグは突然狂ったように絶叫した。悲鳴を上げながら頭を掻きむしった。激しく両手で押さえつけもした。しかし、シグに起こった変化は止まらない。

「うわあああああ！！！！」

「シグ、シグ！しっかりしろ、シグ！！」

「シグさん！シグさん！！」

ア ril が暴走するシグを押さえにかかると、力が上昇した状態のシグはそれを乱暴に振り払った。振り払われたア ril はそのまま勢いで氷の壁に激突する。

「うわあああああ！！ぐ、があああああ！！！！」

シグの突然の暴走は収まることはなかった。

ノアは姉が何かを叫びながら去っていくのを見たが、何を言っているのかまではわからなかった。彼女らが撤退した直後、暴走してい

るシグの体が真っ白に光り輝いた。

「ノアさん、ア Ril さん！この光の中に入ってください！」

「何！？」

「セラさん！？」

「急いで！」

せかされた二人はわけもわからぬまま、シグから発せられた光の中に入った。

（この光はもしかしてファナさんの…？）

ノアの思案はそのまま光に吸い込まれ、自分の姿と共に消えていった。

第八章（前書き）

アリの冒険に付き合って水晶の洞窟に向かったシグ一行。クエストは問題なく終了したのだが、思いもよらぬ不運の連続で、さらにシグが精神力の限界を超えて昏睡状態になってしまう。

第八章

く暗雲く

なだれ込むようにして強制転移させられたノアたちは精霊王の間に崩れ落ちた。

「皆さん、無事ですか!？」

ファナがドミノ倒しのように倒れている少女達に駆け寄る。

「ファナさん…」

「「ファナちゃん!」」

「「ファナ!？」」

ア ril とシグ以外の全員の声が綺麗にはもった。

「無事……みたいですね」

ファナはホッと安堵の息をつき、視線を少女達からシグに向ける。そして青白くなっている彼の顔に手を当てて何かを念じていた。

「救護の皆さん!」

そしていつになく冷静、かつ大きな声で精霊王の間の出入り口に向かって叫んだ。やがて担架を持った二人組みの精霊巫女たちが現れ、シグをその上に乗せると再び精霊王の間を去っていった。

「シグ様は大変危険な状態です。このままでは死に至る可能性もあるかもしれません」

「ファナさん! 一体どういうことなんですか!？」

「そうだ! まずは理由を説明してくれファナ! さっきのだって、ありゃあ強制転移術だろ? 前神から禁呪とされていた物を使うなんてどうかしてるぜ!」

「ローナさん、落ち着いてください」

「そうだよ。まずはファナちゃんの話を聞こう」

ローナを必死に落ち着かせる精霊の少女たちの横でア ril が「あのさ」と気まずそうに右手をあげた。

「お取り込み中のところを悪いんだけど、シグの異変も含めて俺に今までのことを全て話してくれないかなあ。いきなりこんなところに連れてこられて、かなり頭がパニックなんだよ」

「「あ……」」

全員が忘れていたとばかりに硬直する。そして、途端に困惑の表情が浮かび、精霊の少女たちは互いの顔を見合うばかりである。ただ一人ファナだけが「もちろん説明します」と言って微笑んだ。

「もう隠すことなんて無理でしょ？それにシグ様がお世話になっている方だもん。絶対に悪い人じゃないです」

ファナはそう言って無邪気に笑った。

ファナは話が長くなるので、と会議室にアリルたちを移動させると、今までの経緯をすべて話した。そして、今回のシグの異変について今の段階でわかっていることも全て伝えた。

「おそらくシグ様の異変の原因は精霊四人の同時憑依による精神の限界です」

「「精神の限界？」」

精霊の少女四人が声を揃えた。

ファナは頷き、話を続けた。

「前例のないことなので図書館の資料はほとんど役に立たなかったの。でも、私が前神から受けた記憶の奥底に今回のような一例があったんです。相当奥底にあったくらいだからきつと、もっと昔の神様の時代のものかもしれない」

「私たち四人が一度にシグ様の精神の中に入ったから……？」

俯いたままつぶやくセラにファナは堅く頷いた。

「人間の精神力や魔法力といったものは私たちのそれよりもはるかに限界値が低いです。そんな彼らに精神体となった私たちが入ると、彼らの力は一気に消耗していきます。憑依した者の精神から念

話をするだけでもかなりの力を消費します。私に与えられた記憶を辿ってみると、その時はどうやらどうしても勝てない強敵を封印するために限界値以上の力を使い、その方の精神もろともその精霊は消滅したと……」

「じゃあ、じゃあシグは助からないっていうの！」

ネルが涙ぐみながら叫ぶ。

「落ち着いてネルちゃん。シグさんの精神はまだ生きてる。ここから息を吹き返す可能性だって十分にあるわ」

「だけど、治し方がわからないんじゃないだろうか？」
眉をハの字に曲げてローナがつぶやく。そう、肝心なのはそこなのだ。いかにシグの精神が生きているとしてもそこからの復帰方がわからなければ見殺してしまっただけだ。

「大丈夫……」

しかしファナは優しく微笑むだけだった。

「ア ril さん、私たちのしでかしたことに巻き込んでしまったって本当に申し訳なく思っています。ア ril さんのことは、たまにシグ様が武勇伝をお話になられるときにそれとなく聞いていました。本当に、シグ様の言ったとおりの方ですね。私も冒険家さんたちって粗野な人ばかりだと思っていましたから。ア ril さんが私たちのことを知ってもなんとも思わない人でよかったです」

ファナはそう言い残して会議室を去っていった。おそらくこれから図書館の資料と自分に与えられた記憶の二つと格闘をするのだろう。部屋に残された六人も、やがてそれぞれができるべきことをするために解散した。

ア ril は憩いの広場に來ていた。できることなら自分もシグを助けるために死力を尽くしたいのだが、話を聞いているとどうにも自分できることは何もないと長年の勘で悟っていた。

ベンチを陣取るように両腕と両足を広げて座って、空を見上げてみる。

雲ひとつない青空と、時折吹く心地よい風。この場所に、春はい

つも訪れていた。

「ア ril さん、ここにいたんですね」

「ああ…」

ア ril は真上を向いたまま返事だけ返した。

「今まで黙っていてごめんなさい」

「あん？」

ア ril は空を見上げるのをやめて、目の前に立っている少女を見上げた。

「あんた、俺に謝るようなことしたっけか？」

「はい。ずっと、ここのことを黙っていたことです」

「そのことか」

ア ril はノアが真面目な顔をしているから何事かと思ったが表情を引き締めて損をしたようだ。

「別にそのことならあんたが謝ることじゃないぜ。もちろん、あいっだってそうだ。冒険家は粗野で私欲のためにはどんな危険も顧みない。自分に利益があるのなら彼女たちの存在をばらすこともいとわない。あいっはそう思っていたんだろ？」

「……………」

「あゝあ、結局俺はあいっのなんだったのかねえ…」

ア ril は自嘲じみた笑みを浮かべた。

「あいっのすることは面白くてな、思わず自分が冒険家であることを忘れてしまうんだ。人のために自分の力を惜しみなく出しているあいっに惹かれたんだな」

「ア ril さん、シグさんはけして…」

「わかってるよ。俺があいっを信用していたように、あいっも俺を信用してくれていたのは十分感じていた。だから、ここのことを黙っていたことくらい許してやるよ。こうやって優しいフリして近づいてくる輩もいるからな」

「……………」

「ところで、ノアはどうしてシグと一緒にいるんだ？他の四人はこ

の世界の仲間を救うためにシグに協力している。あんたはどうして？」

「私は……シグさんに聞きたいことがあるんです」

「聞きたいこと？」

ノアは小さく頷いた。そして、ルミネのことと、彼女とシグの間柄について簡単に説明した。

「私も姉から聞いた話ばかりなのでどこまで本当なのかはわからないのですけど……」

「ふーん、あいつにもずいぶん大変なことがあったんだな。しかし、それを追いかけるあんたの姉さんもたいしたものだぜ」

「ええ。私は姉が不憫で仕方なくて。それで、帝国の病院を抜け出したんです」

「お供もなしでか？」

「私は帝国での地位は一般魔導師で、姉みたいに隊を持っていませんから」

「ふーん。しかし、重い過去ってのは普通は話したがないだろうからなあ……」

「でも！当時一番親しくしていた姉に理由くらい教えてあげてもいいんじゃないでしょうか。あの時の姉の落ち込みようは見ていても辛かった……」

「……ルミネはシグのことが好きなのか？」

「へ？い、いきなり何を言うんです？」

「いやだってさ、ここまで聞いたら普通はそう思うだろ。いくら親しかったとはいえ、ただ軍を辞めた理由を聞くために一人の人間を普通は探さないぜ」

「そ、そうでしょうか？」

「だとしたら面白い構図になりそうだぜ。あの女隊長と、それからこの住人たち。特にシグのことを様付けして呼んでいたあの二人は特にシグに対するポイントは高いと思うぜ」

「ア ril さん、急に饒舌になってませんか？」

「そうか？俺はいつもこんなものだぞ。そういえば、ノアはシグのことを何とも思っちゃいないのか？」

「わ、私！？私がシグさんを…ですか？ど、どうでしょうか…」

「まだ会って十数日とはいえ基本的に二人旅立っただろ？なんか胸キュンな話はないのか？」

「ありませんよー。それに、ア ril さんは忘れているようですけど、シグさんの意識の中にはいつもセラさんや他の皆さんが一緒に――」

「ノアの思い通りにアタックできなかった…と」

「もうー！何でそうなるんですか！」

「ハハハ。赤くなって可愛いな」

「からかわないでください！」

重い話を覚悟で話したノアだったが、彼女が一番気にしていたことをあっさりと受け流してくれたア ril 。そして、この状況下なのに雰囲気明るくしてくれたア ril にノアは心底感謝をした。自分たちにできることはないかもしれないけれど、シグの回復を待つて祈ることはできる。ならば、その祈りを彼の元に届けようではないか。二人はそう決心した。

第八章

（行動）

ファナはそっと部屋の扉を開けた。ベッドでは暗闇の底から目覚めぬままのシグが眠っている。

今、ファナのほかにはこの部屋に誰もいない。彼の看病に当たっていた巫女たちにも出払ってもらった。

「シグ様……」

そっと呼びかけるがシグの眉はピクリとも動かない。

「こんなときなのに貴方に何も与えることができなくて本当にごめんなさい。今の私には、皆を励ましてあげることしかできなかった。私は、貴方に何も返してあげることができない……」

ファナはシグの額にそっと右手を当てた。シグの体の中から感じる彼の意識はさっき触れたときに比べて少し陰っていた。

（このまま何もできないの？このまま……）

精霊の少女たちはマリスの工房に集まっていた。最初はシグが運ばれた部屋に行こうとしたのだが、扉の前に立っていた上級巫女たちに足止めを食らったのである。結局彼女たちは図書館で邪を取り除くといわれるお守りの作り方だけを移して帰ったのだった。

「このお守りに必要なものは、星屑の欠片と鉄鏝と聖水、それとあと一つは……なんて書いてあるのかな？かすれていてよく読めないよ」

「星屑の欠片と聖水はわかるけど、鉄鏝がこのお守りを作るのにどう関係するんだ？」

「さあ？」

「星屑の欠片って何のことでしょう？」

「さあ？」

「お前、さあばかり言わずにちよっとは考えろよ」

「だってえ、考えてもわからないから困ってるんじゃない？」

「やれやれ…」

「とにかく鉄錆はすぐに手に入るよね。あと、聖水は水の精霊が何か知っているかもしれないし。残るはこの星屑の欠片と、かすれて読めない部分の材料」

「まずは手に入るものから探していこう。マリスはその間に文字の解読を頼む」

「了解」

「皆、行くよ！」

「うん！」

「はい！」

ローナたちはお守りを作るための材料を求め、ラ・ジェラーデを飛び去っていった。

ファナは図書館で資料を調べてはシグのもとに足を運んだ。

「シグ様、体調はいかがですか？」

いつものように声をかけても返答はない。今日はいつもと違ってパンの入ったかごを持っていた。

「シグ様、気晴らしにパンを焼いたんです。いつもと違う材料をマリルちゃんがくれたのでそれを入れてみたらすごく美味しかったんですよ。ほんのり甘くて、でも香ばしいんです。それでシグ様にも思っ」

いつものシグだったら嬉しそうに微笑んでファナからパンを受け取るだろう。しかし、彼の手はもう何日も動いていなかった。

「私がつとしっかりしていれば……」

何度悔やんでも悔やみきれない。どうすればいいのか対策も依然として見つからない。ファナの魔力を送ることで一時的に精神崩壊による死は遅らせているが、それもいつまで持つのか……

「シグ様、早く元気になって……」

ファナはパンの入ったかごを抱きしめながらひたすら祈り続けた。その頃、ア ril たちは水晶の洞窟がある孤島に待たせ続けていたテイルを迎えにゼル・リアに降りていた。テイルならばわずか一時間程度の距離も人間の足ではわずかな地形の変化であつという間に足をすくわれる。

「正直に言うとき……」

前を歩くア ril がふと足を止めてつぶやいた。

「俺はシグが目が覚めるまではテイルを迎えに行かないほうがいいと思ってる……」

「どうしてですか？ ずっとあんなところに待たせっぱなしにしていたら他の魔物にやられてしまうかもしれないのに」

「そういうことじゃない。俺たち二人だけで迎えに来たらあいつは真っ先にこう聞くとするぞ。『シグはどうした』って」

「あ……」

「その時俺たちはどう反応してやればいい？ 奴が寝坊したから、なんて言い訳は通用しないだろうし本当のことを伝えたら……」

「……」

「長年一緒にいる間柄だからこそ、こういうことはあまり伝えずにいたいじゃねえか」

「……いいえ。長年一緒にいる間柄だからこそ、あの子には伝えるべきです。あの子にだけ嘘をつくのは嫌です！」

「……そういうところは姉さんとそっくりみたいだな、ノアは」

ため息をつきながらア ril は苦笑した。

「お前の姉さんも今みたいに真正直な目をしていたぜ。やっぱり姉妹なのな」

「そんなに似てました？」

「ああ、似てた。血は争えないってやつか？」

「それって、少し使い方が違います？」

ノアの指摘にア ril は楽しげに口笛を吹いてごまかした。

水晶の洞窟がある孤島の入り口でテイルは主人達の帰りを今か今かと待っていた。こっちの世界では少なくともあれから一日は経ったはずなのに、孤島の入り口に立っているオストリザードはひたむきに主人の帰りを待っていたのだ。

「おーい、テイル！」

自分の進行方向とは反対側から自分を呼ぶ声に、テイルは少し疑問に思いつつも振り返った。向こうから歩いてくるのはいつも笑い声がうるさくて無駄に明るい冒険家と、あのルミネとかいう、シグの知り合いの妹で共通の目的を持った魔導師の少女と…。

「キュキュツ、キュ〜？」

テイルはシグはどうしたと言いたげに怪訝そうに鳴いた。

「シグさんは今、大変なことになっているの。理由はラ・ジェラーデに戻ったら話すから、今は何も聞かずにいて…」

ノアの反応を見て、テイルも一瞬で判断したらしい。小さく頷くと、背をかがめて二人を乗せてケサパの丘まで走り出した。

ラ・ジェラーデに戻った二人は神殿区の巫女たちに断りを入れてテイルをシグの寝ている部屋まで連れて行った。部屋の中ではフアナとマリスがなにやら話をしていた。

「あ、ノアさんにア ril さん。それにテイルさんまで」

「こんにちは」

「話の邪魔をして悪いな。ちょっとこいつにも今の状況を知っておいてほしくてな」

ア ril はそう言うと、テイルの手綱をゆっくりと離した。テイル

は静かに親友のそばに歩み寄ると、彼の頬に顔を擦り付けた。

「何をしているの？」

「おそらくシグさんに自分が帰ってきたことを知らせているのでは？」

「シグ、テイルを連れて帰ってきたぜ」

誰が話しかけてもシグが無反応なことに変わりはない。

「やっぱり駄目か？　そういえばマリス以外の三人はどうしたんだ？」

「今、材料探しに行ってるよ」

「材料探しって？」

「シグさんが早く良くなるように邪を打ち砕くと言われているお守りを作ろうとしているんだけど、なかなか材料が見つからなくて」

「なんだ。俺たちに言ってくれば探しに行くのに。なあ？」

「はい。マリスさん、その材料って何なんですか？」

「探しに行ってくれるのはありがたいんだけど、皆が空から探しても見つからないものなの」

「マリスちゃん、もしかしてアミュレットを作ろうとしているの？」

「アミュレット？」

首を傾げたノアとは逆にア ril は「なるほどね」となにやら納得していた。

「昔から病に倒れたときにはアミュレットの首飾りを作って病人に持たせるというが、ラ・ジェラーデにもそういう習慣があったんだな」

「ううん。基本的に精霊は病気になるかならないよ。これは私の研究の賜物」

「でも、それを理由に巫女の修行をサボっちゃ駄目だよ」

「すみません……」

「それで、アミュレットの材料に足りないものは何があるんだ？」

「星屑の欠片ともう一つは、文字がかすれてわからないんだ」

マリスは言いながら全員に見えるように本を机に広げた。アミュレットと書かれたレシピ表にはものの見事に四つ目の材料の部分に

だけ大きな染みがついていた。

「こりゃひどいな」

「でしょう。文字の部分のなところから何とかこの材料の正体を解読しようとしているんだけど……」

「ふうむ、オールゼットの図書館で俺も少し調べてみるかな。ゼル・リアで作られたものだからきつと西方が書いてある本くらいあるはずだ」

「私も行きます」

「キュ、キュ！」

ア ril たち二人と一匹があわただしく部屋を出て行き、マリスも作業の準備をしておくといって自分の隠れ工房へと帰っていった。

「アミュレット？ うーん、どこかで聞いたことがあるような……」

第八章

「アミュレット」

それからさらに数日後、アミュレットの材料は四つ目以外全て揃い、作業の道具も調った。

「あとは四つ目だけ……か」

マリスが深いため息をついた。何とか四つめの材料が書かれている部分を解読しようと日夜奮闘しているため、彼女の目の下には大きなクマが浮かんでいた。

「マリスさん、解読のほうは……」

セラの問いにマリスは弱々しく「ぜんぜんだめ」と笑って見せた。

「ア ril たちもそのことは調べてくれていたんじゃないのか？」
「ファナから聞くとところによるとどうにも上手くいってないんだってよ」

「「……………」」

工房内に暗く重い空気が漂う中、工房の扉を叩く音が聞こえた。幼なじみの四人以外にこの工房のありかを知っている人物はシグしかいないはずなのだが。マリスは疑問に思いながらも扉を開けた。

扉の外には神殿区の上位巫女が立っていた。

「あの、何の御用でしょうか？」

慣れない丁寧語を使いながら巫女の要件を問う。

「ファナ様より伝言を頼まれて来た。今すぐ、みつつの材料と調合用具を持って神殿区に参られよ。以上だ」

巫女は淡々と伝言の内容を伝えると、さっさと工房からいなくなってしまった。

「どなただったんですか？」

ひよこつとセラが顔を出す。

「ファナちゃんがアミュレットの材料三つと調合用具を持って神殿に来たって」

「でも、材料は三つしかないんだよ？」

「それはわかってるけど……」

「とにかく神殿に行って見ましょう」

セラの一言に、その場にいた全員が固く頷いた。

神殿区、シグの寝かされている部屋にはア ril とノア、そしてファナが四人の少女の到着を待っていた。

「マリスちゃん、皆もご苦労様」

ファナは優しく微笑んだ。

「ファナちゃん、これは一体どういうこと？アミュレットの材料はまだ三つしか……」

「ううん。ちゃんと四つあるよ……」

ファナはそう言うのと、ゆっくりとシグが寝ているベッドに歩いた。
(シグ様、これから私が行う無礼をお許しください)

そして、ファナは今まで溜め込んでずっと出せなかった想いを込めてシグの頬に優しく口づけをした。刹那、それまでただの素材だった三つの材料とシグとが激しい光を放ち始めた。

「うお、何だこの光は！」

「ファナ、あんたシグに何をした!？」

「感じます。とても強い波動が……暖かな力を感じます！」

「うん。あたしも感じるよ。これはファナちゃんの春の力……」

「もしかしてアミュレットの最後の材料って……」

ノアが言いかけると、それまで強い波動と光を放っていたシグの体はもとに戻っていた。

「何も変わっていないぞ？」

ア ril は眠ったままのシグの全身を見渡すが、特に変化はない。
いや、変化はあった。それは、彼の首元に下がっている一つの首飾り――

「これがアミュレット……？」

「綺麗…」

「これでシグ様は助かったのでしょうか？」

セラの問いに対する答えが正しければすぐにシグは目を覚ますはずと誰もが思うだろう。しかし、シグの目は一向に開かれることはなかった。

「遅すぎたのかよ…！」

ローナの握りこぶしが彼女の激しい怒りを表す。他のメンバーも目を見張ってシグの復活を待つが、シグの体はピクリとも動かなかった。

誰もがシグ復活に絶望を感じていると、外から精霊たちの悲鳴が聞こえた。ファナ以外の全員が弾かれたように外へと飛び出した。

「何事ですか!？」

「わからない。憩いの広場から悲鳴が聞こえたので巫女たちを総動員して向かわせた。お前達も急いでくれ！」

巫女はそう言うと言自分も剣を携えて憩いの広場へと走った。アリエルたちも彼女に続いて悲鳴が上がった憩いの広場へと向かった。

憩いの広場にいたのは総勢十数名の兵士と……

「姉さん…」

ノアは低い声でつぶやいた。

「ここに来ればお前と、それからシグに会えると思っていた…」

ルミネはボソリとつぶやいた。

「私は今日こそお前を連れて帰る!これだけの者がいる中でよもや戦おうとはしないだろう。おとなしく私と来るのだ」

「……………」

「うん、なぜ返答しない?それとも戦えない者を巻き込んででも私の命令を拒むか?」

「……わかりました、姉さん」

「ノア!？」

「ごめんなさいアリエルさん。シグさんがそうであるように私にとってもここは大事な場所だから、だから私は行きます」

ノアは静かにその場の全員に別れを告げると、ルミネの元までゆつくりと歩いた。

「総員、撤退しろ！」

「待ってください！」

背中を見せて撤退の姿勢を示すルミネにセラが叫んだ。

「貴方はどこでノアさんがここにいることを知ったのですか？」

「ふん、どこまでも愚かな者たちだ。私は度々お前たちが光の柱とやらを経由してここに出入りすることを見ていたのだ。モルグナードに流れたという情報を元にオールゼットを中心にノアを探してきた時にな。最初に見たのはシグがフォルナの森でこいつを拾った時だったか。まあ、今更そんなことを知ってもどうにもなるまい」

今度こそ背中を向けて去っていかうとするルミネを今度はア ril が引き止めた。

「今度はお前か……」

「ああ、そうだよ。お前の目的はノア以外にシグも含まれているんじゃないのか？ いいのか、あいつに会っていかなくて」

「何故、私が成り下がり者の男に会わねばならない？」

「理由を聞かなくていいのかって聞いてるんだよ」

ア ril のその言葉にルミネは鋭くノアを睨みつけた。さすが、この辺りは姉妹だけはある。ノアの表情同様、ルミネも思っていることがすぐに顔に出る性格のようだ。

「ふん、どこまでこいつに聞いたのかは知らないが下世話もいいところだ。私は私のやり方で奴とケリをつける。このようなやり方は好かん！」

ア ril は何とかシグが出てくる時間を稼ぐためにルミネを再び引きとめようとしたが、彼女の耳にはもう誰の声も受け付けていなかった。

過ぎ去っていくルミネの背中にアリルは今度こそ声をかけられずにいた。

「アリルさん…」

セラが不安げな表情で彼を見上げる。アリルは「仕方ねえだろ…」と悔しそうにつぶやいた。

「あいつは任務を全うしたんだ。ノアのことだって、これでいいはずだ」

「アリル！それが仲間だったノアという言葉かい！？」

「うるさい！これ以上、俺にどうしろって言うんだよ！理由を聞かせられて事情の生理もできていない俺にどうしろって言うんだ！」

アリルに怒鳴られて、さすがのローナもひるんで次の言葉が言えなくなる。

「ずるいんだよ。シグもノアも、俺のことを仲間だと思ってくれるくせに自分たちのことを何一つ話してくれねえじゃねえかよ…」

…

「…ごめん、アリル。少し言い過ぎたよ」

「いや、俺こそお前らに当たりすぎた。悪い…」

互いに謝罪の言葉を交わすものの、やはりどこかすっきりとはしなかった。このままでは今までの出会いやしてきたこと、話した言葉が全て無駄になってしまう。

「くそ！」

アリルはゼル・リアに降りるための光の柱がある森へと走った。

「アリル！どこに行くのー！」

「ルミネを追うんだ！このままで終わらせるかよ！」

アリルは一度だけ振り返ってそう叫ぶと、四人の少女の制止もきかずにひたすら走り出した。

第九章（前書き）

水晶の洞窟で精神崩壊を起こしたシグを助けるためにそれぞれ動き出した仲間たち。その苦労もあって、シグを救える可能性がある聖印を作り出すことに成功するが彼は目覚めることなく眠り続けたままだった。

第九章

く拭えない過去く

ア ril たちが外で起こった騒ぎの鎮圧に向かっている頃、ファナはシグが寝ている部屋でじっと彼の復活を待っていた。しかし、彼はいつまで経っても目を覚ますことはなく、外の騒動がやけに静かになっていることも気になった。

「シグ様……どうして目を覚ましてくれないのですか？」

ファナはそこである可能性について考える。このようなパターンの出来事はなかったにしても似たような事件で起こる症状についてはある程度前神からの知識や書物による記述で知っていた。

（人は一つのがきっかけで過去の辛い記憶が蘇って殻に閉じこもってしまうことがあると言うけど……まさか？）

ファナはシグから彼の過去の話について一切聞いた事がなかった。シグのことだからきつと謙遜して話さなかったのだろうとファナは思っていたのだが、ノアが現れたことでその可能性は低いということとはわかっていた。だとすれば、シグが目覚めないのはその記憶に直面している可能性が高い。

（もしものがあれば、シグ様は一生……）

「そんなの、私は……嫌です」

そうなるくらいなら――

（あの時、別れた後からシグ様に何があったのか私にはわからないけど……）

だけど――

「好きな人は失いたくないんです！」

ファナの体は瞬く間に一つの輝く球体となり、シグと一つになった。ファナがシグに憑依したのだ。憑依化することで彼の意識の中

に潜り込み、シグが見ている記憶を垣間見ようというのだ。しかし、注意しなければならぬのは、その記憶にファナ自身を取り込まれないようにすることである。アミュレットの効果により、ファナが憑依したことで暴走することは防いでいるのでファナの体がシグの意識内で消滅することはないのだが、彼の記憶の重さに負けてしまえばシグ共々一生出ることのできぬ精神の狭間に追いやられてしまう。

ファナは慎重にシグの意識の中をまるで水の中を泳ぐようにして進んでいく。シグが今までに見てきた出来事が流れるようにファナの横を過ぎ去っていく。これらの記憶の断片のどこかにシグがいるはずだ。ファナは彼を見失わないように目を凝らして意識の流れを遡っていく。

（見つけた！）

記憶の流れの中で唯一と待っている空間、そこにシグはいた。彼は黙ったままその記憶をずっと眺めるように見つめていた。

「シグ様！」

「……………」

ファナが呼びかけているにもかかわらずシグはその場に立ち尽くしたまま振り返りもしなかった。ファナがもう一度呼びかけようかと思ったとき、シグはそのまま記憶の中に溶け込むようにして、その中に入ってしまった。ファナは急いでそれを追いかける。

記憶のトンネルをくぐると、そこはゼル・リアに存在する一つの王国だった。

（シグ様の記憶の中……？）

ファナはシグを探すために城の中を一人散策する。

流石は人間界とも呼ばれたゼル・リアの一国の城である。ファナは神殿区の広い建物の中を経験しているため少しはこのような作りの建物にはなれているつもりだった。しかし、実際の作りはファナが思っている以上に厄介なものだった。長い廊下に、いくつに別れた部屋、階段、すべてがややこしいものばかりだった。それでもフ

アナは諦めずにシグを探す。この記憶の中のどこかに彼は必ずいるはずなのだから。

やがてファナは城の開けた場所に出た。

（ここは…？）

一大王国の庭、というには少しばかり狭く、華やかな雰囲気は微塵もない。土ぼこりが風に乗って舞い、広場の中央には変わった置物のような人形がある。

「よいか！！」

（キャ！？）

突然聞こえた大声にファナが後ろを振り返ると、そこでは司令官らしき一人の大男が軍人たちに向かって何やら言い聞かせていた。

「我々帝国の軍人は無益な殺生を繰り返す残虐非道の軍人にあらず！常に誇りを持ち、市民を守ることを第一に考えるのだ！」

「オー！！」

男たちが一斉に敬礼をする。

そのうちの一人は、どこか見覚えのある姿をしていた。

（シグ様？）

そんなはずはない、とファナは目を疑った。では、あの場にいるシグはいったい何なのだ。その答えはすぐにわかった。軍服を着たシグの上にもう一人のシグ、すなわち今のシグが彼を見下ろしていたからだ。

（それじゃああのシグ様は軍人時代の…？）

ファナは驚きを隠せなかった。記憶のことで精神が負けてしまう場合というのは大抵幼児や少年時代の出来事が多いという事象がわかっていたために、まさかこんな近い記憶が呼び起こされるとは思っていなかった。しかし、それは同時にファナにあることへの確証を持たせたのだった。

軍人時代のシグが広場を完全に去っていき、辺りの景色がフェードアウトしていく。

次のシーンは、帝国とは違う場所だった。廊下は冷たく、先ほど

の城の中のように絨毯など敷かれていない。壁はぼろぼろに崩れ去り、骨組みが見えているようなどう見ても寂れた遺跡の中だった。今度もシグと離れ離れになってしまったためファナは単身遺跡の中を同じようにさまよっているシグと、過去のシグを探す。

キーン！

ファナの耳に金属と金属がかち合う音が響いた。すぐに誰かが戦っていることを察し、時折聞こえる叫び声と金属音を頼りにその場所へと向かう。

バシン！

相手の一撃でシグと共に戦っていた兵士は地面に膝をつく。

「くそ…」

若い兵士が悔しそうに戦っている相手を見上げる。二人とは対照的に行きはまったく上がっておらず、小さな傷がぽつぽつと体にあるだけだった。

「なかなかやるな」

敵の男はニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべながら二人の出方を待っている。

「くそ、シグに来てもらってもこいつに勝てないとは…！」

（善戦……とはいえないがいい勝負はしているはずなのに）

この余裕はどこから来るのだろうか、シグはそう思っていた。武器が遠距離攻撃のできる銃だからだろうか。しかし、並の銃歩兵の鉄砲玉くらい軽く見切れるほどの速度は持ち合わせていたはずだった。

「王子はお逃げください」

シグは敵に聞こえぬようにこっそりと若い兵士に耳打ちした。もちろん、彼は首を振った。

「私はお前と奴を追う旅をしてきてお前のことがすごく気に入ったんだ。約束したではないか。奴を逮捕して、共に酒を酌み交わすぞ！」

「王子、貴方はやがては帝国を治めるべき人。こんなところで朽ちてはなりません」

シグはそう言うと、再び槍を構え敵に向かって突進した。「逃げろ！」と一言言い残して。

「ふん、馬鹿が！」

敵は余裕たっぷり銃の引き金を二回連続で引く。それを見越していたシグは槍をバネとして跳躍して銃弾を交わした。

「何!？」

流石に焦りを見せた敵。

鈍い音共に敵の血が空けられた穴から吹き出した。

「やった…！」

王子は思わずそう叫んだ。シグは相手の銃弾を見事に避けて、致命傷となる一撃を加えたのだ。

「く、くくく…くはーはははは！し、死ぬならお前らも道連れにしてやる！」

「!？」

シグがそこに視線を落としたときにはもう遅かった。背中に仕込んであった隠し武器のボタン。

「死ねええええ!!!」

ボタンを押した乾いた音と同時に子供の腕の太さ大のミサイルが王子目がけて発射された。

激しい爆音が遺跡内に響いた。

炎に包まれた王子の体をシグは見た。黒焦げになって、頭から溶けていって、最後には周囲に流れ出た血すら爆発の炎で焦がしてしまった。炎はすぐにその命を落としたが、王子の姿はどこにもなかった。ミサイルの直撃をもろに食らった王子の体の破片は爆発の炎であたかたもなく消し飛んでしまったのだ。

「王子……」

シグはよろめきながら、王子がさっきまでいた場所に歩いていく。

「おう、じ……?」

シグは黒く変色した床に目を落とした。そこに落ちていたのは、王子の唯一の欠片だった。

シグはそれを自分の両手で包み込んだ。熱い何かが目と喉の奥からこみ上げてくる。

耐えられない、耐えられない、耐えられない！！！！

シグは塩分と酸味を含んだ液体をその場に思い切りぶちまけた。

しばらくして三度景色がフェードアウトしていく。今度の場所は、再び城の廊下だった。最初の場所と違うのは部屋の扉に書かれた総指揮官のプレート。その部屋の中から誰か出てきた。

（シグ様だ…）

ファナはすぐにその男がシグだとわかった。しかし、今と違って体は痩せ細く、頬はこれでもかというほどこけていた。

重々しい表情で総指揮官の部屋を去っていくシグ。そして、それを待ち伏せていたかのように一人の女性が現れた。

（あの人は…）

直接会ったことはないが、セラやローナからの報告で聞いていた。

（あの人がルミネさん？）

ルミネはシグに近づくと、いきなり何かを叫びながら詰め寄った。しかし、シグは何を言われてもただ首を振るばかりだった。

こんなに近くににいるのに、二人が何を話しているかは聞こえない。だが、最後に言ったシグの一言だけは聞こえた。

「さよなら、ルミネ」

その一言に、ついにルミネは何も言えなかった。シグが長い廊下を歩き、去っていく。ルミネはそれをただ呆然と見送ることしか出来なかった。

「私は、私は絶対にお前を許さない。絶対に、許さんぞお！」

誰もいない廊下でただ一人ルミネは叫んだ。

「僕は王子を守れなかった」

ファナがハッと我に返るとそこは先ほどの城の一角ではなかった。暗闇に閉ざされた精神の狭間だった。

「僕がもう少ししっかりと敵の状況を把握して戦っていれば、最後の奴の攻撃にも気づくことができて、王子に逃げろなんて言わなか

っただろう。おそらくあいつは自分が死んでもあのミサイルで相打ちに持ち込むつもりだったんだ」

「……………」

「僕の判断ミスで一人の人を形すら残さず死なせてしまったんだ…」
ファナは黙ったまま目の前に立つシグの目を真っ直ぐに見つめる。
「ファナ、許容量オーバーで眠りについているときに君を助けた時の夢も見た。僕は、もうあの頃の僕じゃない。こんなにも汚れてしまった。もう君にパンも暖かな思いでも与えてあげられない。君の知っている僕から僕は遠く離れてしまったんだ…」

「……………」

「僕はもうこのまま目覚めないほうがいいのかもしいね。もう一度目覚めてしまったら僕はまた同じ過ちを繰り返してしまう。誰かに物を与えるどころか大切にしているものを奪ってってしまうだろう。だから……………」

「それでも、いいです」

ファナはそう言って優しく微笑んだ。

「私はシグ様に奪われるのであれば本望ですよ。私はずっとシグ様と一緒にいたいんです。たとえ貴方に命を奪われても心はずっと貴方のそばにあります」

ファナはシグと体を重ねるように暗闇を移動する。

「貴方が生涯奪うことができるものはたった一つだけです。それ以上は絶対に奪わせません」

やがてシグの体とファナの体が一体となり、暗闇だった周囲を光織り成す草原と化す。

「ここは……粹な場所だな」

『私たちが初めて会った場所です。ほんとに夜でしたけど』

そう言ってファナはてへ、と舌を出して笑う。

「この頃の僕はまだ、純粹だったな…」

遠い目をしてつぶやくシグにファナは小さく首を振った。

『シグ様は今もとても純粋なお方です。ただ、ほんの少し迷いがある』

っただけ』

ファナの言葉にシグは「そうかもしれないね」と口元を緩めて笑った。

「行こう。皆が待ってる」

『はい』

二人は光の海を泳ぐようにして意識の外へ向かって旅立っていった。

第九章

〈復活〉

気がつくと、シグはベッドの上に寝かされていた。目を開くと懐かしい神殿区の客間の天井が映った。

「おかえりなさい、シグ様」

「ただいま、ファナ」

シグは自分の顔を上から満面の笑みを浮かべて覗き込んでいるファナに微笑み返すと、ベッドから身を起こした。

「ア ril たちのところへ行こう」

ファナは小さく頷くと、シグの後ろについて神殿区の外へ向かった。

「あっ！」

「君は、スウちゃん？」

「どうしたの スウちゃん？」

神殿を出たシグとファナの胸に飛び込むようにしてスウとその場と一緒にいたココルが駆け込んできた。

「お兄ちゃん、皆が皆があ……」

「ココルちゃん、どうしたの？ まずは落ち着いて」

「スウちゃんも、ね？」

胸に飛び込むなりずっと泣きじゃくっている二人の少女を落ち着かせながらシグはゆっくりとココルとスウに話を聞いた。二人が泣きながら語る断片的な話によると、ルミネがどういった経路かはわからないがラ・ジェラーデ（ここ）のことをかぎつけてノアを取り返しにやってきたらしい。ラ・ジェラーデの住人を盾に取られ、ノアは連れていかれてしまう。それに腹を立てたア ril がセラたちと共にルミネの後を追ったらしい。

「じゃあア ril さんたちは今、ゼル・リアに？」

「早く追いかけてあげてよ。あいつらにやられちゃうよ!」

「わかった。二人とも、教えてくれてありがとう。大丈夫、皆は絶対に僕が守って連れて帰ってくるから」

「コルちゃん、スウちゃんはうちに帰って待っててね。きっと、大丈夫だから」

「テイル!!」

コルとスウをなだめるファナの横でシグは大きな声を出してテイルを呼んだ。

「キュッ!」

シグの帰りを首を長くして待っていたテイル。もはや、長い間聞いてきた彼の声をたった数日で忘れるわけがなかった。小屋の扉を突き破り、すぐに彼の元へと走っていく。自分が必要としてくれていた彼のために。

「心配を掛けたな、テイル」

テイルはわざと不機嫌そうな目をしていた。その目はまるで「まったくだ。どんだけ心配したと思っているんだよ」とでも言っているような目だった。

「早速だけどアイルたちが大変みたいなんだ。すぐに追ってくれ!」
「キュ!」

まかせろ、と言わんばかりに一声鳴くとテイルはシグと自分に乗るのは初めてと言うファナを乗せて光の柱を通してゼル・リアのクラーヌ草原へと降り立った。

終章（前書き）

ついに完全復活を果たしたシグはテイル・ファナと共にアリルたちを追って決戦の地へと向かう。

終章

「決戦」

「ファナ、セラたちの力の方向はどっちだ？」

テイルを走らせながらシグは尋ねた。

「ここから南東の方角です」

ファナはあらかじめ聞かれることを予想していたかのように即答した。

「南東といえばグレム砂漠のある辺りか。ムル貝を取るときはやめたほうがいいと念押しされた場所だけど…」

そう、オストリザードで早々と抜けようとするものを次々と砂の中に沈めていく驚異の砂漠だ。

「キュ、キュ？」

どうするんだとせかすようにテイルが鳴く。しかし、シグは迷わず「行こう」と宣言した。今はいち早くア ril たちと合流することが大事なのだ。

ルミネはああ見えて割と堅物な軍人だ。任務遂行のためにア ril たちを本気で倒しかねない。もっとも、ア ril とてそう簡単に死ぬような男でないことは百も承知だが、軍隊は集団戦闘のプロ。個々の戦闘能力よりも集団になって掛かってこられたときのほうが恐ろしいのだ。まるで一匹の小さな虫に対して多勢で挑む蟻のごとくあつというまに取り囲まれて終わりだろう。

（しかし、わからない。どうして彼女はまだ僕を追おうとしているんだ？）

グレム砂漠にある自分の陣地に戻ったルミネは自分のテントに戻

ってきていた。

テントの中にノアを入れるなり部下達のすべてを引き払い完全な二人きりになったルミネはノアの両手を縛り付けていた縄を優しくほどいてやった。

「こんな手荒な真似をしてすまん。しかし、お前にもうこれ以上逃げられるわけにもいかないのだ」

「姉さんは私が魔法で姉さんを眠らせてここを脱出するとは考えていないのですか？」

険しい表情で言うノアに対してルミネはただ微笑するだけだった。「それは私の教えだったっけな。軍人は常に百歩先を見て行動せよ。確かに魔法が使えるお前なら私を簡単に足止めすることはできるだろうな。私の部隊にも魔法の使い手はいるが皆お前ほどの手誰ではない……」

「だったら、縄をはずすなんてことは普通しないのではないですか？」

必死に相手の虚を突こうとするノアだが、ルミネはやはり軽く微笑むだけだった。

「仮に私たち全員を行動不能にしても病を患っているお前が一人で抜けることなど不可能だ。モルグナード地方南部では有名なこの砂漠をな」

「確かに以前までの私の力では無理でしょう。でも、今は違います。私が倒れてもきつと助けてくれる仲間がいます。そして無茶をした私を厳しい顔をして叱ってくれるでしょう」

ノアの自信たっぷりの発言にルミネは黙ったままノアの目を見続けていた。今、自分の目の前にいる妹はもう病に苦しみながらも自分を追いかけていた彼女とは違う。新たにできた友を、仲間を信じてちゃんと二本の足で歩いていた。今までは——この地方で見つけるまでは——受動的な行動しか取れなかったノイアールはここまで成長していたのだ。

そのことに気づいたノアは脳裏にシグの顔を思い浮かべた。

（結局、私は貴様の手の中で踊り続けてきたというのか。昔も、今も…）

突然軍隊を辞めたときは腹立たしかった。悔しくて悔しくてたまらなかった。帝国の軍学校時代からのライバルだった、共に帝国のために戦おうと約束もしたくせに、一つの事件がきっかけでおいそれとその約束を破ったシグが憎かった。事件の真相を聞くまでは……

「姉さん？」

「え？ あ、ああ、すまない」

ルミネは心配そうに顔を覗き込んでいる妹から素早く目を離すと、軽く咳払いをした。

「大丈夫ですか？」

「心配ない。お前も変わった奴だな。仮にも敵に捕まっているというのに呑気に私の心配をするとは」

「私は姉さんのことを敵だなんて思ったことは一度もありませんよ」

「え？」

「だって、たった一人の姉だから。家族すら見放していた私をずっと大切にしてきてくれた人を敵だなんて思えません」

「……………」

「ロックバース隊長！」

「どうした？」

ルミネはテントの外に出ず、中から尋ねた。

「ラ・ジェラーデで対峙したならず者たちが我が陣地に突入してきた模様です」

（ア Ril さん…）

「わかった、すぐに行こう」

ルミネは「下がれ」と凛々しく命令するとテントの中に置いていた騎士剣を腰に携えた。そしてテントを出る直前にふと、ノアに背中を向けたままつぶやくようにこう言った。

「ノア、さっきの言葉は戦場には不必要な言葉だ。以後、慎め」

ルミネはそれだけ言うと、ノアに背中を向けたままテントを去っ

て
い
っ
た。
。

終章

少女の決断

ア ril たちは敵の陣地内で壮絶な戦いを繰り広げていた。もともと戦いは避けえぬと承知の上だったのだが、まさかこんな大乱戦になろうとは敵味方双方とも思ってなにかいなかっただろう。

全ては一人の少女が遊び半分で敵の兵士にちよつかいを出したことが全ての始まりだった。

「なあ、一ついいか？」

ア ril は右手につけた鉤詰め敵の鎧を引き裂きながら隣で戦っているローナに話しかけた。

「あんたらは俺がいない中でいつもこんな壮絶バトルを繰り広げていたわけ？」

「いいや、基本的には穏便にいつも済んでたよ。誰かがいるせいで穏便じゃなくなるんだけどね」

ローナの視線が前線で戦っている、というよりはすばしこく逃げ回っているネルに向けられる。

「ふえ？」

ローナはこっちに逃げてくるネルの首を捕まえると、そのままア ril に見せつけた。

「こいつのせいだね」

「わあ。敵じゃなくてローナちゃんに捕まったあ」

ネルは仮にも捕まったというのにケラケラと笑い飛ばしていた。

ア ril はため息をつきながら今までネルと付き合っていたシグに同情の念を寄せた。一方、そんな戦闘に巻き込まれた戦闘に不向きなセラとマリスは魔法を巧みに使ってそれなりに板についてはきたが、体力はそろそろ危うくなってきていた。

「セラ、私そろそろやばいんだけど…」

「私も……」

「まったく、ネルの遊び好きもここまで行くと犯罪だね」

マリスの言葉にもはや頷く体力もなくなってきたセラは敵の拳を腹に受けてそのまま横に倒れた。

「セラ！」

「この野郎！」

ア rilル の 爪 が セラ を 倒 し た 兵 士 の 鎧 を 引 き 裂 き に 掛 か っ た と き だ っ た。「そこまでだ」という声が上がったのは。

「ならず者の冒険家風情が帝国軍の陣地に何の用だ？もはやただ迷い込んだだけというわけではあるまい」

「もちろん！」

ネルが両手を腰に当てて言った。

「ノアを連れ戻しに来た」

「なぜだ？ノアは私の妹であってお前のものではない」

「あいつは俺の、シグの大切な仲間だ！」

「それが何なのだ？そんな理由で妹を脅かすつもりなら……」

「あいつなら——！」

ア rilル は ル ミ ネ の 言 葉 を 遮 っ て 叫 ん だ。

「あいつなら、こんなやり方で無理矢理仲間と別れるなんてことを黙ってみているわけがない！本人も交えた上で話し合うべきだ！」

「言っただろう？これは軍の命令なのだ。話し合う必要などない。

わかつたらとっと消えろ。目障りだ！」

容赦のないルミネの攻撃に一度は口をつぐんだが、やがてこう続けた。

「……あんた、本当はシグが軍を辞めた理由を知っているんだろ？」

「！？」

ア rilル の 一 言 に ル ミ ネ の 眉 が ピ ク リ と 動 い た。

「あんた、本当はシグのこと……」

ア rilル が 言 い か け た 刹 那、ル ミ ネ の 素 早 い 動 き が ア rilル の 首 元 を 捕 ら え た。

「冒険家風情がそれ以上なめた口をきくようならその首を打ち落としてやってもいいのだぞ？」

ルミネは殺気立った目でア ril を睨みつけた。

「へへ、表情がわかりやすいところは本当に姉妹そっくりだな。俺はこういうのには敏感なんだね。そんな理由でもなければ軍を辞めた男を追おうなんて思わないよな」

「よほど死にたいようだな…」

ルミネが齒を強く食いしぼる音がはっきりとア ril の耳に聞こえた。どうやら完全に堪忍袋の緒は切れているらしい。

剣を握る手に力をこめる。ア ril の喉もとと剣の切っ先とはわずかコンマ数ミリといった距離しかない。それなのにルミネはこの男に對して怒りをむき出しているせいで余計な力を加えていた。そして、その一瞬の動きがア ril に生にしがみつくチャンスを与えたのだった。

「やめろ！」

ア ril とルミネの様子を固唾を吞んで見ていた精霊の少女たちの後ろから聞こえた懐かしい声。少女たちが一斉に後ろを振り返る。

「あ、ああ…」

セラはあまりの出来事に言葉が上手く紡ぎ出せない。マリスとネルはホッとした面持ちで逆光に輝く彼の顔を見上げた。

ローナは彼の復活は絶対だと信じていたためか、感激よりも先に口元がほころんでしまう。そして、ア ril はルミネに剣を突きつけられた状態で「まったく、憎い登場の仕方だねえ」と笑った。

舌打ちをしながらルミネはア ril の喉もとから剣を離した。

「ねえ、どうしてここがわかったの？」

「ファナに、君たちの力をたどってもらったんだ」

その一言に四人の少女とア ril がテイルに座っているもう一人の人物に目を向けた。

そんな彼らに向けてファナは一言「ついてきちゃった」と微笑んだ。テイルから飛び降りたシグは改めてルミネと対峙した。

「ルミネ、ノアを返してほしい。こんなやり方は君らしくない」

「軍隊の隊長を務めるのに『らしさ』など必要ない。必要なのは実績のみだ」

「だけど僕はこんなやり方は認めない」

「お前に認められる必要はない」

「あるよ！彼女は僕や、ここにいる皆の仲間なんだ！君が知らない間に彼女にもいろいろあったんだ。せめて、彼女と話をさせてくれ」

「それはできん相談だ」

「ルミネ！」

なおも食い下がろうとするシグにルミネはやれやれと肩をすくめた。

「これが瞬撃のアルグースと言われ数々の武勲を立て、我々同期の中でも一番に小隊長に上り詰めようとしていた男なのか？まったくぬるい！」

「ルミネ…」

「軍にいた頃の貴様のほうがまだ骨があった。私の支えになった！なのに……」

ルミネは一度収めた騎士剣を今一度抜き、シグに向けた。

「ノアを助け出しのなら私を倒せシグ！」

ルミネの弧を描いた衝撃波がシグに直撃する。その後もルミネはシグに攻撃を与え続けるが、シグは槍で防御するばかりで反撃はしなかった。

「どうした？なぜ反撃をしない。素早い槍はどうした！？？水晶の洞窟で見せつけたあの絶大な力はどこへいった！？？」

「できない！これは戦いをしなくても解決できる問題だろ？冷静に話し合えば…」

「腑抜けたことを抜かすな！反吐がでる！」

刹那、ルミネの鋭い突きが回復したばかりのシグの左腕を貫いた。「あの程度の事件で軍を辞め、平和と言う名の殻に閉じこもり甘い理想ばかり並べている。そんな貴様を少しでも認めていた自分が今

…」

「!？」

シグはルミネの異変を感じ取り、身を引こうとしたがそれよりも早くルミネはシグの懐に入り込んでいた。

「腹立たしい！」

ルミネの一撃がアーマーを着けているシグの体をそれごと斬り裂いた。たまらずシグは砂の上に片膝をつく。

「今の貴様は所詮そのならず者と同じだ。そんな貴様が私に立ち向かうこと事態が既に愚かしい行為なのだ。わかったらとっと立ち去るがいい」

そう言って背中を向けるルミネだったが、すぐに何かの気配を感じてゆっくりと振り返った。あの一撃を受けたというのに、シグにはまだ立ち上がれる力があつた。

（絶対に諦めない…）

「絶対に僕は諦めない！」

「もうやめてください！」

悲痛な叫び声と共に打ちあがった爆音の魔法がはるか上空で爆発して、その場にいた全員の注意がそちらに向いた。

「ノア…」

「もうやめて姉さん。二人が傷つけあうのはもう耐えられないです…」

「ノア……」

「私は姉さんのことがとても大切です。でも、シグさんやファナさん、皆のこととても大切なんです！だからこれ以上傷つけあうのはやめて！」

「しかし……」

「しかしもかかしもねえだろルミネさんよ」

シグが現れて以来ずっと黙っていたアイルが重々しく口を開いた。「ノアがああ言っているんだ。ひとまず互いに武器をしまったらどうだよ？」

「ア rilル…」

「ノア、私は…」

言いかけたルミネだが、ノアの悲しげな目にしぶしぶ武器を腰に収めた。

「よし、じゃあ本題だ。ノアは結局俺たちとルミネのどっちをとるんだい？」

「そんな言い方は…」

反論しようとするがア rilルに「お前は黙っている」と一括され、シグは大人しく引き下がる。

ノアは今、この瞬間までどちら側に戻るかを決めかねていただろう。しかし、ノアはこの時のための答えをちゃんと用意していた。

「私は姉さんと一緒に帝国に戻ります」

その一言にシグではなく、精霊たちが「何で!？」と声を大にしてノアに詰め寄った。

「ごめんなさい、皆。だけど、私の旅の目的は姉さんが知らずに別れたシグさんを見つけ出して、彼から直接姉さんに何も言わずに去った理由を聞くことだった。その目的はもう十分に達成しました。

私がここにとどまる理由はもうないですから」

「理由なんていっぱいあるじゃない! もっと私たちと一緒にいようよ!」

「そうだよ。ノアちゃんとせっかく友達になれたのに…」

「ごめんねネルさん、マリスさん。でも、帝国の軍人になればいつでもというわけにはいかないけどこの地方に来る機会だってあると思うの。その時は真っ先にあなたたちに会いに行くから」

「それでも、それでも嫌だよ。行かないでよノア!」

「やめな、ネル」

ノアからしがみついて離れないネルをローナが無理矢理引き剥がす。

「ローナさん…」

「決心は揺るがないのか?」

ローナの問いにノアは静かに頷く。

「そっか……でも、あんたが決めたことだ。あんたの意思でいくのならあたしは止めないよ」

「ローナさん……」

「ノアさん、これを持っていてください」

セラはそう言って自分の髪をまとめていたリボンをはずしてノアに手渡した。

「帝国に帰っても私たちのことをずっと覚えていてくれるように……お守りです」

「セラさん……」

「ノア、これはあたしからだ」

ローナはそう言ってポケットの中から小さな石を取り出した。

「あたしが作った夏の結晶をさらに硬く固めたものだ。防御力が上がる魔法をかけてあるから魔導師のあんたにはちょうどいいと思う」

「ありがとうございます、ローナさん」

「ノア、私からはこれをプレゼントするよ」

「あたしからはこれー!」

マリスは得意の調合で作った指輪を、ネルは鎖でできたアクセサリをそれぞれ手渡した。

「ノア、短い間だったけどありがとうな。あんたと一緒に冒険をして、俺の冒険家人生も少しは潤った感じがしたぜ。向こうに戻っても頑張れよ」

「ア ril さん、ありがとうございます。私もア ril さんと冒険ができて楽しかったです」

ノアはそう言うってにっこり微笑んだ。

敵の陣地だというのにすっかり歓談モードのア ril たちの後ろでシグは黙ったまま立ち尽くしていた。

「キュウ……」

テイルが心配そうにシグを目を見つめる。

「ああ、わかっているよ。だけど、やっぱり急にいなくなるのは寂

しいよ」

シグは突然訪れた仲間との別れを素直に受け入れられずにいた。そんなシグの背中をファナはそっと包み込んだ。

「ファナ……」

「シグ様……」

「……」

「お祝いしてあげなきゃ……」

「……」

「ね？」

「うん、そうだよ」

シグは小さく微笑んだ。

「シグさん」

「うわっ」

気がつけばノアはシグのすぐ目の前で優しい笑顔で彼の顔を上目遣いで覗き込んでいた。

「シグさん、そんなに悲しい顔をしないでください。軍人になって私も私はずっとシグさんの仲間のままですから。この数週間、シグさんと過ごした日々、シグさんと交わした言葉は私の記憶にずっと大切になっておきます。またいつか、シグさんと会うその日まで」

「ノア、僕は……」

「その先は言わなくてもいいですよ」

シグの言いかけた言葉に先駆けてノアが彼の唇に人差し指を当てた。

「ただ……」

「？」

「姉さんの気持ちはいつかちゃんと受け取ってあげてくださいね。シグさんがどちらを選ぶにしても」

「ノ、ノア……」

「？」

ルミネは顔を朱に染めて叫び、ファナはきよとした顔でノア

が微笑むのにあわせて微笑んでいた。

ファナとルミネ。直接的な戦いは起こらないだろうが、両者の間に挟まれたシグはこれからしばらくは大変な日々が続くだろう。

シグは苦笑しながらノアがルミネの元に帰っていくのを見送った。

終章

季節の変わり目

(これでいいんだよな…)

夕日を背に去っていく帝国の軍隊のどこかに溶け込んでいるノアの背中を見送りながらシグは立っていた。

「シグ様、ノアさん立派な軍人さんになれるといいですね」

ファナの笑顔は灼熱の砂漠で見ても春の日差しのように暖かかった。そんな彼女にシグは優しく微笑みながら小さく頷いた。山に隠れていく太陽のように、帝国軍人たちの姿も小さくなっていく。

ルミネ・ロックバース。

帝国本国からの要請を受け、逃亡したノアを連れ戻しに来たシグと同期の軍人。彼女の真意はついにシグに伝わらないままに終わっていた。しかし、ルミネはきっと諦めずにシグを追う旅に出るだろう。そして今度こそ……

「ヘイヘーイ、暗いぞお前ら！」

「うわぁ!？」

「きゃ!？」

ア ril とネルの背後攻撃に二人は思わず声をあげた。

「仲間の門出なんだ。最後まで笑顔で送ってやらなきゃな」

「そうそう。パァーっとはしゃごうよー！」

「お前ははしやぎすぎだったの！」

ローナのげんこつを受けてネルはいつものように撃沈する。

「二人がそーんな顔をしていたらノアも勇んで国に戻れないでしょう？」

「マリスちゃん…」

「ノアさんはきっと私たちのところに帰ってきてくれますよ。いつになるかはわからないけど、絶対に」

「うん、そうだね」

シグは小さく頷いた。

「さあ、帰ろうぜ。それでもって、今夜は宴会といこうぜ。ラ・ジエラーデの住人にゼル・リアの酒の上手さを教えてやるぜ！」

「わあーい！さすがアリル！」

「ネルちゃん、あんまり飲んじゃだめだよ。ここ数日修行をサボったんだから急いで他の皆に追いつかないと」

「わかってまーす！」

ネルははしゃぎながらアリルと二人で砂漠でと競走なんか始めている。

「やれやれ、本当にわかっているのかな？」

「シグ、あれがわかっている反応なわけないだろう？」

「絶対明日になったら酔いつぶれているだろうねえ」

「今から胃に優しいものを作ったほうがいいでしょうか？」

ローナたちの会話にファナはクスクスとおかしそうに笑った。

「私の周りは本当に面白い人たちばかりですね」

「それって僕も含まれているのかい？」

「フッフ、秘密でーす」

「参ったな…」

苦笑しながら後ろ頭を掻くシグにテイルが愉快そうに高い声で一声鳴いた。

「そうだね。帰ろう、皆が待つ場所へ」

太陽が沈んだグレム砂漠の空には今日も満天の星空が広がっていた。

明日もきっと晴れるだろう。

あとがき

season's Questをご愛読してくださった皆さん！
最後まで読んでくれてありがとうございます！

ハッ……まさか最近流行のあとがきから小説を読む、なんてこと
してないですよね？自分は信じてますよ！（涙目）

いえ、あとがきから読んでもらってももちろんかまわないのです
が（この作品を読んでくださる方、下さった方は皆神様ですから！）
やっぱり本筋を読みおわって、その後に作者がどんなことをのたう
ちまわっているか見物するほうが気持ちいいじゃないですか？

え、そんな趣味はない？失礼いたしました。

あとがきとして登場キャラクターのプロフィールなどでものせて
みようかと思っています。

シグレット・アルグース

年齢22歳。非常にお人好しな青年であるシグはその人当たりの
よい性格ゆえにいろいろなトラブルに巻き込まれがち。キラービー
にも殺されそうになりました。もともと軍人だったので正義感が強
く、足の速さも手伝ってパーティの斬り込み隊長の役割も果たして
いました。

ファナリアーテ・ミルチェリーヌ

年齢18歳。四季の精霊たちを統率するリーダーですが、当の本
人はのほほんとしていて非常にほんわかとした女の子です。そのた
め、たまに神様としての役割を忘れしちゃったりしちゃいます。
（もちろん本人は無意識で）戦闘キャラに加えようか最後まで迷い
ました。でも、いいところは持っていてるので案外ちゃっかり

屋さんだったりするかも。

セラ・マップリング

年齢17歳。冬を司る巫女見習い。ファナの幼馴染の中では一番大人しく気弱。大きな声を出されると無意識にすくんでしまいます。純粹だが、少々世間知らず。本人は莊思っていないが意外と人をまとめる素質がある。助けてくれたシグを心の底から尊敬しています。この娘とファナでシグの取り合いをさせようと当初は考えていましたね。

マリス・パランジア

年齢17歳。一応秋を司る見込み習いだが、本人にその気はまったくなく、ゼル・リアで珍しいものを探したり、細工・調合のほうに興味を持っています。季節を操る力もあるにはあるが、いまだに制御ができないでいますが気にしない。失敗をしてもへこたれない。明るく前向きな少女。

ローナ・モーニンググローリン

年齢18歳。夏を司る巫女見習い。体を鍛えるのが好きでよくゼル・リアの魔物を相手に特訓をしているが、マリスと違い巫女修行を怠ってはいない。何事にも常に全力投球な熱い少女です。幼馴染のネルの暴走を止めるのが彼女の日課と化していたり。

ネル・サンフラワー

年齢18歳。18歳とは思えないほど外見は幼い。そして、中身も相当幼い。興味がわいたことには全力で食いついていきますが、その分さめるのも早いのはやはり子供の特徴だろうか。善悪の区別なく周囲をトラブルに巻き込むトラブルメーカー。楽しければそれでよいのです。余談ですが、この季節の精霊四人衆には苗字にすべて季節の花の名前がついています。

ノイアール・ロックバース

年齢16歳。帝国軍の魔術師隊の一員だが、病気がちで隊にはあまり参加できないでいる。魔力は人間の中では高いほう。非常に姉想いで、その行動原理はどちらかというとルミネのためのことが多い。

ア rilル・マスカール

年齢21歳。モルグナードの南部を中心に冒険している冒険家。好奇心旺盛でお調子者だが、約束したことは守る律儀な面も持ち合わせている。軽口でパーティのボケ担当だったが、最後は意外にもおいしいところを持っていたりしてる。

ルミネ・ロックバース

年齢20歳。若くして小隊の隊長を勤めている女性。ノアの姉。ルミネもまたノアと同じように常に妹のことを考えているが、照れ屋で素直じゃない性格なためやりかたがしばしば強引になってしまいうことが多い。ア rilルにシグのことを想っていることを悟られるも懸命に怒りで隠そうとしていたのは非常にかわいい一面である。

サブキャラ紹介

テイル

年齢？歳（人間とどれくらい年のとり方違うんだろ？）何気に人間や精霊をそっちのけて人気の高いオストリザードのテイル君。彼とシグのやりとりは作者の自分でさえ何度読んでもあきません。首傾げたり、寂しそうに鳴いたり（笑）元ネタはもちろんあの黄色い鳥です。わかる人にはわかるはず？

ココル

年齢7歳。春の精霊の子供。とっても大人しくいつも人の後ろに隠れています。同じ大人しい性格のセラと一緒にいることが多い。

スウ

年齢7歳。冬の精霊の子供。ココルの良き遊び仲間だが、活発な彼女はよくココルをおいていってしまいう、ココルにとってはちよつと困ったお友達。

あとがき2

あとがきの後半は世界観と設定について軽く説明したいと思います。

ゼル・リア：人間や動植物、そしてそれらが変化した魔物がすむ世界。地球暦換算すればだいたい18～19世紀辺りをモチーフにしています。しかし、機械文明は微小ながら発達している。大きく三つの大陸に分かれており、シグたちが動き回っていたのはそのうちの中心大陸と言われているノートス大陸のモルグナード地方。

ラ・ジェラーデ：四季を司る精霊がすむ世界でゼル・リアに四季が存在するのは彼女たちのおかげである。精霊の世界といえども町並み自体はゼル・リアの町々とそれほど文明は変わらない。ラ・ジェラーデは大きく3区画に分かれており神殿、寺院区、憩いの広場がある。また、季節神の影響を大きく受けるため、どの季節の精霊が神になるかによって若干ラ・ジェラーデの気候が変わる。

精霊：人間とは異なる生き物でその姿は動物から人型まで様々だが、人間の間では宙を舞う生き物（妖精）の姿が一般的に知られているが、妖精と精霊はまた別の種族である。精霊は他にも風の精霊や太陽の精霊などがある。精霊はゼル・リアのすべての生き物に憑依することができ、力を与えとも言われている。

オストリザード…ダチョウのようにしなやかな足を持った爬虫類の仲間。爬虫類だが、突然変異のためか短い羽のようなものがあり、わずかな時間ではあるが滞空することができる。

（属性と憑依）

精霊は一般に植物を含む全生物に憑依することができる。憑依する

ことでその者の能力を向上させ、さらに自分の司る属性の魔法を付加する。属性は一般に火・水・風・雷の四つに分類され、それぞれの力を持つ精霊が憑依することによって、その属性の魔法が使用できようになる。しかし、植物のように意思を持たぬ物や、邪悪な心を持つ者（＝魔物）に対しての憑依は精霊の自我を封印、または消去してしまう可能性がある。季節を司る精霊は基本的に、全ての属性に属する存在であるが、彼女らは力を持つことを好まない性格なので、その中の一つの属性に重点を置いている。春の力は雷を、夏の力は火を、秋の力は風を、冬の力は水をそれぞれ基本属性として持っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8676a/>

Season 's Quest

2010年10月8日15時29分発行